

東北アジア研究センター  
CNEAS

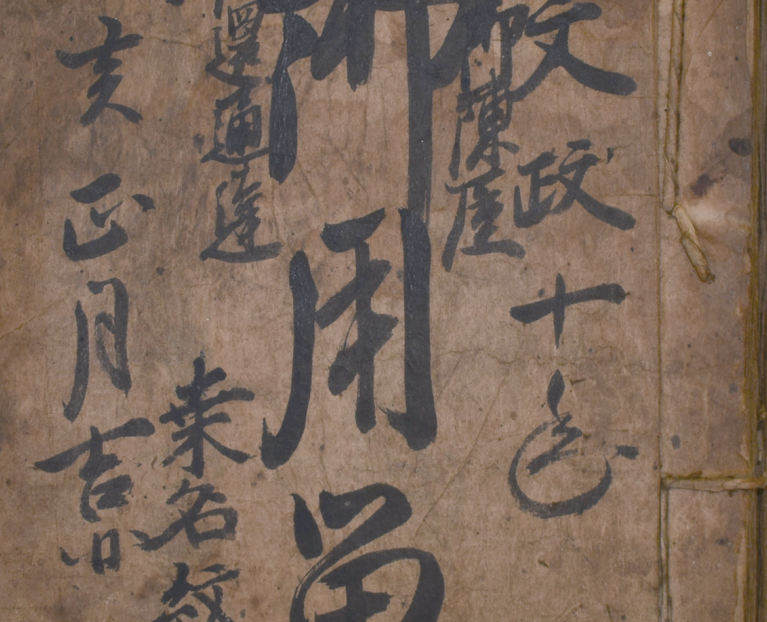
東北大学東北アジア研究センター叢書 第74号

# 文政10年東北農村の御用留 ―須賀川市桑名家文書から―

荒武 賢一郎 編  
武田 作一

東北大学東北アジア研究センター叢書 第74号 文政10年東北農村の御用留 ―須賀川市桑名家文書から― 荒武 賢一郎 編  
武田 作一

CNEAS





東北大学東北アジア研究センター叢書 第74号

# 文政10年東北農村の御用留

―須賀川市桑名家文書から―

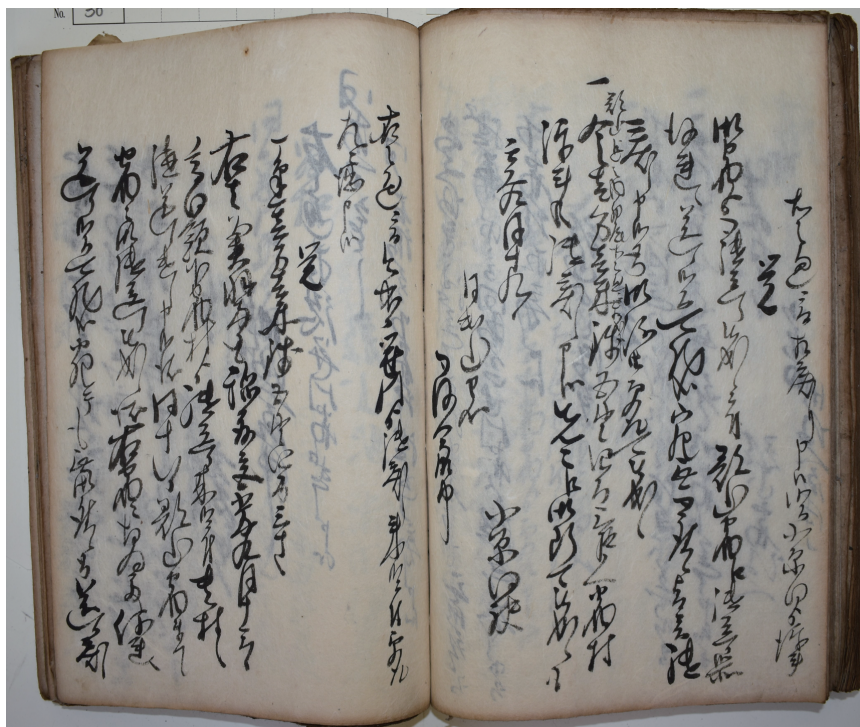
荒武 賢一朗  
武田 作一  
編



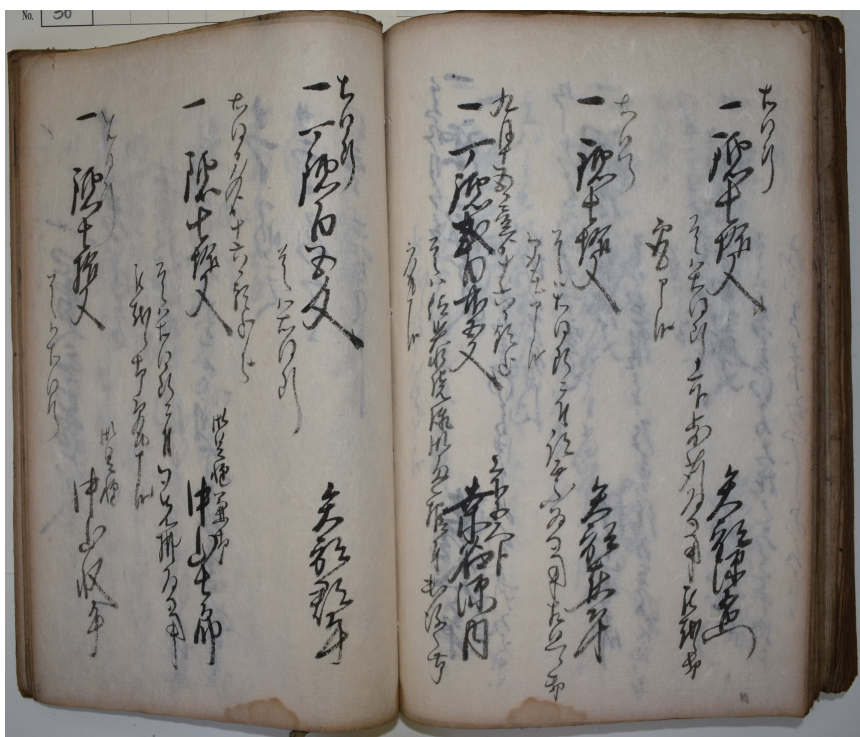


須賀川市立博物館所蔵桑名家文書 36「御用留」表紙





「御用留」本書 98・99 ページ翻刻部分



「御用留」本書 113・114 ページ翻刻部分



## 序論 須賀川市桑名家文書の特徴

荒武 賢一朗

本書は、須賀川市立博物館（福島県）所蔵の歴史資料「桑名家文書」のうち、文政一〇年（一八二七）に作成された「長沼御陳屋（陣屋）・当地往還通達 御用留」（文書番号三六一一、以下、「御用留」と略す）を全文翻刻し、江戸時代における東北地方のひとつの村落、さらには地域の実情を紹介するものである。

二〇一九年より、須賀川市立博物館と東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門は、須賀川市域に伝来する数多くの資料を調査してきた。桑名家文書は、そのうちの大きな文書群で、総数は一五五九点にのぼる<sup>1</sup>。収載文書の作成年代は、元禄一三年（一七〇〇）から昭和二年（一九四九）<sup>2</sup>で、桑名家が居住した陸奥国岩瀬郡滑川村（現・須賀川市滑川）の行政運営・年貢・納税などに関する資料が中心となっている。

\*\*\*参考 『日本歴史地名大系七 福島県』（平凡社、一九九三年）より転載

滑川村 なめがわむら 「現」須賀川市滑川

中宿（なかじゅく）・下宿両村の北、阿武隈川西岸の平地と丘陵に立地。地内を東流してきた滑川が阿武隈川に合流する。奥州道中は村境の白石（しろいし）坂を越え、主集落と北の十貫内（じつこうじ）集落を抜ける。村名は板滑が多かった岩瀬川（滑川の古名）の合流点に由来するか（岩瀬風土記）、中世二階堂氏が本拠の鎌倉の地名を移したとかいわれる（元和老人物語）。「奥陽仙道表鑑」に、永禄元年（一五五八）二階堂氏家臣滑川修理が柏木（かしわざ）館を築き居住、天正一一年（一五八三）田村友顕が二階堂氏を攻めて当地まで押寄せたが、柏木館方の防戦で敗れたとある。文禄三年（一五九四）の蒲生領高目

<sup>1</sup> 「須賀川市桑名家文書目録」（野本禎司・後藤三夫・高橋直道・荒武賢一朗作成）は、東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門ホームページで公開。

<sup>2</sup> 年代未詳のものは除く。



録に滑川とみえ、高三二六石余、天野五右衛門尉の知行地。江戸時代の領主の変遷は山寺村と同じ【補注・江戸時代初め会津領、寛永二〇年（一六四三）白河藩領、慶安二年（一六四九）幕府領、天和二年（一六八二）大久保藩領と変遷し、元禄六年（一六九三）幕府領に復帰、同一三年から長沼藩領。】。白河古領村郷高帳では高三一六石余。寛文一三年（一六七三）の検地で高六九二石余（大久保藩村々石高「福島県史」）。元禄一三年（一七〇〇）から享保三年（一七一八）間の改出新田高は一八石余（長沼領村高調「同書」）。滑川井堰普請人足三千人は、大久保藩成立以前は岩瀬郡中三万石の諸村が負担してきたが、同藩成立後は当村など同藩一カ村の負担とされ、村民にとって過重な負担であった（同書）。助郷は水戸街道の長沼宿（現長沼町）、白河街道の勢至堂宿（現同上）に出役（元禄一三年「長沼領各村人馬割」同書）。

右の内容から村高に注目すると、文禄三年（一五九四）の約三一六石から寛文一三年（一六七三）の約六九二石へと八〇年ほどで二倍以上の増加が看取できる。また、会津

領から白河藩領になったあと、一七世紀にはいくつかの領主が存在するものの、元禄一三年（一七〇〇）以降、常陸府中藩領（長沼藩領）となって明治時代を迎えた。

常陸府中藩は、水戸徳川家初代の徳川頼房（徳川家康の十一男）の五男として生まれた松平頼隆を藩祖とする水戸徳川家の連枝<sup>3</sup>であった。常陸国府中（現・茨城県石岡市）を本拠とするものの、藩主は江戸屋敷に常駐する定府大名で、領地二万石についても府中を中心とする常陸国では約五千石、残る一万五千石余りは陸奥国岩瀬郡にあった。岩瀬郡内の領地は長沼村（現・須賀川市）に陣屋を置き、史料上も「長沼領（または長沼御領）」として、藩財政にとって重要な位置を占めたと考えられる。

<sup>3</sup> 連枝：藩主の兄弟が分家をして、代々世襲する。







表 1 須賀川の支配領主と村高（明治維新のころ）

支配	No.	村名	村高
長沼藩	1	仁井田村	にいだ 2845.126
	2	江花村	えばな 2103.244
	3	長沼村	ながぬま 1728.924
	4	大久保村	おおくぼ 1458.627
	5	志茂村	しも 1299.420
	6	成田村	なりた 1115.007
	7	矢沢村	やざわ 1052.409
	8	滑川村	なめがわ 745.940
	9	大桑原村	おおくわはら 711.724
	10	畑田村	はただ 699.578
	11	滝村	たき 628.172
	12	町守屋村	まちもりや 581.231
	13	袋田村	ふくろだ 479.647
	14	深渡戸村	ふかわたど 377.545
	15	山寺村	やまでら 339.629
	16	吉兵衛新田	きちべえ 95.016
	17	勢至堂村	せいしどう 44.178
	18	岩淵村*	いわぶち 29.958
越後高田藩	1	小倉村	おぐら 1758.129
	2	狸森村	むじなもり 1064.005
	3	塩田村	しおだ 1059.683
	4	和田村	わだ 1052.666
	5	前田川村	まえだがわ 970.271
	6	雨田村	あめだ 946.357
	7	下小山田村	しもおやまだ 930.129
	8	大栗村	おおぐり 837.388
	9	田中村	たなか 792.512
	10	浜尾村	はまお 668.912
	11	市野間村	いちのせき 529.846
	12	日照田村	ひでりだ 268.364
	13	上小山田村	かみおやまだ 226.898
白河藩	1	須賀川宿	すかがわ 2458.719
	2	梓衝村	ほこつき 1525.511
	3	保土原村	ほどわら 1310.203
	4	矢田野村	やたの 1044.146
	5	江持村	えもち 630.036
	6	岩淵村*	いわぶち 613.967
	7	堤村	つつみ 507.925
	8	下小中村	しもこなか 441.089
	9	上小中村	かみこなか 204.898
旗本三枝家	1	今泉村	いまいずみ 2101.943
	2	下柱田村	しもはしらだ 1110.258
	3	稲村	いな 874.487
	4	越久村	おつきゅう 871.662
	5	北横田村	きたよこた 790.715
	6	里守屋村	さともりや 672.474
	7	上柱田村	かみはしらだ 457.661
旗本溝口家	1	木之崎村	きのさき 1445.318
	2	笹ヶ岡村	たてがおか 1137.347
	3	泉田村	いずみだ 1042.617
	4	松塚村	まつづか 721.980
	5	南横田村	みなみよこた 595.919
	6	堀込村	ほりごめ 486.840
土浦藩	1	牛袋村	うしぶくろ 1128.455

出典)『旧高旧領取調帳』

\*岩淵村は相給（1つの村に2人の領主がいる）

## 滑川村の村役人たち

江戸時代、村役人は名主（庄屋、肝煎とも）、組頭、百姓代という役職が代表的で、これらを「村方三役」と呼んでいる。滑川村では、基本的に庄屋一名・組頭二名・百姓代一名が村役人を務めていた。ただし、本書収載の「御用留」には、文政一〇年正月段階で、庄屋二名・組頭三名・郷目付一名・郷目付見習一名・村年寄一名という構成になっており、時期によって変化があるものと思われる。

歴代の庄屋について、『須賀川市史近世―江戸時代―』<sup>4</sup>には、次のような名前が登場する。

- ・享保一〇年（一七二五）〜同十二年（名主）勘之丞
- ・安永七年（一七七八） 弥市
- ・万延元年（一八六〇） 〃文久元年（一八六一）隆平
- ・文久元年（一八六一） 隆作
- ・慶応三年（一八六七） 桑名隆平（郷士格）

菊地与兵衛（割元格）

桑名隆朔（庄屋町年寄格）

桑名郁之助（見習）

庄屋は村のリーダーで、本書「御用留」の筆者桑名紋右衛門もその地位にあった。右によれば、近世後期における滑川村の庄屋（名主）は桑名家が務め、幕末までに三回交代している。このうち一回は桑名家にとって予期せぬ事態であった（桑名家文書七四「日記・御用留」）。それは文化六年（一八〇九）五月から疫病が流行し、村中所々において祈禱を実施したことから始まる。このとき庄屋を務めていた桑名十兵衛が死去し、紋右衛門が後任を命じられ、勇次が庄屋見習を命じられた。村落における庄屋の交代は重要で、両名だけでなく、組頭、長百姓と共に長沼代官役所（長沼陣屋）に出向き、正式な任命を受けている。

なお、組頭二名は同期間に少なくとも一二回と、庄屋より頻繁に交代していたことが一連の「御用留」からわかる。交代の理由は、足痛のため長沼陣屋と滑川村を往復するのが困難としているので、村役人を務めることは容易なことではなかったといえよう。

<sup>4</sup> 須賀川市教育委員会編集・発行、一九八〇年。「滑川村庄屋名」は同書一四六ページ。



百姓代は「長百姓」と記されることが多く、領主とのやりとりを示す公文書は、おおむね庄屋・組頭連名で作成される文書が一般的であった。このことから、庄屋・組頭は領主支配の末端の組織の中心として、「長百姓」は名主・組頭の村政運営に必要に応じて参画していたと考えられる。

常陸府中藩領（長沼領）の名主・組頭は、毎年正月二日に長沼陣屋へ揃って年始の挨拶に参列した。この年始挨拶には、各村で「郷目付」という役職を藩から任命されていた者や帯刀・上下着用の格式を許された者も同行する。年始挨拶は、一同に会することで領主支配の秩序を少なくとも年に一度再確認する場となっていた。

### 常陸府中藩と長沼領

先述のように、常陸府中藩の飛地として長沼領（岩瀬郡一八か村）が成立した。藩主は、江戸小石川にある屋敷に定住するため、藩政の中心は江戸、民政支配は長沼陣屋お

よび府中陣屋が担ったものと考えられる。

長沼陣屋には、行政全般を統轄する郡奉行、領内の年貢関連を管理する代官が詰めていた。当初、郡奉行一名・代官二名・郡方手代四名が配属されていた<sup>5</sup>。彼らのおもな職掌は、法令の布達、治安、土木工事、農事奨励、風俗規制などである。郡奉行の在任は、初代井上源蔵（一六年間）、二代秋山弥平次（二三年間）は長期にわたっていたが、一九世紀に入ると一年ごとに交代するようになった。代官は定員二名で開始したが、享保元年（一七一六）に一名に改められる。また、寛政七年（一七九五）から嘉永四年（一八五二）には郡奉行と代官が兼帯（一人二役）とされる<sup>6</sup>。両役には藩から派遣された武士が就き、「御用留」にも彼らが「一か年在番・交代」「府中表より下る」と記し、長沼へ任地居住していることがわかる<sup>7</sup>。両役のもとには、数名の役人を組織していたが、極めて少なかったと

<sup>5</sup> 前掲『須賀川市史』一一九ページ参照。

<sup>6</sup> 嘉永五年以降は、再び郡奉行と代官は分担されるものの、後者は「代官扱」が置かれた。

みてよい。

本書「御用留」には、「代官方」の文言がいくつか記載されている。たとえば一月一五日の条文では、「御代官方善方五四郎様」が領内村々のなかで年貢米に「悪米・悪俵」を差し出すことがあるとして、山寺村などで実地調査をしている様子を書いている。

郡奉行および代官のもとには、数名の役人が配置されていたと思われる。「御用留」では、次のような人名がそれにあたる。

- ・郡方役：矢部郡平
- ・（役職不詳・郡方カ）：矢部八之平、矢部源五右衛門、矢部在平
- ・吟味役：桑名源内
- ・目付：中山重蔵
- ・足輕：中山七郎、中山藤四郎、中山収平、安藤勇次

宝暦十一年（一七六一）における長沼領全体の人口は五六五一人で、所領は約一万五千石という規模を勘案する

と、これを支配する長沼陣屋にわずか数名の武士しか詰めていない。果たして、円滑な行政運営は実現したのかという疑問が浮かぶ。

少数で構成する役所のもと、在地の運営に大きな影響を与えたのは「割元」<sup>8</sup>であった。長沼領の割元は年番制で定員二名として、陣屋役人と各村の庄屋たち村役人の間に位置する。つまり、上意下達・下意上達の仲介をおこなう、長沼内町・長沼金町に在住する者を一名ずつ任命した。「御用留」でも桑名紋右衛門たち滑川村の村役人たちと頻繁に連絡を取り合っていることがわかる。領内へ布達する通知には、発給人として「両割元」または「和田紋十郎（長沼内町在住）」の名前があり、二名のうち、とくに滑川村と関係があったのは和田であった。

（和田紋十郎に関する記述）

- ・五月八日：矢部八之平、中山七郎と在地へ出張し、

<sup>7</sup> 府中松平氏の家臣は、半数近くが水戸徳川家から派遣されているようで、すべてが松平氏直属ではない。

<sup>8</sup> 割元は、ほかの地域で称される「大庄屋」に相当する。



普請完了の見分をおこなう。

・ 閏六月一五日：堰普請の経費捻出のため無尽興行をおこなった際、中山藤四郎と在地へ出張する。

・ 閏六月二四日：滑川村庄屋隆平は、長沼陣屋へ出張するが、中山藤四郎と和田紋十郎に無尽の御礼を申し上げる。

・ 八月下旬：隆平たちは長沼方面へ出張をした際、長沼内町の和田紋十郎宅へ宿泊した。

## 御用留

御用留は、全国各地の庄屋など村役人層が「御用（領主と関係する仕事）」についてまとめた帳面のことをいう。桑名家では、おおむね年間一冊を作成し、あらゆる通知や連絡事項、そして村役人から領主役所へ上申する書類の写しを記載する。表題は異なる場合があるものの、内容から察するところ「御用留」およびそれに類する文書は七三点存在し、年代は天明四年（一七八四）から安政七・万延元

年（一八六〇）におよぶ。

## 文政一〇年の動き

桑名家文書所収の「御用留」は、江戸時代後期における滑川村および長沼領の実情を知る貴重な手がかりといえよう。この時期には、天変地異を伴う凶作・飢饉が大きな社会問題となっており、村落運営は極めて困難であったことも推測できる。滑川村に限らず、現在の須賀川市域一帯では江戸時代全体を通じて、およそ三年に一回は凶作に見舞われていたともいわれる。そのなかで本書「御用留」の文政一〇年は、年間を通して比較的平穏であった。

記述内容からすると、①役所からの触書（法令・通達）、②年貢関係、③旅先で病氣・怪我をした旅人の搬送（領内通過）、④参勤交代など大名や旗本の通過、⑤役所から指示のあった人足徴発、⑥土木工事などの実地見分、などが挙げられる。

長沼陣屋および割元が発信する文書（触書）は、領内

村々へ回覧板のように伝わり、庄屋が受領した際には触書に書かれた村名のところへ押印と刻付（受け取った日時）をして、次の村へ送付する。そして最後に受け取る村（留村）から役所へ返却する方法を採っていた。滑川村の場合は、近隣の仁井田村・山寺村とのやりとりが日常的だったようである。

### 奥州道中と「旅人」

東北地方と江戸を結ぶ奥州街道は、多くの人々が往来し、多彩な物資の輸送がおこなわれていた。また、長沼領は須賀川宿と会津城下を結ぶ街道が通っているため、東西南北の交流があった。「御用留」には、参勤交代のため本国と江戸を移動する諸大名の通過が数多く確認できるほか、会津藩主および家臣たちの通行や、諸領主が江戸との間で荷物を運送する際に、人足や馬を村々が拠出することもあった。これは、季節性にもよるが、たとえば一二月六日付で両割元から滑川村に発せられた文書では、「会津

御家中」が領内を通過する際、滑川村から人足二〇人を勢至堂宿（現・須賀川市）へ派遣せよとの命令があった。通常は、人足二人と馬一〇匹といったような徴発がなされるところだが、このときは積雪のため「馬足相立ち申さず」、人足をいつもより増やせという。また、江戸幕府の直轄地であった佐渡国（現・新潟県）には佐渡奉行が任じられているが、六月一七日の割元・和田紋十郎からの文書によると、佐渡奉行所支配組頭の大原吉重郎なる人物が通行するため、滑川村には人足九人・馬一匹を勢至堂宿へ出すよう指示があった。これは、幕府役人の往来に関する対応であるとともに、佐渡奉行所詰めの武士たちは越後国から会津を経て、江戸と往復することがわかる。

大名や幕府役人の往来は、公務であることから街道沿いの村々にも出役などの連絡がくるのは必然である。一方、庶民たちの動向は公文書に記録されることはほとんどない。しかし、旅先で不慮の事故や病気になった人々を本国に帰す際、「所々」の人々がそれを手伝い、無事に送り届ける。「御用留」のなかには、そのような状況を示す文面



が数多く記されていた。

一例を紹介しておこう。五月一七日、信濃国佐久郡小諸町から発信された文書では、次のようなことがわかる。

仙台城下・北十番丁に住む百姓・小太重（当時二三歳）は、伊勢神宮参詣からの帰路に長野・善光寺に立ち寄った。彼はそこで病氣となつてしまい、当地で薬を服用して少し病状は落ち着いたものの、歩行は困難な状態にあつた。とりわけ「貯（手持ちの金銭＝路金）」もないので、仙台までの道中「宿々村々」から援助をしてほしいという。具体的には、宿泊や食事などの「御心添えを下さるべく候」と締めくくる。このような病人の支援を願う文書は、たくさん収録しており、歩行のできない状態の旅人には「案駄・案太・第（いずれも「あんだ」と読む）」という簡易の駕籠に乗せて運ぶこともあつた。

## 大検見

役所と村々で何らかの案件が生じた場合、庄屋たち村役

人が長沼陣屋へ呼び出され、役人から直接指示を受けるほか、特別な用務があるときのみ、郡方役人と足軽が在地に足を運ぶ。これが役人の仕事では基本だったように見受けられる。

毎年一回だけ、郡奉行や代官などが現地視察をおこなうことがある。これは、「大検見」と呼ばれる当年の収獲を实地視察することを指す。時期は、収獲に目途のついた九月上旬で、文書のなかで大検見は「御用之郷村第一重キ御用」（九月一〇日付け触書）だとされる。八月下旬になると、陣屋から大検見の日程が知らされ、文政一〇年の場合は九月一二日に志茂村を皮切りに陣屋役人の矢部源五衛門（源五右衛門）・矢部在平の二名による巡村が開始された。視察に出かける両名は、村々が用意する馬に乗り、これも各村が提供する人足一人（荷物持ち、髪<sup>さかやま</sup>代を整えて脇差を持つ）とともに各地へ赴く。村から村への移動には、その境目に次に視察する村の庄屋・組頭が出迎え、村内の案内役を務めた。また、实地調査には組頭が一人ずつ対応し、加えて道具人足四人を差し出す。宿泊および食事につ

いても所在の村が準備するといった具合であった。記録によれば、一日で四、五か村の巡見をこなし、一週間程度ですべての地域を視察した。

役人および庄屋たちが「郷村第一之御用」と呼ぶ大検見は、年貢の査定にかかわる重要な仕事であるが、右のような人馬の確保や滞在費の支出を考えると、役所の負担はそれほど大きくなく、「村任せ」の感が否めない。さらに、一日で数か村を巡るため、詳細な調査とは考えにくい。これは、ある種の「セレモニー」と位置づけられる行事で、領主・領民関係を直接確認することに目的があったともいえる。

## 土木工事

滑川村一帯は、農業中心の地域的特徴を持っているため、水利や防災の観点から河川（井堰）や溜池の普請が毎年のように実施された。当然ながら「御用留」にも土木工事に関連する文書が多数含まれている。たとえば、二月に

庄屋紋右衛門ほか四名の村役人（滑川村惣代願人）が郡奉行へ提出した願書では次のような状況が理解できる。

### （願書の概要）

滑川村に設置する井堰は「大難場」で毎年のように水害で押し流され、その時々には普請をおこなう人足を多数動員しなければならない。新規の普請には村方人足を二〇日間、補修工事にも八日間、といった負担が重くのしかかる。文政五年（一八二二）に役所へ申し上げて、工事「山手切通」を実施すれば、水害の被害も少なくなり、農業用水も存分に確保できるようになると村民一同で納得した。これで、百姓たちの生活も安定するのだと土木工事に諸職人を動員したが、最初の見積とは大きく異なり、定められた五年間の普請では大金が必要となった。「御普請」ということで役所からたびたび資金を受け取っているけれども、村方では大きな借金を抱えて返済する手段も

、御普請は領主が工事にかかる費用を出しておこなう。



なく「難渋至極（とても困っている）」、その対処について検討をした。そこで、「香具踊（芸能）」の一行が滑川村の近くに来ており、村内の土地を借りて興行を打ちたい。

滑川村は、普請を実施する資金を調達するため、芸能興行を開催してその収益を借金返済に充てたいと申し出た。結果、この願いは聞き入れられたようで、役所予算の欠乏と、村内負担の軽減を図るための方策がいろいろと考案されていたとみられる。

### 今後の展望と雑感

桑名家文書に含まれる七〇冊以上の「御用留」から、文政一〇年を取り上げて、これから読者各位に全文を紹介していく。わずか一年分の内容で何がわかるのか、という批判も承知のうえ、この文書群、滑川村の歴史、さらには江戸時代の社会を知る第一歩として本書の刊行を位置づけた。先述の内容紹介は、いくつかの事例を挙げたのみで、

さまざまな視角から資料を検討いただければ幸いである。

二〇一九年に調査を開始して以降、「御用留」の記述を興味深く感じていた。しかしながら、浅才の筆者にはとても荷が重く、どうしたものかと思案した結果、武田作一氏に解説について相談を持ちかけたところ、ご快諾をいただいた。根気のいる翻刻作業はもとより、また難解な筆致や内容の理解まで、武田氏のたゆまぬ努力に深謝を申し上げたい。

武田氏とは毎月一回、宮城県白石市の白石古文書サークルで顔を合わすので、時折の打ち合わせと一か月ずつ進捗のあった翻刻文を頂戴し、翌月に筆者が確認作業を済ませた原稿をお返しするという形で進めることができた。いわば、江戸時代の御用留を素材に二人で交換日記をしてきた成果ともいえよう。筆者が難読不可解だと思う箇所をいとも簡単に読み進め、全くみたくもない用語の意味を精緻にコツコツと調べる武田氏の真摯な作業に、大きな学術的刺激を受けた。本文には、わかる範囲で適宜注釈を付け、読者にできるだけ内容を理解いただけるよう配慮を施した

が、「案駄」をはじめ辞書でもなかなかわからない言葉を解釈したのも武田氏の功績である。

本書の刊行は、東北大学東北アジア研究センターの支援なくして実現できなかった。出版審査およびご助言をくださった同センター編集出版委員会の各位に厚く御礼を申し上げます。桑名家文書調査と公開には、須賀川市立博物館の積極的な協力があり、また東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門の同僚たちの活躍なくして成立しなかった。関係各位に謝意を記し、引き続き今後の研究活動に邁進していきたい。

### 【凡例】

- 一、本編は、須賀川市立博物館所蔵桑名家文書三六「御用留」を全文翻刻している。
- 二、原則として人名など固有名詞の一部を除いて、常用漢字に改めている。
- 三、かな文字については、原文のまま表記した。たとえば、「者（は）」「茂（も）」「江（え）」「与（と）」、合字「𛄀（より）」など。
- 四、改行については、原文通りではない。ただし、欠字・平出・台頭は一部そのままの表記とした。
- 五、史料には、編者の判断で読点（、）や並列点（・）を付けている。
- 六、文中には、語句の説明が必要な箇所を注で示している。
- 七、史料の文言には、差別的表現が含まれるものの、歴史資料としての性格から、そのまま表記した。
- 八、史料の翻刻は武田作一が担当し、全体の編集を荒武賢一朗がおこなった。なお、最終的な文責は荒武にある。



(表紙)

文政十年

長沼御陣屋<sup>1</sup>

御用留

当地往還通達

桑名紋右衛門

丁亥正月吉日

桑名紋右衛門<sup>②</sup>

滑川村<sup>②</sup>

法光寺<sup>②</sup>

扣 文政十丁亥年正月

当亥正月二日、長沼表御年始首尾克相濟、同夕帰宅

仕候

庄屋 紋右衛門 同 隆平 組頭 六左衛門

郷目付見習 代七 村年寄 半四郎 太刀御免 半八

太刀御免 惣右衛門

病氣

組頭 治右衛門 同・太刀御免 甚之丞

太刀御免 半右衛門

郷目付 喜惣次 太刀御免 良助

上下御免 龜三郎 上下御免 豊八

一病氣 法光寺 不罷出候

一札之事

奥州仙台名取郡牛方村勇太郎儀、金毘羅參詣ニ罷出、帰村之砌、東山田村<sup>2</sup>・仁連町<sup>3</sup>境ニ而病氣之体ニ而行倒ニ相成居候ニ付、両郷立会薬用致置候所、同人<sup>江</sup>承糺候所、別紙一札も在之候間、国元<sup>江</sup>帰村致度旨相願候ニ付、継送り

<sup>1</sup> 陣屋：原文では「陳」のくずしであるが、「陣」として表記する。

<sup>2</sup> 東山田（ひがしやまた）村：幕府領（代官支配）、現・茨城県古河市。

<sup>3</sup> 仁連（にれい）町：日光東往還の宿場、現・茨城県古河市。

候間乍御世話様御順村御継送り可被下候様奉願上候、以上

文政九年戌十二月十七日

平岡彦兵衛<sup>4</sup>御代官所

下総国猿嶋郡東山田村

名主 伊兵衛

同支配所

同国同郡仁連丁

名主 八郎兵衛

外ニ往来手形在之候得共略之

右之病人正月二日下宿<sup>5</sup>方受取留り、三日笹川へ継送り遣し申候

継人足 寅藏

牛藏

兩人分、引札<sup>5</sup>七月廿六日善左衛門<sup>江</sup>渡之

覚

大和国初瀬寺<sup>6</sup>小池御祈寺頼栄

右<sup>者</sup>紀州今来山勧音寺<sup>7</sup>弟子ニ而諸国御文学ニ参り、病氣而本国紀州勧音寺<sup>江</sup>罷り歸り度願ニ付、六日跡方案駄<sup>8</sup>ニ而送り遣し候間、宿々御憐愍ヲ以国元迄御継送り被下候様奉願候

文政九年戌十二月廿日

大破口役所詰

小西忠平

先々宿々村々御役人中

此病人正月十四日笹川方受取、下宿へ送り

武右衛門子共、竹吉渡ス

継人足 武右衛門

<sup>4</sup> 平岡彦兵衛…幕府吏僚、代官。

<sup>5</sup> 引札（ひきふだ）…ここでは、人足・使が持つてくる手形。

<sup>6</sup> 初瀬寺（はせでら）…真言宗豊山派長谷寺（はせでら）、現・

奈良県桜井市。

<sup>7</sup> 勧音寺…原文ママ、「観音寺」。

<sup>8</sup> 案駄（あんだ）…簡易の駕籠

<sup>9</sup> 子共（こども）…原文ママ。

虎五郎

寅五郎分三月十五日善左衛門へ渡ス

御心得無間違可遣候

此書付見届候ハ、庄屋中村下被成印形、早々刻付ニ而順達留村方可被相返候

亥正月十七日

和田紋十郎

以書付申遣候、然<sup>者</sup>御用之儀在之候間、来ル十七日朝四ツ

戌下刻出ス

桑名捨藏

時老村方庄屋・与頭・長百姓老<sup>人</sup>ツ、可罷出候、此配符<sup>10</sup>

右村々庄屋衆中

見届候ハ、村下庄屋致印形早々順達留村方可相返候、以上

亥正月十四日

御代官方

此配符十六日朝五ツ時仁井田村方受取留り

右御称美之分拙宅ニ夜方村中酒振舞申候事

守山<sup>11</sup>方長沼へ白木状箱

右之通御代田方受取、仁井田へ継遣ス

正月十七日

覚

一馬五疋

滑川村

是<sup>者</sup>参着次第勢至堂詰

右<sup>者</sup>会津御領所并諸御用御荷物被通候ニ付、前件之通馬割合申上候間、才判組頭老<sup>人</sup>ツ、御差添可被遣候、尤少馬ニ付於心割相成兼種々之割合致候、追而差引相立候間、左様

<sup>10</sup> 配符（はいふ）…原文ママ、「配符」の意。以下、頻出する。

<sup>11</sup> 守山：陸奥国田村郡守山村、現・福島県郡山市。守山は、水戸徳川家御連枝の守山松平家（守山藩）が拠点を置いた。文政一〇年当時は、四代・松平頼慎（よりよし）。



覚

一人足三拾五人

滑川村

是ハ当月十九日明六ッ時仁井田村境越久村境ノ塞道

詰

右<sup>者</sup>仁井田村端郷<sup>12</sup>関下掛樋<sup>13</sup>損候ニ付、此度袋田村ニおゐて、右樋木買取為引候間、件之人足大凶割合候間、村々可差出候、尤雪解次第人足召遣可然事ニ候得共、佗方田畑之上為引候事ニ而畑方荒候間、此節雪中為引候条、此旨相心得可差出候、人足之儀<sup>者</sup>当春御普譜之節平均<sup>江</sup>入差引相立可申候間、左様相心へ此書付其節可相返候、以上

亥正月十七日

御郡方

右之掛物長サ九間、年来相立候松木ニ而、目ノ上七、八尺も相廻り候大木、年数何年ニ相成候哉相知不申候

以書付申触候

一御家 御代々様御行実取調差出候様被 仰出候

右ニ付御領中村々ニ於ても右様之儀奉承知羅<sup>14</sup>有候

儀<sup>者</sup>書面ニ相認可差出候、尚又旧家之者ハ旧記等も

可有之候間、都而不寄何事 御仁政ニ抱候儀、来ル

廿四日迄ニ可申出候事

但、去戌年迄ニ取調可申候事

一当亥面付人別相改候間、人別帳来月十日迄ニ指出可申候、尤人別増減差引間違無之様入念いたし、小入紙<sup>江</sup>相認差出可申候、其上役所ニ而改之上、清書申付取調耆人別人相相改候間、他所奉公出人等引替置可申候、尤右十日より増人・減人ハ、改之節別紙ニ書上可申候、右之趣申触候条見届候ハ、村下へ庄屋致印形留村方直々役所へ可相返候、以上

正月十八日

御郡方

<sup>12</sup> 端郷（はご・はごう）…ひとつの集落であるものの、行政組織としては「村」を形成せず、「本村」の配下にある。この場合は、仁井田村（本村）と関下（端郷）となる。

<sup>13</sup> 掛樋（懸樋、かけひ）…用水が河川や谷を渡る場合に架ける水路橋（水道橋の一種）。

<sup>14</sup> 原文ママ、罷（まかり）

急度申触候

大目付<sup>江</sup>

一古金銀通用之儀、当六月相触候通、来亥年二月方弥々  
停止ニ候間、停止以後堅通用致間敷候

一古式朱判<sup>15</sup>之儀も近々通用停止可被 仰出候条、古式

朱判所持之者ハ此節差出、引替所<sup>江</sup>差出引替可申候事

一古金銀通用停止以後も遠国其外無抛引替、残古金も可

有之哉ニ付、引替所之儀古式朱判通用中<sup>者</sup>先是迄之通差

置候間、古金銀所持之者ハ早々差出引替可申候、若停止

以後古金銀通用致候敷、又ハ古金銀貯置不引替者於有

之<sup>者</sup>吟味之上急度可申付候

右之趣可被 相触候

十二月

右之趣從 公儀御触在之候間、村中寺社門前ニ至迄不洩

様可被相触候

文政九年戌十二月

小瀬八右衛門

此触ヲ見届候ハ、村下へ庄屋印形いたし、  
早々順達留村方直ニ役所へ可相返候、以上

御郡方肝煎

矢部八之平

亥正月十八日

小瀬八右衛門代

矢部源五右衛門

右同人代

矢部在平

此触達両通、正月十八日長沼<sup>江</sup>御用付罷出候節写取申  
候

扣

正月十七日御代官御役所様ニ而御用之趣ニ付、御領内庄  
屋・組頭・長百姓御召ニ付、隆平<sup>16</sup>・組頭次右衛門・長百  
姓甚之丞出勤仕候所、御代官御役所様御列座ニ而被 仰出  
候趣ハ、去戌年御物成米式千俵野州黒羽上河岸<sup>17</sup>・高柳源  
左衛門方<sup>江</sup>御払米相成候所、江戸表御屋敷御類焼候、御普

<sup>15</sup> 古式朱判…江戸幕府発行の通貨、元禄二朱判（にしゅばん）。

<sup>16</sup> 隆平…滑川村庄屋・桑名隆平。

請旁金子御入用御差支被遊候二付、右御米金御払之義ハ、此方御物成米運送次第、代金相濟候筈之所、折節去秋之義一体農業手送<sup>18</sup>之年二在之、猶又雨天相統路次悪敷、往還道橋踏切馬足相立不申候、依御米津出村々相成不申、然ル所御役所方折々御出役之上津出才判被遊候得共、前申通路道悪しく村々甚々難渋仕、殊二近日御米運送無之候而ハ、御米代金御手入不申、左候ヘハ江戸登セ日数延引二相成、江戸表御普請金御差支、依之是非被仰付候通村々揚馬致、猶又村馬ヲ以矢吹<sup>19</sup>方白川<sup>20</sup>迄運送可致候様被仰付候得共、迎も往来御荷物等二至迄分荷致候事、御米之義ハ左も相成不申、依之村々庄屋・組頭数度中継<sup>江</sup>罷出、才判致候ハ、是迄之大賃方少々割増致し差出可申候間、運送致吳可申哉、数度掛合候二付、右之通増錢二相成、猶又折々天氣相統路次相直り、御米津出村々御差支無之白川着米相成候二付、此度御役所様二而旁々村役人・小前之者共迄骨折候段、大義二被思召村役人・小百姓共ヘ為御酒代調鑑壹貫五百文被下置、難有頂戴仕御札申上歸り申候事

以書付申遣候、然<sup>者</sup>御米一件二付御用在之候間、此書付参着次第、良助役所<sup>江</sup>可差出候、尚又森岡屋勇藏方二而も御米捌方、白川渡米一件二付対談致度旨願出候間、役所<sup>江</sup>罷出候節、勇藏方<sup>江</sup>も立寄候様申付可差出候、其節此書付可相返候、以上

亥正月廿三日 御代官方

此配符廿三日夜寅中刻仁井田村方受取

右二付、十貫内<sup>21</sup>良助方<sup>江</sup>申遣候處、須か川<sup>22</sup>二罷在候義同廿四日弥三郎須か川ヘ罷出、良助須か川方直二長沼ヘ罷出候様申付遣候事

17 野州黒羽上河岸：那珂川の黒羽河岸（上河岸・下河岸）、現・栃木県大田原市。

18 原文ママ、遅の意味か。

19 矢吹：現・福島県西白河郡矢吹町。

20 白川：白河を指す、現・福島県白河市。

21 十貫内（じっこうじ）：滑川村の端郷（前述）。

22 須か川：現・福島県須賀川市。



覚

一米七拾六俵

滑川村

右<sup>者</sup>去戌御物成米、白川仕切出不足相見<sup>江</sup>申候間、此書付参着次第仕切取之者差遣、早々仕切、役所<sup>江</sup>可差出候、此書付見届候ハ、村下へ庄屋致印形、早々順達留村<sup>方</sup>可相返候、以上

亥正月廿三日

御代官方

此配苻廿四日八ツ時仁井田<sup>方</sup>受取留り

村送り一札之事

一此者羽州村山郡谷地大久保村<sup>23</sup>利八<sup>与</sup>申者、当戌四拾四歳ニ罷成候、去ル七月廿八日国元発足仕、讃州金毘羅<sup>24</sup><sup>江</sup>致参詣、下向之節当村迄罷越、足痛ニ而難儀之躰ニ相見<sup>江</sup>候ニ付、暫ク逗留申付養生為致候得共、歩行不自由ニ相成、右病人国元ニ<sup>者</sup>慥成親類共在之、相待居候故片時も早ク帰国仕度段相願候、仍之 御地頭所<sup>江</sup>御届申上、村送りニ而帰国為致申候、宿々村々御世話<sup>ニ</sup>御座候得共、

御送り届可被下候、尤時分ニ<sup>者</sup>食物等御心添被遣、夜ニ入候ハ、止宿為可被下候、右等御願申入候、以上

文政九年戌十一月

江州栗太郡矢倉村<sup>25</sup>

庄屋 治良右衛門

年寄 元右衛門

御関所

宿々

村々御役人中

往来一札

一此者羽州村山郡谷地大久保村百姓利八年四拾四、此度大願ニ付讃岐国金毘羅山<sup>江</sup>罷り登り候所、若シ永病等ニ而病死仕候ハ、御国御作法之御慈悲ヲ以、御始未被下度御頼入申候、宗旨之儀ハ拙寺且中ニ紛レ無之者ニ御座

<sup>23</sup> 羽州村山郡谷地大久保村：現・山形県村山市大久保。

<sup>24</sup> 讃州金毘羅：金刀比羅宮（ことひらぐう）、現・香川県仲多度郡琴平町。

<sup>25</sup> 江州栗太郡矢倉（やぐら）村：現・滋賀県草津市。

候、路銭少々持参、修行仕罷り通り申候間、行暮候節<sup>者</sup>  
一宿被 仰付被下候様奉願上候、依而往来如此二御座  
候、以上

文政九丙戌七月廿八日 村山郡大久保村

禅州<sup>26</sup>

寶鏡寺

国々御関所

御役人様中

継人足 佐吉

所々村駅

午五郎

御役人様中

兩人分、三月十五日善左衛門

へ渡ス

此病人正月廿五日下午宿方請取、笹川江遣ス

(挿入一紙)

(端裏) しも村<sup>27</sup>方可相届候、以上  
急用

深渡戸村<sup>28</sup> 庄屋御代官方

覚

一米三百四拾八俵 大久保村<sup>印</sup>

岩渕共

是ハしも村付合共

一米九拾俵 深渡戸村

吉ノ原新田共

一米四拾六俵 畑田村<sup>印</sup>

是ハ深渡之付合共

一米三百九拾六俵 矢沢村<sup>印</sup>

一米八百三十式俵 仁井田村<sup>印</sup>

是ハ滑川付合共

一米七拾六俵 滑川村<sup>印</sup>

右<sup>者</sup>去戌御物成米、白川仕切出不足相見申候間、此書付参

<sup>26</sup> 禅州：原文ママ、「禅宗」の意。

<sup>27</sup> しも村：志茂村、現・福島県須賀川市志茂。

<sup>28</sup> 深渡戸（ふかわたど）村：現・福島県須賀川市深渡戸。

着次第、仕切取之者差遣、早々仕切役所<sup>江</sup>可差出候、此書付見届候ハ、村下庄屋致印形、早々順達留村<sup>方</sup>可相返候、以上

亥正月廿五日 御代官所

右村々庄屋

追啓 深渡戸村・畑田村・大久保村・矢沢村<sup>江</sup>配符継取計可申候、以上

以書付申遣候、然<sup>者</sup>例年之通大般若御札被下候ニ付、配符ヲ以被下候間、村々頂戴いたし、追而御用序之節御札可申上候、以上

一村々文化七申年<sup>29</sup>方社倉粃取穀、去戌暮迄溜置候分、何程ニ相成候哉取調、来月二日迄ニ可被出候、此書付外々順達シ留村<sup>方</sup>可被相返候、以上

亥二月廿八日 御郡方役所

尚々申遣候社倉田反別員数も取調可申候、以上  
此配府<sup>30</sup>廿九日未下刻、山寺<sup>方</sup>受取、仁井田へ遣ス

覚

一人足拾五人 滑川村

是ハ今夕勢至堂詰

右<sup>者</sup>諸御家中被通候ニ付、前件之通人足割合申遣候間、壺村<sup>方</sup>才判与頭老人ツ、差添無間違可被遣候、此書付見届候ハ、村下へ庄屋衆被成印形、早々順達刻付ヲ以村々相返可申候、以上

亥二月十日 両割元

午上刻

此配符十日夕丑下刻、仁井田村<sup>方</sup>受取留り

扣 同十日隆平、長沼表<sup>江</sup>出役いたし御役所様へ申

上候

当月十三日、定日之通、無尽興行仕候ニ付、右之段御役所様へ御訴ニ罷出候節、此度次右衛門・六左衛門旧冬<sup>方</sup>芝居

<sup>29</sup> 文化七申年…原文ママ、文化七年は午年。

<sup>30</sup> 配府…原文ママ、「配符」「配符」と同じ。

渡世之者致扶持置二付、其段御役所様<sup>江</sup>段々御願申上漸々御見捨被成下候二付、此度願書ヲ以申上候左之通

乍恐以書付奉願上候事

一当村井堰大難場二而年々出水之節被押流、其節々御普請人足大造二相懸り、御領・佗領<sup>31</sup>・助郷村方勿論居村之義、新規御普請之節ハ村方人足前後廿日余、繕普請之時<sup>茂</sup>前後八日宛も相懸り難渋至極歎敷奉存候二付、去ル午年中御願申上、山手切通二仕候得ハ、堰普請も手輕二罷成、江堀之義水通<sup>茂</sup>無御座、御田地用水存分二引足、惣村一統難渋薄ク罷成、御百姓共取続出情<sup>32</sup>二可罷成、村納得之上、右切通諸職人相掛候所、初発見積り候与ハ違、堀込土中段々堅石二而午年方去戌年迄、年限五ヶ年之普請二候得ハ大金相掛り、尤御役所様方度々被下金<sup>茂</sup>御座候得共、大金之入用困窮之村方、諸借金返済可仕手段無御座難渋至極仕候、依之奉恐入御願<sup>者</sup>二御座候得共、此節香具踊居村近在<sup>江</sup>参り居り、当村地内借

用仕興行仕度、為地代金三兩差出可申旨申聞、且右興行二付、居村人足召仕不申、都而香具共引請申候筈内段<sup>33</sup>仕候、依之来ル十五日方晴天五日興行御見捨被成下置度奉願上候、何卒御仁恵之御了簡ヲ以被仰付被下置候ハ、堀抜入用借財返済之注力二罷成、惣村方一統難有仕合ニ奉存候、以上

文政十年亥二月

滑川村惣代願人

村年寄

半四郎

長百姓

甚之丞

与頭

六左衛門

同

次右衛門

<sup>31</sup> 佗領：原文ママ、「他領」の意味か。

<sup>32</sup> 出情：原文ママ、「出精」の意。

<sup>33</sup> 原文ママ、談の意味か。



庄屋

紋右衛門

御郡御奉行所様

右之通書上申候扣如此

添書

寺西重次郎様<sup>34</sup>御支配所

奥州伊達郡桑折北町<sup>35</sup>

名主利右衛門組下

同宿本町百姓源次郎娘

とめ

当亥五十九才

右之者廿四輩<sup>36</sup>拝礼として往来書所持いたし、当正月十三日国許出立、同二月朔日当駄迄参り候所、足痛ニ而歩行相成兼難渋仕候趣申出候二付、早速宿申付医師相懸薬用為致候所、早速全快ニ相成候得共、茂歩行難相叶候故、所々巡拝も相成不申候二付、一刻も早く国元<sup>江</sup>罷り歸り申度候

得共、路用貯等も一向無御座候二付、別紙願面写之通願出候間、其段 領之役所へ申達候上、願之通第<sup>37</sup>ニ乗差送り候間、右町迄乍御厄介、宿々村々早々御継送り可被成候、此段以添書得御意度如斯ニ御座候、以上

戸田越前守領分<sup>38</sup>

奥州道中

文政十年亥二月九日

白沢宿<sup>39</sup>

年寄

亀五郎

同

丹次郎

<sup>34</sup> 寺西重次郎様：寺西封元（たかもと）、幕府吏僚、文政一〇年当時は陸奥国伊達郡桑折代官。

<sup>35</sup> 奥州伊達郡桑折北町：現・福島県伊達郡桑折町。

<sup>36</sup> 廿四輩：二十四輩（にじゅうよはい）。

<sup>37</sup> 第（あんだ）：前掲注「案駄（あんだ）」と同じ。

<sup>38</sup> 戸田越前守領分：宇都宮藩、当主は戸田忠温（ただはる）。

<sup>39</sup> 白沢宿：下野国河内郡、奥州街道の宿場、現・栃木県宇都宮市。

問屋

太郎左衛門

上阿久津村<sup>40</sup>より

奥州 桑折宿迄

右村々御役人衆中

文政十年亥二月七日

とめ

白沢宿御役人中

此病人二月十七日下宿方受取、笹川へ遣ス

兩人分三月十五日藤吉<sup>江</sup>渡ス 藤吉

忠三郎

差出申一札之事

右之文言同断

扣

一私義廿四輩為拝礼当亥正月十三日国元国元<sup>41</sup>罷り出候所、途中二而足痛漸々当二月朔日御当駄迄罷越候所、次第二痛強ク歩行相成兼候二付、宿御役人中へ右之由相願申候所、早速宿御申付被下、御宿内中村春益<sup>与</sup>申医師薬用被下故、快方ニ相成候得共、未タ歩行も不自由ニ付迎<sup>茂</sup>廻国相成兼候間、一刻<sup>茂</sup>早く国元<sup>江</sup>罷り帰度存候得共、一向路用貯等も無之候間、何卒宿村送りニ而御差立可被下候、万一途中ニ而如何様之違変御座候所、何之申分無御座候、依之一札差出可処如件

一当十三日当村堰入用無尽興行致候二付、御役所様方御立合<sup>与</sup>して、御立会御足輕中山七郎様御出被成、無尽興行首尾克相添、直ニ芝居御立合被成下候筈之所、役者共不揃二付、日数延引ニ相成候二付、七郎様ニ御願申上候ハ、迎<sup>茂</sup>役者共不揃二候得ハ、十五日初日ニハ相成不申、甚タ込り入申候、夫迎も御上様江ハ御願申上置候得ハ、御目付中山重蔵様御出役可被遊如何仕候而可然哉<sup>与</sup>御願

<sup>40</sup> 上阿久津（かみあくつ）村…下野国塩谷郡、現・栃木県さくら市。

<sup>41</sup> 原文ママ、衍字。

申上候所、式人様被申聞候<sup>者</sup>左候逆無拋義、依而明十五日早天誰二而も長沼表<sup>江</sup>差遣し御目付様御出無之内、役所へ参り日延御願候様被

仰聞候二付、十五日早朝六左衛門差遣し御願申上候所、御目付様御出張之御仕度二而、馬等迄御引寄被成候折二而、其段御役所様へ御願申上候二付、早速御願之通被成下候二付、六左衛門帰宅致候事

一当十七日長沼桑名弥市宅二而、御領内会合無尽在之候二付、隆平罷り越候二付、芝居之義弥々廿日迄相止、又廿一日初日ニ御願申上、夫二付廿日ニハ御立合様御出張可<sup>者</sup>在之、左候得ハ御出迄狂言始不申相待罷り在可申哉御願申上候所、廿一日初日ニ在之候得ハ、廿日ニ<sup>者</sup>出役無之、廿一日出役致候二付、勝手次第第二可致旨被仰付候二付、廿日ニ御出役相待不申始申候事

一当十九日昼八ツ時関下組頭元右衛門・長右衛門、甚七使二而去戌御物成米端米遣し候二付受取申候、尤太賃<sup>42</sup>ハ取持不申候得共受取ハ差遣し申候、依而受取<sup>江</sup>印形致し不申候、太賃遣し次第印形致し遣し可申候間、其節受取

持参可致由申付遣し候事

一当廿日弥々芝居三番打出し始候所、御役所様より被仰付候旨二而、御立合として中山藤四郎様御出役被成候二付、拙者共拾貫内<sup>43</sup>参り居候砌、直ニ引返し申候、乍去御役所様方廿一日初日ニ御出役被成候旨、先達而被仰候二付て<sup>者</sup>打出相始候訳ニ御座候、御目付中山重蔵様ハ御出役不被遊候様藤四郎様御物語ニ御座候

一立会<sup>与</sup>して前日本郷方拾貫内迄往行大義ニ候間、中山様<sup>江</sup>も御願申上、拾貫内郷目付喜惣次宅二而芝居中留置御賄致候事

一廿一日天吉

一廿二日雪あらし

一廿三日風寒し

右之雪あらしニ御座候間、廿二日ニ踊相始申候得共、役者共身体自由ニ相成不申、甚難義之筋相願候二付、同日ハケ成ニ致し候得共、廿三日相休ミ申候

<sup>42</sup> 太賃：原文ママ、「駄賃」の意味か。

<sup>43</sup> 拾貫内（じっこうじ）：前掲注「十貫内」と同じ。

一廿四日天吉

右同日日和宜敷御座候ニ付相始申候

右同日中山藤四郎様御替御立合<sup>与</sup>して、御目付中山重蔵

様・御足輕安藤勇次様廿四日ニ御出被成候ニ付、中山氏<sup>44</sup>

藤四郎様直ニ拾貫内方同日御帰リ被成候事

一廿五日天吉

一廿六日雪あらし

一廿六日御目付中山重蔵様、長沼表江御帰陣被成候、同日

嵐ニ付、芝居相休申候

(挿入一紙)

江戸大芝居役者番付

若女娘 山下民之助

若女形 坂東三津蔵

娘女形 岩井菊蔵

参り不申候

立役 坂東舎丸

立役 嵐鬼嵐

半道 助子屋銭八

立役 浅尾勇蔵

半道 中山春蔵

実役 坂田堅次良

立役 中村曉之助

坂田友次郎

坂東白蔵

立役 坂東松助

参らす

文政十年

亥二月廿一日方

晴天五か所

覚

<sup>44</sup> 中山氏…原文ママ。

一仁井田村 深渡戸

一畑田村 しも村

一成田村 瀧村

一丁守屋村 大窪村

一大桑原村 関下

一山寺村

一袋田村

一矢沢村

一江花村

一滑川村

ノ

右之通明俵縄持参之村々如此ニ御座候、以上

五月六日

覚

錢置金壹分・壹貫六百文替

一金貳朱・九拾文

大工 久右衛門

此御浮役之義、去夏中堰普請へ久右衛門十二日召遣候  
ニ付、右<sup>江</sup>御差引被成下度旨、御願御役所様へ隆平願出  
候所、御役所様ニ而御心藏ニ而在之候様被仰聞候間、右  
之御代官御役所様へ申上候所、納不申相済申候

右<sup>者</sup>去戌御浮役、当亥春上納分、来ル廿五日定之所、調相  
廻り不申候ニ付今日相触申候、来ル廿九日村々無間違相済  
可申候、此書付見届候ハ、村下へ庄屋致印形、早々順達  
留村より可被相返候、以上

亥二月廿四日 御代官方

追啓申達候、深渡戸・畑田村去戌御米少々出不足在  
之候間、此書付相見候ハ、仕切取之、左出仕切役所<sup>江</sup>  
可相納候、仁井田村申遣候、右浮役上納之節、庄屋  
耆人御用在之候間可罷出候、以上

此配符廿六日昼西上刻、仁井田村方受取留候

同廿七日朝少々雪、昼方天吉

以書付申触候、然<sup>者</sup> 一橋儀同様当月廿日卯中刻薨去<sup>45</sup>被



遊候ニ付、鳴物・乱舞来月四日迄、普請・武芸ハ当月廿六日迄御停止之旨従 公儀御触在之候間、相触候条村々寺社門前ニ至迄不洩様可相触候、此配符見届候ハ、村下<sup>江庄</sup>屋致印形、留村より役所<sup>江</sup>可被相返候、以上

二月廿六日

御郡方役所

午下刻ニ出ス

此触書廿七日夕戌上刻仁井田村<sup>江</sup>受取、山寺へ遣ス、但し、刻付下札ハ仁井田ニて未ノ下刻之下札ニ御座候間、申下刻之下札遣し申候、全而ハ戌上刻ニ受取申候仁井田丈夫<sup>46</sup>之者へ申聞候所、順々ニ相送候由申事ニ候、御触書ぬれ候ニ付、右之段申聞候所、仁井田村ニて水かけ候由申ニ付、右之段刻付延引之趣有之、両様丈夫之者ニ申含、役元<sup>江</sup>相達し候様申付遣し候、山寺へも右之趣申遣し候、使持万次・亀五右衛門

扣

一廿七日朝雪あらしニ付、芝居当一日千秋楽相納候心懸ニ候所、同朝小雪ニ驚き候故相休候所、右之仕合扱々込り申候事

一右ニ付御足輕安藤勇次様長沼江御帰<sup>江</sup>り被成候

一右芝居之義ニ付、次右衛門・六左衛門願出候ハ、逆も多分損毛之事ニ御座候間、甚歎<sup>47</sup>ケ義と存候、何卒先日御願申上候日数五日之内、忝日相残り候内<sup>江</sup>跡願二日御願申上、都合三日興行仕度願上<sup>江</sup>度旨申出候、右ニ付御役所様へ御表向御願被下度旨返ス<sup>江</sup>申出候間、当廿九日隆平六左衛門召連御願ニ罷り出候所、跡願二日相叶不申、忝日相叶申候、依之先日残り分共ニ都合式日芝居興行仕候心懸ニ御座候、御停止触四日迄ニ候間、五日・六日之興行致候様申付候事

<sup>45</sup> 一橋儀同様：一橋徳川家第二代・治済（はるさだ）、第一代將軍家齊の実父、文政一〇年二月二〇日逝去、享年七七。

<sup>46</sup> 丈夫（じょうふ）：原文ママ、「状夫」のことか。

<sup>47</sup> 歎ケ義：原文ママ、「歎ケ敷義（なげかわしきぎ）」、「敷」脱か。

送り状之事

与吉

一奥州南部志和郡徳田村<sup>48</sup>長之助倅松之助心願ニ付、此度諸国神社仏閣為順拝罷出候所、伊勢路方病氣差発、当月十八日当村迄罷越候所、一向歩行難相成段申出候ニ付、宿申付薬用養生為致候得共、弥々無御座所詮歩行難相成候間 何卒御慈悲之御了簡ヲ以国元<sup>江</sup>村送りニ被成下候様願出候ニ付、委細相糺候所往来手形等も致所持候段申出候ニ付、右<sup>者</sup>無抛儀ニ付、支配御役所<sup>江</sup>御伺申上候所、御吟味之上御聞届相済候ニ付、右之通村送りヲ以国元<sup>江</sup>御送り届ケ被成候様致度奉存候、依之送り状如此ニ御座候、  
以上

紀州牟婁郡二郷村<sup>49</sup>

文政十年亥正月廿二日

肝煎

源助

同断

藤左衛門

庄屋

紀州牟婁郡二郷村より

奥州南部志和郡徳田村迄

右順路村々

御役人衆中

右令承知候、以上

紀州牟婁郡

長嶋組大庄屋

長井與左衛門

文政十年亥正月廿二日

右之病人三月四日下宿方継来候、然ル所安駄ニ無、杖ニ  
すかり歩ミ来り候、尤送り人老小サ柳固り<sup>50</sup>式つ渋紙  
ニ包、両懸ニ致し送り来り候、当所<sup>江</sup>来り病人相願候<sup>者</sup>、

<sup>48</sup> 奥州南部志和郡徳田村：現・岩手県紫波郡矢巾町東徳田・西徳田。

<sup>49</sup> 紀州牟婁郡二郷村：現・和歌山県北牟婁郡紀北町東長島。  
<sup>50</sup> 柳固り：柳行李のことか。

杖ニすかり候而ハ步行難相成、難義至極ニ奉存候、添之馬ニ而御送り被下度段、達而願出候ニ付、願ニ任セ馬ニ而笹川<sup>江</sup>継送り申候

繼人馬甚七行

三月十五日引札善左衛門へ渡ス

一五天天吉、当日香具芝居興行仕候ニ付、先日御役所様<sup>江</sup>御願申上、御立合様御出被下候様達而御御<sup>51</sup>願申上候ニ付、御立合<sup>与</sup>して安藤勇次様四日夕御出被成、直二十貫内喜惣次宅<sup>江</sup>六左衛門御案内ニ而罷越申候、五日芝居首尾能相済

一六日朝小あらし

一七日天吉

同日役者共願ニ付興行仕候、今日千秋楽是迄興行中無難、村方ニ而も事なく首尾克相済、八日朝安藤勇次様御帰陣被成候、当年芝居之義ハ立元<sup>江</sup>直ニ相願候故見添候得共、以後以之外右様之義致不申候様可被成候、委細ハ書載不申候得共、芝居問屋<sup>与</sup>申ハ決而無用、必ス徳用向無之事ニ候折見合

覚

一人足式拾人

滑川村

是ハ明七日夕勢至堂詰

右<sup>者</sup>会津御家中被通候ニ付、前件之通人馬割合申遣候間、老村方才判与頭老人宛差添無間違可被遣候、此配符見届候ハ、村下へ庄屋衆被成印形、刻付ヲ以早々順達留村より可被相返候、以上

亥三月六日 両割元

申上刻出ス

此配符七日昼受取申候、仁井田村方

卯上刻ニ御座候

覚

一馬十九疋

是者来ル十三日長沼御村大久保詰

但老疋ニ付四百文付

51 御御：原文ママ、衍字。

右<sup>者</sup>御陣屋御薪付馬前件之通割合申上候、老村方才判組頭老人ツ、差添可被遣候、尤雨天ニも有之候ハ、順々ニ繰越可遣候、此配符見届庄屋中致印形、早々順達留村方可相返候、以上

三月十日

両割元

追而申し遣候、明十一日・明後十二日両日之御薪伐ニ候間、右両日之内雨天ニも有之候ハ、右之心得ニ而一同ニ落合不申様申付可被遣候、以上

此配符十四日昼八ツ時仁井田方受取、尤仁井田ニ而相滞居候様ニ而、別紙添状御取持、滑川・山寺・大桑原三ヶ村へ仁井田方直持人足参り申し候

扣

一昨十三日芝居御礼<sup>与</sup>して隆平・次右衛門御役所様<sup>江</sup>御礼ニ罷出申候、矢部八之平様・矢部源五右衛門様・御頭様・御目付中山重蔵様・御足輕中山藤四郎様・安藤勇次

様<sup>江</sup>御礼ニ罷出候、尤品物ハ遣申候、十四日帰宅仕候事一十四日晚日暮越後迄之者之義、手間取渡在之ため廻国致候儀ニ而、同夕行懸り一宿達而相願候ニ付、決而当村ニ而ハ不相成由申聞候所、少々持合貴候錢三十文程御座候由申候間、左候へハ往還側<sup>江</sup>参り相對ヲ以泊り候様申付遣し候所留り所無之、又々相戻り候ニ付、村廻り泊番岩吉宅<sup>江</sup>泊申候、此者大つんほ<sup>52</sup>にて弁舌不相分扱々<sup>53</sup>込り入申候

未得貴意候得共、弥御勇勝ニ被成、御勤務珍重之御儀ニ奉存候、然<sup>者</sup>越後無宿仁助ト申者、其御村和吉<sup>与</sup>申仁隱宅ヲ借り罷在り、同村弥三郎方ニ奉公仕罷在候由之所、右仁助御村人帳ニ御座候处、領主役場より内々承り候様被仰付候ニ付、此段以飛脚御聞合申上候、乍御世話此段御報被下度奉願上候、右得貴意度如斯ニ御座候、恐惶謹言

<sup>52</sup> つんほ：聾（つんぼ）、耳が聞こえないこと。

<sup>53</sup> 込り：原文ママ、「困り」の意。

白川領双石村<sup>54</sup>役人

三月十六日

双石長十郎

長沼御領

十光寺村<sup>55</sup>

御役人中様

如貴命未得御意候得共、弥御勇勝ニ御勤務之由珍重之御義奉存候、然<sup>者</sup>越後無宿仁助と申者、当村和吉隠宅借屋いたし、弥三郎方ニ奉公ニ罷在候哉、御聞糺筋承知仕候、依而和吉・弥三郎相糺候所、左様之者此方ニ無御座候<sup>与</sup>申事ニ御座候、尚又右躰名前之もの借屋等いたしもの諸帳面ニ相記ニ者無御座候、左様御承知可被下候、右之段御答合如此ニ御座候

三月十六日

桑名紋右衛門

双石長十郎様

右之通双石村与頭<sup>与</sup>申内ニ而参り委細聞届候、和吉・弥三郎方相糺候所、全右様之義無之由申聞候ニ付、斯之如返書認遣し申候

覚

一米三斗五升六合

滑川村

右<sup>者</sup>去戌御物成端米、郷藏<sup>江</sup>預り置候分、来ル廿日御門番所迄持参可相納候、此配苻見届候ハ、村下<sup>江</sup>庄屋致印形、早々順達留村より可相返候、以上

亥三月十六日

御代官方

此配苻十八日昼八ツ半時仁井田方受取、十九日明六ツ時山寺へ遣ス

使十次郎

扣

一三月廿五日仙台陸奥守様<sup>56</sup>廿四日之晚本宮御泊、廿五日晚白川御泊ニ而御登被遊候ニ付、当地御通行在之候右之段当御役所様<sup>江</sup>御披露不申上候、尤門橋之義有之

<sup>54</sup> 双石（くらべいし）村：現・福島県白河市双石。

<sup>55</sup> 十光寺（じつこうじ）村：原文ママ、前掲注滑川村の端郷「十貫内」。

<sup>56</sup> 仙台陸奥守様：仙台藩一代藩主伊達斉義。



候二付、村人足二而橋<sup>江</sup>砂盛、馬留等差詰申候、御通行  
首尾克相済申候、然ル所右之節道橋御見分<sup>与</sup>して、御付  
人様御先見廻り之御人御出被成、橋普請御見分被成、右  
普請致候大義料として銀式朱被下置候二付、請取差出  
申候、尤庄屋役方寅次宅<sup>江</sup>罷越候而、右之御人直々上役  
衆<sup>江</sup>宇吉前二而申上候得ハ、又上役人方直々橋之あも  
と<sup>57</sup>二て御殿様<sup>江</sup>申上候、尤橋之あもとへ与頭六左衛門  
差出置候事

以書付申遣候、然<sup>者</sup>御米端米去ル廿日御門番所へ相納候様  
申触候所、失念<sup>与</sup>相見<sup>江</sup>今以持参無之趣御門番方申出候、  
一兩日之内序も有之候ハ、其節持参可相納候、此書付其  
節可相納候

亥三月 御代官方役所

追啓、仁井田方村役人罷出候所、幸便二付無印二而  
申遣候

右御配符参り候二付、廿六日与頭六左衛門納二罷出申候

扣

廿七日 雨天

同日勢州御師三日市大夫次郎名代千田儀八郎、例年之通御  
祓持参相配申候

乍恐以書付奉願上候事

一当村神主因幡死去之後、養子主計二而神職相勤罷在候  
所、八ヶ年以前辰年離別仕候二付、当村半右衛門儀<sup>者</sup>古  
因幡血縁之者二御座候間、半右衛門忤松五郎去ル午年神  
職家相続仕守為仕度、御領内袋田村神主宅二遣し置、職  
道相学、其上当人氣体実直成者<sup>ニ</sup>御座候二付、名前之義  
も主税之介<sup>与</sup>改名仕、神職<sup>58</sup>家相続為仕度奉願上候  
何卒 御仁恵ヲ以右奉願上候通被為 仰付被下置候ハ、  
社家相続二罷成村方一統難有仕合ニ奉存候、以上

滑川村願人長百姓

<sup>57</sup> 橋之あもと…原文ママ、「橋の袂(たもと)」の意味か。  
<sup>58</sup> 原文では、「職」の右側に「主」を(神主の意)。

文政十年亥三月

甚之丞

惣百姓代

宇吉

与頭

次右衛門

同

六左衛門

庄屋

紋右衛門

寺社御奉行所様

右之通相認御役所様<sup>江</sup>御内見ニ入候所、矢部八之

平様被 仰聞候ハ、神主相統願主計離別之儀、其

節相願不申哉二被 仰候二付、隆平申上候<sup>者</sup>其節

離別之砌御伺申上置与申上候所、尚又跡養子之儀

も同時ニ御願申上候様申上候得ハ、御同人様右之

通御加筆被成下候左之通

乍恐

一当村神主因幡養子主税之介儀、年若ニ付神職勤兼候ニ

付、八ヶ年以前より高田領濱尾村<sup>59</sup>神主佐伯主水方<sup>江</sup>兼

帶相頼置候所、主税之介儀年頃ニ罷成、神職相勤候ニ

付、神職相統為仕度奉願上候何卒 御仁恵ヲ以右奉願上

候通被為 仰付被下置候ハ、村方一統難有仕合ニ奉存

候、以上

滑川村願人長百姓

年号

甚之丞

百姓惣代

宇吉

与頭

六左衛門

同

次右衛門

庄屋

紋右衛門

59 高田領濱尾村…越後国高田藩領、現・須賀川市浜尾。

寺社御奉行所様

右奉願上候通被 仰付被下置度奉願候、以上

白川領須賀川

注連頭<sup>60</sup>

須田伊豆守

右之通相認差上申候

扣

一当月分鶏卵納ニ久太・辰次郎兩人参り節ニ、下江花村へ  
無尽成金之義ニ付相廻り候間、兩人二所ニ致申候、依之  
引札相渡候

以書付申遣候、然<sup>者</sup>村々用水御普請場為見分、明四日志茂  
村口上り、矢部八之平相廻り候間、村役人共罷出案内可致  
候、此書付見届候ハ、村下へ庄屋致印形、早々順達シ留  
り村より役所へ可被相返候、以上

四月三日 御郡方役所

此触書四日朝六ツ半時山寺村より請取、直ニ仁井田  
村へ遣ス、使岩吉

矢部八之平様五日昼山寺村方御移り被遊、同日端郷<sup>61</sup>普請  
場弥重池并かち山田池御見分被遊同暮ニ相成候間、明六日  
本郷用水堰御見分被成置候、山越ニ関下・熊野之所迄御出  
被成候事

同五日白川領梓衝村<sup>62</sup>神主岩瀬惣社ニ御座候ニ付、年々配  
札<sup>63</sup>ニ罷出、同日越久方相移り居村豊八宅へ泊申候、六日  
朝下宿村<sup>64</sup>へ継送り申候

<sup>60</sup> 注連頭（しめかしら）：神職組織のリーダー、「社人（しやにん）頭」とも呼ぶ。

<sup>61</sup> 端郷（はご）：前掲注「十貫内」を指す。

<sup>62</sup> 梓衝（ほこつき）村：岩瀬郡、現・福島県須賀川市。

<sup>63</sup> 配札（はいさつ）：神社の札を配ること。

<sup>64</sup> 下宿（しもじゆく）村：現・須賀川市下宿町。

以書付申触候、然<sup>者</sup>明後十二日矢沢村<sup>江</sup>出役、畑田村・深渡戸村一同駄付<sup>65</sup>候、得御用罷越取扱候条、例年之通相心得取扱可申候

一雨天ニも在之候ハ、翌日<sup>江</sup>操越<sup>66</sup>可申候事

矢沢村父<sup>67</sup>式拾疋

一十三日仁井田村<sup>江</sup>罷越取扱父駒之義、例年<sup>江</sup>多く召仕候条、村方<sup>江</sup>も厳敷申付置、早朝<sup>江</sup>牽出候様申付、尤駒数

三拾疋<sup>江</sup>ニ在之候条、右様相心得可申候事

一滑川村へ申遣候、十四日罷越取扱候条、山寺村申合取

扱可申候、尤父駒十三疋<sup>江</sup>ニ候事

一大桑原村十五日取扱候条、右様相心得可申候事

父駒十九疋寄<sup>江</sup>ニ候

右割合之通取扱申候条、心得違無之様相心得、留村<sup>江</sup>此書

付可相返候、以上

亥四月十日 善方吉右衛門

十三日 父駒牽出日限

仁井田村へ 志茂村 ○大久保村

十二日 十三日 十五日

矢沢村へ 仁井田村へ 大桑原

十二日 十三日 十四日

矢沢村へ 仁井田へ 滑川村

十二日 十三日

○山寺村 ○滑川村 矢沢村へ 仁井田村へ

十四日 十五日 十二日 十二日 十三日

居村<sup>68</sup> 大桑原村 ○仁井田村 矢沢村 居村

十四日 十五日

滑川村 大桑原村 ○矢沢村 ○畑田村 ○深渡戸村

十二日 十三日 十四日 十五日

居村 仁井田村 滑川村 大桑原村

右割合之通召仕候条、村々無間違様取扱可被申候、尤見届

<sup>65</sup> 駄付(だつけ) …馬に荷物を積むこと。

<sup>66</sup> 操越…原文ママ、「繰越」の意味。

<sup>67</sup> 父…父駒(馬)のこと。

<sup>68</sup> 居村…ここでは袋田村を指す。

候ハ、村下へ庄屋致印形早々順達留村より可被相返候、以上

此配符十一日昼明山寺村方受取、直ニ新井田<sup>69</sup>へ遣ス

使武吉

右孕付<sup>70</sup>十二日駒主惣七、矢沢村へ参り候所、御立合濟被仰聞候ハ、明十三日仁井田村ニハ堰池等御普請在之、立合兩人参り居り候間、明日ハ其村へ罷越、仁井田村ハ十四日ニ可致旨被仰聞候哉ニ付、十三日取扱申候

以書付申触候、然<sup>者</sup>諸国酒造之儀、文化三寅年已後相始候、休株并ニ渡世不致者酒造之儀追々及沙太<sup>71</sup>候迄可為無用旨、去々酉年十二月 公儀より御触有之候所、最早不及其義、去々酉年以前之通勝手次第酒造可致旨、此度 公儀方御触在之候条、村々不洩様可申渡候、此書付見届候ハ、村下へ庄屋致印形早々順達留村方可被相廻候、以上

四月九日 御郡方役所

此触書十二日昼仁井田村方受取、山寺へ遣ス

尚々鶏卵調書差出不申村も在之候得共、鶏卵調書横紙<sup>江</sup>相認差出候様可被致候、以上

以書付申遣候、然<sup>者</sup>当月分納鶏卵之義来ル十五日頃迄ニ村々無間違可被納候、此書付見届候ハ、村下へ庄屋中致印形早々順達留村より可被相返候、以上

亥四月十二日 両割元

別紙申遣候、然<sup>者</sup>当年鶏卵納軒数書差出不申候間、来ル十五日鶏卵納候節、無間違差出可被申候、以上

亥四月十二日 両割元

此配符兩条十三日朝四ツ時、山寺村より受取、仁井田へ遣

<sup>69</sup> 原文ママ、「仁井田」か。

<sup>70</sup> 孕付（はらみつ）…種付け。

<sup>71</sup> 沙太（さた）…原文ママ、「沙汰」。



ス

十三日雨天

(挿入一紙)

以書附申遣候、然<sup>者</sup>其村父駒十八日志茂村へ天氣次第差出可申候、以上

十五日

ノ

山寺村

滑川村庄屋

善方吉右衛門

扣

十三日孕付取扱御用善方吉右衛門様、同昼明矢沢村へ御越被遊、同日雨天ニ付取扱出来不申、十四日取扱相済、同日大桑原村へ御越被遊候事

以書付申遣候、然<sup>者</sup>其村之父駒来ル十八日志茂村<sup>江</sup>天氣次第可差出候、此書付其節可相返候、以上

四月十五日

善方吉右衛門

大桑原村へ出ス

山寺村より

滑川村 庄屋

此配符十六日昼山寺へ受取申候

才判与頭六左衛門行 覚

一人足拾壺人 是ハ今夕長沼詰

一馬式拾壺疋 是ハ右同断

右<sup>者</sup>朱座<sup>72</sup>御用荷物并会津様<sup>73</sup>御跡荷物下りニ而申来候ニ付、前件之通人馬割合申進候、尤会津様江戸表当月七日御発駕、高原通<sup>74</sup>御通被遊、御荷物之義<sup>者</sup>此海道通候趣申来

<sup>72</sup> 朱座(しゅざ) … 江戸幕府の統制下にあり、朱や朱墨の製造と販売の特権を有する商人。

<sup>73</sup> 会津様…会津藩主松平容敬(かたataka)。

候ニ付、割合申進候義ニ御座候間、左様御心得、老村より才判老人ツ、御差添無間違可被遣候、尤少人ニ候間、惣割ニ相成兼拔々割合申進候、追而差引相立候条左様御心得可被遣候、此配符見届候ハ、村下へ庄屋中被成印形、早々順達留村より可相返候、以上

和田紋十郎

亥四月十六日

桑名捨蔵

申下刻

右村々庄屋衆中

此配符十七日朝卯下刻越久村方受取留り

扣

当四月五日用水御普請、為見分矢部八之平様御出役被遊候節、人足御移り被遊御引合ニ被成下候ニ付、普請場端郷用水弥十池并かち山田池御普請腹付<sup>75</sup>、同十六日方本郷人足不残端郷同断、同日弥十池出来、翌十七日かち山田池腹付人足右同断、昼前<sup>76</sup>出来申候事、御立合無之村役人計り

一腹付<sup>74</sup>申候而も簀<sup>75</sup>ニ而築候二者無之、池の中ニ有之滑り土を土手へ塗付申候事并底樋尻<sup>76</sup>之方低ク相成、水拔不足候ニ付、右同断堀割居替申候扣如此

一弥十池土手長サ三拾四間、かち山田土手長サ十五間ニ候一四月廿日須賀川本寺<sup>77</sup>千用寺<sup>78</sup>ニ而此度范證<sup>79</sup>拵候迎若僧老人参り、村中軒別勧化相頼候ニ付、本山之義下宿村ニ而も同様寄進致候帳面<sup>80</sup>ニ付、右同様当村ニ而も軒別為致申候、但端郷共<sup>81</sup>候事

<sup>74</sup> 高原通：下野国尾頭峠（おかしらとうげ、現・栃木県日光市と那須塩原市を結ぶ）の尾根伝いに南下して、高原新田（現・日光市）へ抜ける道。

<sup>75</sup> 腹付（はらづけ）：水害防止のため、堤防斜面を厚くする工事。

<sup>76</sup> 樋（ひ）：水を導き送る長い管

<sup>77</sup> 本寺（ほんじ）：自分の檀那寺。

<sup>78</sup> 千用寺（せんようじ）：現・須賀川市諏訪町、天台宗。

<sup>79</sup> 范證（はんしょう）：半鐘のこと。火事、天災、泥棒などを知らせるために打つ鐘。青銅製で、寺院の梵鐘（ぼんしょう）に比べて小さいため半鐘という。

以書付申遣候、然<sup>者</sup>其村々父駒明廿四日仁井田村<sup>江</sup>牽出候様可申付候、以上

亥四月廿三日

善方吉右衛門

大桑原村・袋田村・山寺村・滑川村

此配符廿三日夜丑中刻山寺方受取泊り<sup>80</sup>

(挿入一紙)

扣覚

当年四月十六日端郷十貫内用水弥十池并同かち山田池御普請腹付、当春御見分之節御願申上候所、元々様御見分之上人足御積り被遊御引合ニ被成下候ニ付、十六日本郷人足不残、端郷ハ勿論弥十池普請同日出来、翌十七日かち山田池腹付、十七日本端郷昼前ニ被致申候事、御立合無之村役人計り二候

扣

当月十六日詰之人馬割先日相当り候所、右配符越久村方受取申候、然ル所右之配符箱入ニ而参り候由之所、越久方当村へ箱入ニ無之、配符計り被遣申候、右ニ付長沼割元中方状箱催促申来候所、居村ニ而受取不申候ニ付、相まま以不申候事、右状左之通

以書付申遣候、然<sup>者</sup>四月十六日出之配符箱、如何ニも間違ニ候哉相返し不申候間、此配符着次第可被相廻候、以上

亥四月廿六日

両割元

右之通り廿七日仁井田方持参致し候

<sup>80</sup> 泊り…原文ママ、「留まり」の意。

<sup>81</sup> 青麻(あおそ) …青麻神社、現・福島県岩瀬郡天栄村か。

<sup>82</sup> 三光宮(さんこうぐう) …三光稲荷神社、現・福島県西白河郡矢吹町。

<sup>83</sup> 三光院(さんこういん) …三光寺のことか、現・福島県白河市。

一当中ハ青麻<sup>81</sup>・三光宮<sup>82</sup>・三光院<sup>83</sup> 例年之通配札勸化相廻り候、同日笹川宿ヲ参り候所、居村之義ハ軒別等致し不申、例年之通帳面<sup>江</sup>計り相記差遣し申候、左無之候而ハ笹川方下宿へ非順不宜趣、在々相順候間、帳面<sup>江</sup>計り相記遣し申候事

一当年田方苗代之義、苗起不宜不残うせ申候<sup>而</sup>、甚タ入り入<sup>84</sup>申候、尤当村杯ハ左程追蒔いたし候程之事も無之候得共、他村ニ而ハ随分有之由ニ御座候、此間不正之冷氣勝ニ御座候間、苗莫<sup>与</sup>不申誠ニ平年与ハ違候事ニ御座候、甚タしく当年ハ水旱之憂ハ有之間敷哉<sup>与</sup>推察致候間、此段丈たのもしく致候事

以書付申触候、然<sup>者</sup>苗起不宜薄苗ニ追日相成候、苗代も場所ニ在之哉之趣相聞候、依之苗不足ニ相立候様相見<sup>江</sup>候者共江ハ、此節種粃三四日も水へひたし、芽きうし、為蒔ふらし、此節蒔付候ても随分用立候事ニ候間、村々小前之上吟味いたし、急度蒔付可申候、此段急度相触候間、村々行届候様可取計候、此書付見届候ハ、村下<sup>江</sup>庄屋印形いた

し刻付ヲ以早々順達し留村より可被相返候、以上

亥四月晦日 御郡方役所

此配蒔晦日朝卯上刻、山寺村より受取、直ニ仁井田村へ遣ス、尤山寺村ニ而ハ丑下刻ニ受取之、下ケ札順ニいたし候得ハ、子之下刻ニ御座候へ共、全ク卯上刻ニ御座候間、左様下ケ札致候事

以書付申遣候、然<sup>者</sup>五月分鶏卵納之義、御寒晒一同為御差登相成候間、六月朔日頃ニ無間違村々可被納候、尤過納無之様月並ニ可申付候、道中駄数相究申候間、左様相心得月々過納無之様相納可被申候、此書付見届候ハ、村下へ庄屋衆被成印形、早々順達シ留村より可被相返候、以上

亥四月晦日 両割元

此配蒔晦日昼酉下刻山寺より受取、直ニ仁井田村へ遣ス

<sup>84</sup> 込り（こまり）入：前掲注53参照。

扣

一当五月四日佐竹右京太夫様<sup>85</sup>、三日之晚白川御泊、四日晚郡山御泊り、下二而御通行被遊候所、当地首尾克御通行被遊候

一五日朝、田村隱岐守様<sup>86</sup>四日晚須か川御泊二而、五日朝御通行被遊候所、首尾克相済申候

一同日米沢上杉弾正様<sup>87</sup>下り二而郡山御泊り二而御通行被遊候所、是又首尾克相済申候事

(挿入一紙)

覚

- 一大下岩吉、田尻<sup>88</sup>紋藏、苗代橋迄忒人
- 一頃方田方大下へ之道橋四ツ四人
- 一法光作田尻、法光田<sup>江</sup>之水口両堀忒人
- 一入積場方瀬<sup>江</sup>苗代<sup>江</sup>之水口両堀四人
- 一早稲田堀浚人足八人
- 一四ツおさは組方田水尻橋方海道出口迄三人

- 一与祖方田西道橋方大下、腰巻田尻迄忒人
- 一大橋小堰方入つみ場豊八、田水堀迄忒人
- 一年木田<sup>88</sup>堀三人
- 一西惣原桑畑水口方伊之吉、田苗代迄三人

覚

一明俵忒百俵也 縄千忒百尋  
役高壺万三千百拾忒石<sup>江</sup>割

但高千石ニ付俵拾五俵忒歩五里三毛

縄九拾壺尋五歩壺り九毛

<sup>85</sup> 佐竹右京太夫様：原文ママ、「佐竹右京大夫（だいぶ）」、秋田藩第一〇代・佐竹義厚（よしひろ）。

<sup>86</sup> 田村隱岐守様：原文ママ、「田村右京大夫」、陸奥国一関藩第六代・田村宗顕（むねあき）。

<sup>87</sup> 上杉弾正様：原文ママ、「上杉弾正大弼（だいはつ）」、米沢藩第一一代・上杉斉定（なりさだ）。

<sup>88</sup> 年木田（ねぎた）：現・須賀川市今泉根本田。



此割

一明俵拾六俵	縄九拾六尋	江花村
一明俵九俵	同五拾六尋	瀧村
一同拾六俵	同九拾七尋	成田村 <sup>89</sup>
一明俵九俵	縄五拾三尋	丁守屋村 <sup>90</sup>
一同七俵	同四拾三尋	深渡戸村
一同拾壹俵	同六拾四尋	畑田村
一同拾六俵	同九拾六尋	矢沢村
一同七俵	同四拾貳尋	袋田村
一同四拾壹俵	同貳百四拾五尋	仁井田村
一同拾壹俵	同六拾三尋	滑川村
一同五俵	同三拾尋	山寺村
一同拾俵	同六拾三尋	大桑原村
一同貳拾貳俵	同百三拾三尋	大窪村 <sup>91</sup>
一同貳拾俵	同百拾九尋	志茂村

右<sup>者</sup>滑川村井堰御普請ニ付、明俵縄前件之通割合申遣候間、  
来ル六日迄ニ無間違右村可被納候、此書附見届候ハ、村

下へ庄屋中印形致し刻付ヲ以早々順達留村より可相返候、  
以上

亥五月三日

和田紋十郎

酉中刻

桑名捨藏

此配符四日子下刻仁井田村より受取、直ニ山寺村へ  
遣ス

覚

一人足拾六人

稲村

是ハ右村ノ余内申来候ニ付、余荷<sup>92</sup>割左之通

外高八百六拾五石六斗七升貳合

役高貳万五千六百五拾七石九斗貳升八合<sup>江</sup>割

<sup>89</sup> 成田村：現・郡山市安積町成田。

<sup>90</sup> 丁守屋：原文ママ、町守屋（まちもりや）村、現・須賀川市  
町守屋。

<sup>91</sup> 大窪村：原文ママ、大久保村、現・須賀川市大久保。

<sup>92</sup> 余内（よない）：余分に負担すること、余荷（よない）。

但高千石二付

人足六分式り三毛五八

此割

一人足耄人

江花村

配符継

瀧村

一人足耄人

成田村

配符継

丁守屋

一配符継

里守屋

同

上柱田

一人足耄人

下柱田村

人足耄人

今泉村

一人足耄人

舘ヶ岡

人足式人

仁井田村

一配符継

滑川村

人足耄人

越久村

一配符継

袋田村

人足耄人

矢沢村

右<sup>者</sup>先日申進候滑川村井堰普請人足惣割之内、右村<sup>方</sup>余荷申来候二付、余内割申進候日限之義ハ、重而申進候間、其節可被遣候、此配符御見届村下へ庄屋衆被成印形刻付ヲ以順達留村より可被相返候、以上

亥五月四日

和田紋十郎

桑名捨藏

右村々庄屋衆中

此配符五日未中刻、仁井田村<sup>方</sup>受取、直ニ越久村へ遣

ス、使万五郎

(挿入一紙)

人頭払一札之事

一

何村たれ俸

たれ

年

右之者其御村津右衛門養子縁付遣候二付、当御改<sup>方</sup>村元人帳相除候条、御村増人ニ可被成候、尤右之者御法度類門末へも無御座、宗旨之儀<sup>者</sup>何宗何寺旦那二御座候、則宗旨も相除在之候間、津右衛門同宗同寺御加へ可被成候、為後日人頭払一札仍而如件

何領何村庄屋

文政十亥年

御名

白川御領所いな村<sup>93</sup>庄屋

矢吹丈之助殿

扣

当月六日丹羽左京大夫様<sup>94</sup>、郡山御泊り下り二而御通行被遊候所、当地御通行首尾克相済申候

一当四月中大雨之節、岩ノ入新池土手大破二相成候二付、当月二日本端郷村中二而普請致申候事

一当六日水戸浪士野磨喜太・平田政右衛門<sup>与</sup>申者兩人参り、合力相願候二付差出申候

一五月七日与頭六左衛門ヲ以、御役所様<sup>江</sup>御伺申上候者、当村堰普請何時方御取懸り被下候哉申上候所、矢部八之平様被仰候儀ハ、其村<sup>江</sup>明日罷越、明後日方普請致度候間、左様相心得申へく儀被仰候二付、六左衛門相返り申候事

一右二付、同八日本端郷人足不残下拵二召仕申候、尤人足割之義、御領内・他領共五百人召仕申候事

一同日為御立合矢部八之平様・割元和田紋十郎殿・御足輕中山七郎様御出被遊、九日十日御普請相済、十一日御歸陣被遊候、矢部様ハ御荷物計り御送り被成、是方鏡沼村<sup>95</sup>常松氏二而野蛭伺置候二付、右村<sup>江</sup>御出被成、夫方

長沼<sup>江</sup>御陣宅被成候事

一堰普請之次第、堰之内新川二相成候、小川際之堰之方<sup>江</sup>腹付致候、夫方丁子口<sup>96</sup>上、大水之節水押上ケ候而ハ、土手弱ク有之候二付、川除関之内名和久方地藏畑堀除迄、土手ヲ築申候并堀抜場丁子口入口度々懸崩・堀浚二難義致候二付、石切場下大松・中之松、北堀<sup>江</sup>土臺ヲ居、柱ヲ立、梁ヲ懸、三間計り之内上<sup>江</sup>、松之丸木ヲ并、上山方崩候而も構無之様ニ致候事

一一体当年之義ハ氣候初春之内、三、四月下旬迄ハケ成之陽氣ニ御座候所、当月上旬方日々寒氣強ク、氣候不順之冷氣ニ相成、苗等一向募り不申、甚タ込り入申候、苗蒔時方ハ最早当十二日<sup>江</sup>四拾貳日二相成候得共、漸ク壺寸四、五分ならでハのび不申、早稲田植之義も当十四日ニ

<sup>93</sup> いな村…岩瀬郡稲村か。

<sup>94</sup> 丹羽左京大夫（にわさきようだいぶ）…陸奥国二本松藩主・丹羽長富。

<sup>95</sup> 鏡沼村…現・福島県岩瀬郡鏡石町。

<sup>96</sup> 丁子口…水路が狭くなった所、銚子口。

御座候所、連も廿日・廿五、六日ならでハ植候事相成申間敷候様存候、夫ニ順し螢之義寒ニ付一体不宜、桑之葉場所ニ方日々之風ニ而落候場も在之候由、何ヲ申被案候年ニ而、飢饉之募りなを推察致候事<sup>与</sup>世間ニ而取沙太ニ候事

一当月一日、二日天氣宜ク御座候所、三日、四日<sup>与</sup>染氣勝陰雨ニ御座候、五日天氣宜敷御座候、六日方ハ当十六日迄陰雨相起り、西南未申ノ方方日々雲出、時々雨降、天氣宜敷候得共寒氣勝ニ而風はけしく、当月ニ至り単物着し候事相成不申、未夕綿入等二つ重着致候歟、寒風砌しく御座候事

此節ニ相成候てハ綿入杯ハ夢ニも不見申、丸こたつニ而も宜敷様ニ相成申候

一当十七日、八日、九日<sup>97</sup>方<sup>江</sup>相成候而ハ日和打続、農業あらくれ時節天吉ニ罷成、田陸共<sup>江</sup>大ニ宜敷、苗等秀候ニ付、村々安心致咄、是ニ依当年ハ案事候様成義候在之間敷ニ勘察仕候

(挿入一紙)

一当閏六月六日庄屋紋右衛門・与頭六左衛門・郷目付見習代七、御役所様<sup>江</sup>暑中御窺ニ罷出申候

一同九日当春被仰付置候人別帳差上不申置候間、此節差上申候、組頭六左衛門行

一同十五日堰入用無尽興行仕候ニ付、無尽ベ方為御用、御足輕中山藤四郎様・割元和田紋十郎致出役候所、興行首尾克相済、十六日帰宅被成候事

一同十七日若者共村役元<sup>江</sup>相願出候ハ、当年作方<sup>江</sup>大造ニ虫付、大豆・小豆・大角豆等、猶又稲ハ勿論不殘虫付、作方大ニ不宜候ニ付、村若者共相談を以、明十七日朝浅返り<sup>98</sup>作留神事致、虫送仕度奉願上候由申出候ニ付、尤之事ニ付任其意神事尽致申候事

覚

<sup>97</sup> 十七日、八日、九日：原文ママ、十七日から十九日のことか。

<sup>98</sup> 朝浅返り：朝草刈り、夏の早朝に草を刈ること。

仙台御領増田村<sup>99</sup>与三郎弟

一 病人医師

玄達

右之者去月中<sup>江</sup>当村茂左衛門方<sup>江</sup>逗留仕居候处、病氣二付  
国元<sup>江</sup>罷り歸り度願二付繼送り申候間、宿々村々御繼送り  
被下度奉願上候、右御願申上度如此二御座候

亥五月十八日

浅川公料沢井村<sup>100</sup>庄屋

甚右衛門

仙台御領増田村迄

宿々御問屋

村々御庄屋 衆中

右之病人十九日昼時、下宿村<sup>江</sup>方繼送り来り候所、右病人  
御触へ不相当二候所、下宿村二而添書致遣し候文言

覚

一病人耄人

前書同断

玄達

右<sup>者</sup>順々宿村々方送<sup>江</sup>り来候二付、領主役所<sup>江</sup>伺之上差図  
二付繼送り申候、以上

下宿村庄屋

亥五月十九日

遠藤雄蔵

滑川村

御役人衆中

覚

一

仙台御領増田村医師

玄達

右之者病氣二付歩行不叶二付、浅川公料沢井村役人添書ヲ  
以繼送来候二付、今十九日貴村<sup>江</sup>方繼送り被遣候二付、病体  
相糺候所相違無之候、併送り出し添書文言、御触へ不当二  
候所、其御村二而領主役所<sup>江</sup>伺之上繼来候添書相見候間、  
宿村々添書共二受取申候而右先宿故障之義も在之候ハ、  
貴村へ相戻し可申候、為念如此二御座候、以上

亥五月十九日

滑川村庄屋

桑名紋右衛門

<sup>99</sup> 増田村：陸奥国名取郡増田村、現・宮城県名取市。

<sup>100</sup> 浅川公料沢井村：浅川公料とは、浅川代官所（現・福島県石川郡浅川町）管下の幕府領を指す。そのうち、沢井村は現・福島県石川郡石川町。

下宿村庄屋

遠藤雄藏殿

右之通返事致申候、次ニ笹川江之書付左之通

覚

一 文言右同断

右之者病氣ニ而歩行不相叶候ニ付、浅川公料沢井村役人添書ヲ以継送り来候ニ付立會、病体相糺候所相違無之候、併送り出候添書之文言、先年御触ニ不相当候得共、下宿村ニ而領主役所<sup>江</sup>伺之上継送り来り候、添書相見<sup>江</sup>申候間、継送り出し申候、例之通御請継可被成候、以上

滑川村庄屋

亥五月十九日

桑名紋右衛門

笹川村名主

河原吉兵衛殿

問屋

さゝ木与惣衛殿

同

大野七左衛門殿

右之通相認差遣し申候

笹川継人足

沖五郎

甚七

引札兩人分直ニ兩人ニ相渡申候

以書付申触候、然<sup>者</sup>当年苗不足ニ相聞、殊ニ育立不宜候間田植之義例年之日積よわし、四、五日も相後植始候様可取計候、猶又面々油断ハ有之間敷事ニ候得共、此節苗代ふりこやし可致候、第一荏かす<sup>101</sup>宜候得共、不行届者ハ何ニ而も宜敷候間致し可申候、此段村々行届候様急度可申付候、先達而も相触置候通種跡蒔之分も情々<sup>102</sup>手入可致候、尤取実ニ至り先蒔ニハ劣り方申候得共、其節ニ至り 御仁恵筋も可有之候間、苗不足余田出来不申候様、村々庄屋・組頭・長百姓共急度相心得行届候様可取計候、此書付見届候

<sup>101</sup> 荏かす：荏粕（えがす）、荏胡麻の実から油を搾り取ったかすで、田畑の肥料となる。

<sup>102</sup> 情々：原文ママ、「精々」の意。



ハ、村下<sup>江</sup>庄屋致印形早々順達留村より可被相返候、以  
上

亥五月廿一日 御郡方

此触書廿一日夜亥中刻山寺村より受取、直二仁井田  
村へ遣ス

(挿入一紙)

乍去私義ハ田場才判仕候間、同役六左衛門吉池<sup>江</sup>立合被  
下候様申出候二付、是又申付候事

一当月七日十貫内与頭次右衛門申出候<sup>者</sup>、用水吉池明日水  
干ニ罷成候、明日朝草返り<sup>103</sup>後、村方壺人ツ、罷り出、  
樋埒ニ而取分取申度候、吉申出候二付、任其意小走を以  
為触申候事

同日

一村代参、高湯山<sup>104</sup>相立候二付、日待神事申触候事  
文政十年亥七月

扣

一当廿一日早稲田植ニ御座候間、当村扨ニ而も少々宛植仕  
付申候、同日朝方少々曇り昼明方雨降、地雨之如く相成  
申候、当年苗不足ニ付、御上様ニ而も夫々御仁恵在之候  
所、苗不足之義ハ一鉢只今頃ニ相成候而も漸ク目きれ<sup>105</sup>  
候計リ之苗共在之、不同ニ付田植始候事も不相成まゝ  
めづらしき事ニ御座候、依之御仁恵之趣小前<sup>江</sup>小走を以  
夫々心得之ため申触候事

一当廿二日大雨ニ付、大堰中通かんな堰之所大破ニ相成候  
間、本端郷人足不相残、廿六日普請ニ取懸り申候、尤川  
中四間計リ大破ニ相成申候二付、家壺軒ニ付長柄木三本  
宛為差出申候、然ル所今以水落不申候得共、時節柄之处  
普請致し不申候而ハ、田方あらくれ等ニも差支、猶又  
日々雨天ニ付又も大水ニも相成候而ハ普請出来不申候間  
取掛り申候、乍去御役所様<sup>江</sup>ハ御訴不申上、村ニ而計リ

<sup>103</sup> 前掲「朝浅返り」の項参照。

<sup>104</sup> 高湯山（たかゆさん）：現・栃木県那須町の霊山。

<sup>105</sup> 目きれ：芽きれ、芽がないの意か。

普請致し申候

乍恐以書付奉願上候事

一私義心願ニ付伊勢參宮仕度、当二月十七日ニ同行七人ニ而国元出立仕候所、同行之内四人途中ニ而病氣付在所<sup>江</sup>罷り歸り候得共、私義ハ是非へ參詣仕度同行三人ニ相成、本宮宿辺迄ハ一同罷越候得共、夫<sup>レ</sup>病氣付候故道も計取<sup>106</sup>不申、同行式人之者共ニも相別、忝人ニ而当五月十二日夜曾根田村<sup>107</sup>茶屋ニ一宿致し、同十三日暮時分御当宿罷り通り候所、俄ニ氣分悪敷罷成候故、御役人中様ニ右之段申上候所、早速宿被 仰付御見届之上御医師御掛御介抱被成下、重々難有仕合ニ奉存候、然ル所余程快方ニ御座候間、何卒早々帰国仕度趣、宿源三郎ヲ以御願申上候所、睨<sup>与</sup>葉用致し出立可致段被 仰聞候得共、一日も早く国許<sup>江</sup>罷り歸り度段、再応御願申上候所御聞濟被下、猶又路用貯等も一切無御座難渋之趣申上、第二而宿村繼ヲ以御送り被下候様御願申上候所、願之通被 仰

渡難有仕合ニ奉存候、若道中ニ而如何様之変事御座候共、御当宿へ対し何ニ而も申分無御座、誠ニ御深切之御厚恩ニ被成重々難有仕合ニ奉存候、以上

佐竹右京大夫領分

文政十年丁亥五月十七日

羽州平賀郡<sup>108</sup>深堀村

名主甚兵衛配下

年亥廿七才

百姓倉之助女房ちん

喜連川宿御役人衆中

同人所持之品<sup>ハ</sup>十四品有之候所略ス

送り状之事

別紙願書写之通当宿ニ而三、四日致介抱追々快方之趣候所、

<sup>106</sup> 計取：原文ママ、「抄り」の意。

<sup>107</sup> 曾根田村：信夫郡、現・福島市。

<sup>108</sup> 平賀郡：原文ママ、平鹿郡を指すと考えられるが同郡に「深堀村」は存在せず、佐竹領では雄勝郡深堀村（現・秋田県湯沢市）がある。

右病人相歎候ハ一刻も早く国許<sup>江</sup>罷り帰度旨相願候ニ付、  
医師<sup>江</sup>も相断候所、脈体も宜敷、持病之外余病之体も無之  
様、追々快方ニ可趣旨申聞候<sup>ニ</sup>付、領主役所<sup>江</sup>相窺之上当  
宿<sup>方</sup>第二乗セ、宿村送り差出申候、尤路用貯等も無之候  
間、宿々村々ニ而食事等御心付、夜ニ入候ハ、宿御申付差  
支無之様御精々、右村方迄早々御送り可被成候、以上

奥州道中喜連川宿

文政十年亥五月十七日

問屋

上野太右衛門

年寄

高橋源左衛門

曾根田村<sup>方</sup>

羽州深堀村迄右宿々村々御役人中

右之病人亥五月廿三日昼時下宿村<sup>方</sup>継送り来り候ニ付、

笹川村<sup>江</sup>継送り遣し申候

繼人足

藤吉

新蔵

此新蔵、割元帳面ニ付引札差出不申候、藤

吉来り差出申候

此藤吉分十月十日引札相渡

覚

一金壺両壺分ト

滑川村

本鑢百七拾五文

半四郎

一同断

喜惣次

右<sup>者</sup>江戸宗慶寺無尽七会目<sup>109</sup>、当月十六日相催候ニ付、件

之通掛金差登セ候様申来候間、明後廿六日夕迄<sup>江</sup>二役所<sup>江</sup>相

納候様可相達候、此書付見届候ハ、村下へ庄屋致印形

早々順達留村<sup>方</sup>其節可相返候、以上

五月廿四日

御郡方

此配符廿五日昼時仁井田村<sup>方</sup>受取泊り

右之段直ニ善左衛門ヲ以、半四郎・喜惣次兩人江右之段申

達候事

109 七会目…七回目。

覚

一人足七拾人

内人足三拾人

是ハ是ハ<sup>110</sup>長沼・勢至堂・

江花、合而宿並人足壹日分引

残人足四拾人

是ハ長沼・勢至堂<sup>江</sup>所之御

蠟荷物運送馬添人足

一馬貳百三拾疋

内馬三拾疋

是ハ長沼・勢至堂・江花合而

宿並馬壹日分引

残馬貳百疋

是ハ長沼・勢至堂<sup>江</sup>所之御

蠟荷物運送馬

役高貳万五千四百七拾六石<sup>江</sup>割

但高千石二付、

人足壹人五分七厘金<sup>111</sup>

馬七疋八分五厘壹毛

此割

才判人与頭次右衛門行

一人足壹人

滑川村

是ハ来ル五日昼八つ時長沼詰

一馬五疋

同村

是ハ右同断

右<sup>者</sup>此度 御証文御蠟荷物<sup>江</sup>表<sup>江</sup>為御差登被遊候二付、

来ル五日々勢至堂泊ニ而通申来候二付、前件之通人馬割合

申進候間、詰所日限刻限とも無間違壹村より才判組頭壹人

宛御差添可被遣候、尤前々方請負人在之荷覆延代、馬壹疋

二付鑓拾壹文宛致持参、詰所問屋方<sup>江</sup>相渡候様才判之もの

へ被御申付可被遣候、此配符御見届村下へ庄屋衆被成刻付

ヲ以早々順達留村方可被相返候、以上

亥六月三日

和田紋十郎

桑名捨藏

右村々庄屋衆中

此配符六月四日卯上刻仁井田村より受取、直ニ越久

村へ遣ス

<sup>110</sup> 原文ママ、衍字。

<sup>111</sup> 原文ママ。

送り状之事

仙台陸奥守様御城下

北拾番丁百姓

小太重

当亥廿三才

右之者伊勢参宮下向之道中、善光寺<sup>江</sup>相廻り当地迄罷り越候所、途中<sup>方</sup>病氣ニ而不相叶、難渋之趣願出候ニ付、止宿申付五七日薬用致候得<sup>者</sup>少々快方ニ候得共未歩行難成、殊ニ貯も無之極難ニ付、宿々村々以御情帰国仕度段願出候ニ付、願之通送り出し申候、先々以御慈悲を帰国仕候様奉願候、若行暮候而時分ニも相成候ハ、止宿食事等御心添可被下候、依之送り状如此ニ御座候、以上

信州佐久郡小諸町問屋庄屋

文政十亥年五月十七日

石塚重兵衛

年寄

善左衛門

同断

文右衛門

所々御関所

御役人衆中様

宿々村々

御役人中様

覚

仙台御城下北十番丁百姓

小太重

当亥廿三才

右<sup>者</sup>跡宿村々<sup>方</sup>送り来候得共、送り出候添書之表 御地頭様<sup>江</sup>伺之訳認落ニも候哉<sup>与</sup>存候故、当村ニ而役所<sup>江</sup>相伺候所、病人願之通先々<sup>江</sup>繼立遣候様差図在之候間、送り遣し候条、左様御承出可被下候、以上

亥六月七日

下宿村庄屋

遠藤雄蔵

滑川村庄屋

桑名紋右衛門殿

右之通下宿村<sup>方</sup>添書致し遣し候間、前文之振合受取書遣し申候、笹川<sup>江</sup>も右之振合相認遣し申候、以上

此病人六月七日下午宿<sup>方</sup>受取、笹川へ遣ス

村々御役人中

繼人足 牛五郎

岩吉

此兩人甚蔵方帳面ニ而相当之間、引札差出不申候

右之病人送り出候添書文言御触ニ不相当ニ候所、下宿村ニ而領主役所<sup>江</sup>相伺差図ニ付繼来候添書相見申候間、右之通笹川<sup>江</sup>も申達候事、右之夫文右衛門付添参り候所、同行三人之内老人之女相送り申候由ニ而、夫婦式人連ニ而参り申候、以上

村送り一札

六月十六日下午宿<sup>方</sup>受取、笹川江 繼人足 藤吉

辰之助

一此文右衛門<sup>与</sup>申者、出羽国平賀郡秋田浅間内村<sup>112</sup>野間下

是も甚蔵帳面故、引札不渡旨

出生ニ而、女式人連同行三人ニ而、坂東順礼<sup>113</sup>ニ罷出最早帰国ニ相趣候所、当村ニ而婦人老病氣付、薬用致候得共、未懐義不得、当人帰国致度願ニ付相送り申候、尤委細之義ハ文右衛門方ニ而口上可申上候、依之宿村送り一札依而如件

覚

一人足三百六拾人 内 人足三拾人

文政十亥年六月九日 野州塩谷郡

是ハ長沼・勢至堂・江花、合而宿並人足引

高内村役人

長右衛門

宿々

<sup>112</sup> 浅間内村…浅舞（あさまい）村、現・秋田県横手市平鹿町浅舞。

<sup>113</sup> 坂東順礼…関東地方に所在する坂東三十三観音巡礼。



残人足三百三拾人

是ハ長沼・勢至堂江所之駕

籠・長持兩持人足

一馬五拾疋

内 馬三拾疋

是ハ長沼・勢至堂・江花合而

宿並馬引

残馬貳拾疋

是ハ長沼・勢至堂江所之御

荷物運送馬

役高貳万五千四百七拾六石江割

但高千石ニ付

人足拾貳人九分五リ三毛三六

馬七分八リ五毛金五貳

此割

才判与頭六左衛門行

一人足九人

滑川村

是ハ明十八日昼八ツ時勢至堂詰

一馬壹疋

是ハ右同斷

右者佐州御奉行<sup>114</sup>支配組頭大原吉重郎様御登ニ而被通候ニ

付、前件之通人足割合申進候間、壹村より才判・組頭壹人

宛御差添、詰所日限刻限ニも無間違可被遣候、此配符見届

候ハ、村下江庄屋衆被成印形、刻付ヲ以早々順達留村方可

被相返候、以上

亥六月十七日

和田紋十郎

亥上刻

桑名捨藏

右村々庄屋衆中

此配符十八日昼巳ノ上刻、仁井田村より受取、直ニ

越久村江遣ス、使牛藏

以書付申触候、然者德川式部卿様<sup>115</sup>昨十日朝御逝去、鳴

物・乱舞来ル十九日迄、普請・武芸者当月十二日御停止之

趣御触在之候間相触候条、村々右様相心得寺社門前ニ至迄

<sup>114</sup> 佐州御奉行：幕府佐渡奉行。

<sup>115</sup> 德川式部卿：德川斉明（なりのり）、清水德川家（御三卿）四代、一代将軍德川家斉の十一男。

不洩様急度相心得可申候、此触書見届候ハ、村下へ庄屋致印形、刻付を以順達留村より役所<sup>江</sup>可被相返候、以上

六月十七日

御郡方

午中刻

此触書十八日昼亥中刻、仁井田村<sup>江</sup>受取、直ニ山寺村遣ス

覚

一人足式人

滑川村

是ハ今夕勢至堂詰

一馬拾疋 是ハ右同断

右<sup>者</sup>会津御領御年貢金并水原<sup>116</sup>御荷物通申来候ニ付、前件之通人馬割合申遣候間、忝村<sup>江</sup>才判組頭忝人ツ、差添無間違可被遣候、尤少人馬ニ付拔々ニ割合申遣候、追而差引相立候条、左様相心得可被遣候、此配符見届候ハ、村下へ庄屋衆被成印形、刻付ヲ以早々順達留村<sup>江</sup>可被相返候、以上

亥六月十八日

和田紋十郎

申上刻

桑名捨藏

右村々庄屋衆中

此配符十九日朝寅中刻仁井田村<sup>江</sup>受取留り

送り之事

松平主税様<sup>117</sup>御領分

播州佐用郡平福村

年六十七

伊七

右之者当地五十川村着致候所、病氣ニ而相成候ニ付療治為致候所、于今快氣不致内第送ニ而罷越度段願出候ニ付、則送遣し候、乍御世話駄々御送り被下度致御頼候、尤往来寺印外其地之町年寄手形所持罷有候ニ付、御改御披見可被下候

<sup>116</sup> 水原（すいばら）：越後国蒲原（かんばら）郡、現・阿賀野市水原町、幕府水原代官所があった。

<sup>117</sup> 旗本松平（松井）家、知行五千石で、播磨国佐用郡平福（ひらふく）村（現・兵庫県佐用郡佐用町）に陣屋があった。

文政十年

出羽米沢大町

六月十四日

大名主

舟山甚作

馱々

御問屋

御役人中

笹川方受取

下宿へ送ル

傳次分七月廿二日渡ス

六月十八日

送り人足 傳次

七郎平

七郎平分三郎右衛門へ渡ス

以書付申触候、然<sup>者</sup>去ル丑年御妾腹被成御出生候  
錚藏<sup>ツツ</sup>様御事御虚弱ニ付、表向御弘無御座候所、御丈夫ニ  
御成長被成候間、此度表向御弘被 仰出候間、村々心  
得<sup>与</sup>して相触候条不洩様可相触候、尤右御名前之者在之  
候ハ、早々改名可申付候

一当亥田方苗不足、最早村々相分可申候間、来ル廿六日昼  
時迄ニ取調、書付可差出候、尤本帳ニ<sup>者</sup>間ニ合申間敷候  
間、<sup>ハ</sup>高計り認可差出候

一当亥田方余田帳之儀も取調不遠可差出候

右之趣見届候ハ、村下<sup>江</sup>庄や印形いたし留村方可相返候、  
以上

亥六月廿四日 御郡方

已上刻遣ス

尚々大窪村・仁井田村・矢沢村之義<sup>者</sup>、未何等届無之候  
得共、田植相済候ハ、存候、否廿六日ニ可申出候

一苗不足相立不申不残植付候村方ハ、廿六日不及罷出候  
間、村下へ苗不足不相立旨下札ニ致シ可差越候、此配符  
留村方早々可相返候、以上

此配符廿四日子中刻山寺村方受取、直ニ仁井田へ遣  
シ申候、当村之義ハ苗不足無御座候故、下ケ札ニ致  
し差上申候

当閏六月六日庄屋弥七<sup>方</sup>与頭六左衛門・郷目付代七暑中御  
窺ニ罷出申候

覚

三浦平八郎様

小瀬八右衛門

右之通白木之箱入、閏六月十二日仁井田<sup>方</sup>受取、御

代田村へ遣ス

同十二日守山御陣屋<sup>118</sup>方長沼御陣屋へ右同断

白木之箱入、同日亥中刻御代田村<sup>方</sup>受取、直ニ仁井

田へ遣ス

急度申触候

一松菊様<sup>119</sup>御儀、松平阿波守殿<sup>120</sup><sup>江</sup>御養子被 仰出候

一田安様<sup>121</sup>御儀、大納言 兵部卿様<sup>122</sup>御義、宰相ニ御官位

御昇進被成候

一大蔵大輔様御嫡子 久松丸様去月廿七日御卒去、御法号

深遠様<sup>与</sup>奉称候事

右之趣村々為心得相触候条、先例之通村中寺社門前ニ至迄  
可相触候、此触書見届候ハ、村下へ庄屋致印形、早々順  
達留村<sup>方</sup>役所<sup>江</sup>可相返候、以上

亥閏六月十二日 御郡方役所

覚

一馬老疋

詰人足老人

但し脇差ヲ帶候

<sup>118</sup> 水戸徳川家の連枝(分家)にあたる守山松平家(所領二万石)、

領地は明治維新時に陸奥国田村郡三二か村、常陸国に三四か  
村で、守山陣屋は現・福島県郡山市田村町にあった。

<sup>119</sup> 松菊：蜂須賀斉裕の幼名、徳川家斉の二十二男。

<sup>120</sup> 松平阿波守：前掲蜂須賀斉裕の養家、阿波国徳島藩主・蜂須  
賀氏、斉裕は第一三代。

<sup>121</sup> 田安様：田安德川家第三代・徳川斉匡(なりまさ)。文政一〇  
年の叙任は権大納言。

<sup>122</sup> 兵部卿様：一橋徳川家第四代・徳川斉礼(なりのり)。

右<sup>者</sup>此度村々心学教鑑として相原宇平御差下、今十二日方  
下江花村始廻村致候間、先例之通相心得、村役人共才判致  
し、老若男女不洩様聴聞為致可申候、尤昼八ツ時方夕迄  
席夜講之、二席之導話在之候間、右様相心得可申候、若其  
余も聴聞仕度村方ハ其旨宇平方<sup>江</sup>可願出候

一賄之義<sup>者</sup>是迄之通所有合之品ニ而相賄馳走ケ間鋪義一切  
不仕候様可致候事

右之趣急度申触候間見届候ハ、村下へ庄屋致印形、  
早々順達留村方可相返候

亥閏六月十二日 御郡方

此触書両状同十四日昼七ツ半時仁井田村方受取、  
山寺<sup>江</sup>遣ス

以書付申遣候、然<sup>者</sup>六月分納鶏卵之義、来ル十六日迄二  
村々無間違可被納候、此書付見届候ハ、村下へ庄屋衆被  
成印形、早々順達留村方可被相返候、以上

亥閏六月十四日 両割元

此配符十四日夕五ツ時山寺村方受取留り

覚

一出羽国村山郡尾花沢村<sup>123</sup>東秀<sup>与</sup>申僧、歳今年廿七才、宗  
旨禅州<sup>124</sup>同村龍昌寺弟子ニ御座候之处、去年七月中旬当  
村<sup>江</sup>被参、気分不相勝歩行不相叶旨被申候ニ付、療養差  
加介抱遣候、気分ハ追々快方之由ニ候へ共歩行一向不相  
叶、然ル所生所へ歸度旨、別紙の通被相願、則往来手  
形所持、国元<sup>江</sup>ハ親兄弟等慥ニ有之旨ニ付、願書写相添  
御公儀御触之通駕籠へ乗セ送り出し可申候处、駕籠ニ乗  
候義不相叶、当人願ニ依而安駄ニ乗セ送り出し候間、道  
筋無惜御送可罷成候、依而如件

因州邑美郡田嶋村

文政十年

年寄

亥五月

幸四郎

<sup>123</sup> 尾花沢村：現・山形県尾花沢市。

<sup>124</sup> 原文ママ、禅宗。

庄屋

兵左衛門

出羽国村山郡尾花沢村迄道筋

宿々村々御役人中様

外二同人往来手形并右村役人<sup>江</sup>差出候同書付在之

候得共写取不申候、此病人閏六月十七日下宿<sup>江</sup>受

取、笹川へ継人足依而引札惣七義<sup>江</sup>相渡ス

乍恐以口上書奉願上候事

一私儀志願在之、去ル六月一日国元出立、湯殿山参詣罷出  
候所、岩城辺二而持病之瘡毒差發り、湯本二而十日余逗  
留致、療養前快<sup>125</sup>二相成候所、元方端金之路用遣切可行  
手段無御座候得共、相成丈ハ湯殿山参詣仕度、道筋他方  
二而漸々志願相届帰路之处、当月十五日方々眼氣差發り  
寔ニ難渋仕、同六日御当地分村端迄罷越候所、残暑当り  
ニも候哉行跡先之分地相知不申、盲目同様ニ罷成、松山  
ニ倒居候所、早速御見届被下置、逸々申上候所、御介抱

之段難有奉存候、恐入候御願ニ<sup>者</sup>御座候へ共、眼病之義  
ニ候得ハ、早速快氣ニも相成間敷奉存候、依之一刻も早  
く国元<sup>江</sup>罷り歸り眼療仕度存候得共、何分眼相見へ不申、  
其上路用貯も無御座候間、宿村継馬ニ而成共帰国仕度奉  
存候、何卒御慈悲ヲ以奉願上候通御承引被成下被仰付被  
下度奉願上候、以上

閏六月廿三日 上総村<sup>126</sup>夷隅郡

松丸村<sup>127</sup>百姓十三郎倅

寅吉

当亥廿二才

長沼御領滑川村

御役人中様

永見新之尾様<sup>128</sup>御知行所

上総国夷隅郡松丸村百姓

<sup>125</sup> 前快：原文ママ、全快の意味。

<sup>126</sup> 原文ママ、上総国。

<sup>127</sup> 松丸村：現・千葉県いすみ市。

<sup>128</sup> 原文ママ、永見新之丞。



十三郎悴

一病人

寅吉

当亥廿二才

右之者志願在之、去ル六月朔日国元出立、湯殿山志罷出候所、道中筋二而持病之瘡毒相煩難洩之上漸々湯殿山参詣致候、帰路之所眼病差発、其上暑当リ二而惣身のぼせ頭重く歩行相成兼、当所支配松山ニ倒居候段為知二付、早速立合見聞候所、申口前文之通相違無之候二付、介抱申付滞留為致置候所、暑期も薄ク罷成候得共、眼病早速ニも治シ不申、仍而ハ一刻も早く国元<sup>江</sup>罷り帰り、医療致度候得共、路用も無之難洩之旨口上書ニ而願出候二付、其段其御筋へ申達候所、病人願之通可申付旨、御下知有之候二付、今廿三日馬二而差立申候、順路御継送り被下候様、尚又及暮候ハ、一宿之御手当被下度、尚当人口上書之写差添候間、御披見之上御取計頼入存候、以上

松平播磨守<sup>129</sup>領分

文政十年亥閏六月廿三日

奥州岩瀬郡長沼領

滑川村庄屋

桑名紋右衛門

越後高田領

下宿村庄屋

遠藤雄藏殿

宿村々

御役人衆中

永見新之尾<sup>130</sup>様御知行所

上総国夷隅郡松丸村

名主

三郎兵衛殿

扣 残り沓人分も子三月九日順右衛門へ渡ス此

病人順右衛門、馬二而下宿村継送り申候二

付、二人分ニ致候、此度沓人分相渡申候、

残り沓人分ハ相渡不申候事

<sup>129</sup> 松平播磨守：府中松平家第八代・松平頼説（よりひさ）。

<sup>130</sup> 原文ママ、永見新之丞。

一当村出口常ハ持分之松山ニ病氣ニ而倒居候者在之由ニ付、佐五兵衛隱居訴出候間、閏六月廿二日隆平・与頭六左衛門早速参り見届候所、生国上総国夷隅郡御代官永見新之尾知行所松丸村百姓十三郎悴寅吉当亥廿二才之由、然ル所同人義去年中大病相煩候ニ付、羽州湯殿山<sup>江</sup>願狀いたし、段々快方ニ相成候間、何卒湯殿山<sup>江</sup>参詣致度心願ニ而罷り下り全躰困窮者故、国元出立之時漸々半路用程ならでハ貯等無之、難渋之身分ニ候得共、願狀之御礼詣ながら是非之参詣仕度一心ニ而、去月一日国元出立罷り下り候所、岩城湯本ニ而瘡毒相煩、日数十日余致滞留候内、貯壹錢も無之、奉謝意湯殿山へ同廿六日参詣仕残心ニ奉存候、当年之義ハ親之新盆ニも御座候間、盆前ニ罷り帰度奉存候へ共、行先々如何様之宿御座候哉被案申候、依之明日ハ御当地出立仕申候間、今晚是迄御泊メ被下候様奉存候由申候<sup>与</sup>申事故、兩人相答申候ハ、其方前沙汰<sup>131</sup>筋ニも在之候得ハ、引取宿申付介抱可為致候所、尚又国元へ罷り帰度由申候得ハ、案太<sup>132</sup>ニ成共相送り可申由申聞候所、明日中出立致候様申候間、左ニ相任せ、

乍去野宿も相成間敷候間、京屋へ召連、良貞隱宅之下ヲかし泊申候、

一然ル所廿三日朝右病人寅吉、拙宅<sup>江</sup>尋参り、左願候ハ、先夜も奉申上候通、今早朝出立可致候由奉申上候所、昨晚八ツ時方眼頻ニ相やめ持病之ふき出し、殊ニ相やめ歩行難相成奉存候、依之宿送りを以御送り被下度由申聞候ニ付、同人<sup>江</sup>申聞候ハ案太<sup>133</sup>ニ而相送り候ニハ其方へ二、三日滞留致シ不申ニハ相成間敷、其内意御関<sup>江</sup>申上候間、右体ニ而宜敷在之处申聞候所、同人申聞候ハ、一刻も早く殊ニ盆前ニ国元へ罷り帰り、親之新盆致度奉存候、当村方之介包<sup>134</sup>ニ預り、殊ニハ同所滞留致候内、日も相送り申候間、相成候義ニ御座候ハ、はか取候様馬ニ而成共御送り被下度旨立<sup>135</sup>而相願候ニ付、其意ニまかせ差立

131 原文ママ、沙汰。

132 案太…原文ママ、案駄（あんだ）。

133 前掲と同じ、案駄。

134 原文ママ、介抱。

135 原文ママ、「達」の意か。

申候様如此

(挿入一紙)

一筆致啓上候、追日秋冷相募候所、弥御堅勝ニ被成御勤役  
珍重之御儀奉存候、然<sup>者</sup>当所菊池良貞と申仁、心学教道修  
行江戸表ニ罷り登り居候所、去ル八月廿一日彼地出立、常  
州信田郡信田村<sup>136江</sup>罷越、教道致居趣之所、此節大病相煩  
候旨、江戸表心学社中<sup>江</sup>書中為知ニ付、右良貞親類之者、  
今十八日爰許出立、信田村迄其御宿村罷通候、旅中之儀相  
滞候義も候ハ、御心添被成下、右村まで無滞着仕候様為致  
度御座候、偏ニ御心添之程奉頼候、余ハ此者<sup>江</sup>御頼得貴意  
候、右添書一筆如斯ニ候

恐々謹言

奥州長沼領

滑川村庄屋

桑名紋右衛門

子九月十八日

常州信田郡

信田村迄

御村々

御内役中様

追啓、御頼申上候、行暮難洪願出候ハ、一宿御申付御手  
当被成下度奉頼上候

(挿入一紙)

以書付申遣候、然ハ先日配符、其村留リニ而差遣候处、今  
以相返シ不申候ニ付、配符箱差支ニ相成候間、早々可被相  
返候、以上

亥閏六月廿四日

志も村・深渡戸・畑田・矢沢・仁井田村より可被相届候、  
以上

滑川村庄屋中

両割元

<sup>136</sup> 信田郡信田村：原文ママ、信太（しだ）郡信太村、現・茨城  
県稲敷郡美浦村信太。

扣

一当閏六月廿四日隆平、御役所様ニ而御用之趣ニ付罷出候  
処、人別帳間違ニ而御用之趣ニ御座候、店ノ友一郎・  
与頭治右衛門召連、無<sup>137</sup>尽御礼申上、御足輕中山藤四郎  
様・割元和田紋十郎様へ致、同日帰村仕申候

一当年氣候暖ニして照り強ク、当月初旬方陰雨少しも無  
之、夏作蕎麦・大根等植候段之事ニ而、田作等も殊之外  
山作之分日割ニ相成候位ニ付、外御領分杯ニ而ハ毎日之  
雨乞等致候而も、し<sup>138</sup>ほい無<sup>139</sup>之、世間一統之照ニ罷成、  
甚込り入申候、尤堺明神<sup>139</sup>、下ハ本宮辺迄ハ折々しめり  
在之由ニ候得共、此辺之義ハ降不申候事

一心学道話先生相原宇平様、閏六月廿六日朝、関下方御移  
被成、昼方道話相始、同日夜迄二廊ニ而相止メ、廿七日  
朝山寺村<sup>江</sup>御越被成候、尤御同人様御格式相直り御改、  
御上下御着、持繼ニ而御廻村被遊候

一当月二日方当廿九日天氣打續、田陸共ニ不宜、山作田之  
義ハ不殘早割ニ相成、畑作之義も同柄ニ相成、野菜・大  
根之類、猶又<sup>者</sup>麦・芋之類不殘照ニ込り申候、誠ニ天変

之至<sup>与</sup>被存候、右ニ付氣候不宜位ニ候間、当村杯ニ致し  
申候而ハ子共ニ腹痛流行、猶又流行虱、殊之外幼少之者  
共甚難義、大人・小兒共ニ難遁段尅軒も病者無之家ハ稀  
成事ニ候、夫ニ付小兒病死之者多有之候ニ付、年祭・三  
日正月杯祭り頻ニ申候得共、不氣候故ニ候処甚込り入申  
候

#### 送り状之事

一奥州仙台深谷郡小松村<sup>140</sup>壽吉<sup>与</sup>申者、去ル戌九月国元出  
立、諸国神社仏閣肅拜<sup>141</sup>ニ罷出、当月十二日当村迄罷越  
<sup>137</sup>無<sup>138</sup>尽（むじん）：一定の口数と給付金額を定めて加入者を募  
り、定期的に掛金を払い込ませて、抽選・入札などの方法に  
より金銭や物品を与える。

<sup>138</sup>しほい：しほい、しほい雨、じめじめ降る雨。

<sup>139</sup>堺明神：境明神、現・福島県白河市と栃木県那須町の二社並  
立。

<sup>140</sup>深谷郡小松村：仙台領に「深谷郡」は存在せず、陸奥国桃生  
郡小松村、現・宮城県東松島市小松。

候所、病氣差発候ニ付、村方郷納屋ニ而醫薬用へ介抱致し遣し候所、追々快候得共、何分歩行難相成、其上路用貯も無之、何卒村送りニ而国元在所迄送り出し呉候様被相難<sup>142</sup>候ニ付、御領主役所<sup>江</sup>相窺差図ヲ請、今日送り出シ候間、国元在所迄早々帰着在之候様御取計可被下候、猶食事等御心添被下度候、則所持之往来手形相添遣し候、以上

松平左兵衛督殿<sup>143</sup> 領分

播州明石郡大蔵谷村<sup>144</sup>

文政十年

亥六月廿一日

庄屋 如右衛門

同 周八

奥州仙台深谷郡小松村迄

所々

御役人中

外ニ往来手形同村門徒宗正佛寺之往来所持致候得、写不申候

此病人七月二日下宿村方請取

笹川<sup>江</sup>遣ス 継人足 仲三郎

藤右衛門

兩人分引札七月廿二日善左衛門へ相渡ス

扣

一当月七日十貫内与頭次右衛門申出候<sup>者</sup>、用水吉池明日水干ニ相成申候、明日朝草返り<sup>145</sup>後、壺軒老人ツ、罷り出取之分取申度由ニ付任其意申候、尤本郷与頭六左衛門立会ニ申付候事

一同日野州高湯山<sup>146</sup>江為代参兩人相立申候ニ付、同日日待神事申触候事

<sup>141</sup> 肅拜：うつむいて、手を地につけるほど頭をさげる敬礼。

<sup>142</sup> 難：原文ママ、頼か。

<sup>143</sup> 松平左兵衛督殿：松平斉韶（なりつぐ）、播磨国明石藩七代。

<sup>144</sup> 大蔵谷村：現・兵庫県明石市大蔵谷。

<sup>145</sup> 前掲参照。

<sup>146</sup> 前掲参照。

一右川狩ニ付うなき<sup>147</sup>拾壹本、村方<sup>江</sup>貫候ニ付、御役所矢部八之平様へ四本、源五右衛門様<sup>江</sup>三本、源内様<sup>江</sup>式本、御奉行様<sup>江</sup>式本献上仕候、人足方五郎ニ為持差遣申候

覚

人足貳百六拾六人 内人足九拾人

是ハ長沼・勢至堂・江花、合而宿並人足三分引

残人足百七拾六人 是ハ長沼・勢至堂<sup>江</sup>所之御蠟荷物

運送馬添人足

馬八百拾疋 内馬九拾疋

是ハ長沼・勢至堂・江花、合而

宿並馬三分引

残馬七百拾疋 是ハ長沼・勢至堂<sup>江</sup>所之御蠟荷物

運送之馬

役高貳万五千四百七拾六石<sup>江</sup>割

但高千石ニ付

人足六人九分・金八四六

馬貳拾八疋貳分六一八

此割

才判人与頭六左衛門行

一人足五人 滑川村 是ハ来ル十一日昼八ツ時

勢至堂詰

一馬貳拾疋 同村 是ハ右同断

右<sup>者</sup>此度 御証文御蠟荷物江戸表<sup>江</sup>為御差登被遊候ニ付、

来ル九日夕方十一日夕迄勢至堂宿泊リニ而通申来候ニ付、

前件之通人馬割合申進候間、詰所日限刻限共ニ無間違老村

方才判与頭老入ツ、御差添可被遣候、尤前々方請負人在之

荷覆筵代、馬壹疋ニ付鑢拾貫文ツ、致持参、詰所問屋方<sup>江</sup>

相渡候様、才判之ものへ御申付可被遣候、此配符見届候

ハ、村下へ庄屋衆被成印形、刻付ヲ以早々順達留村方可被

相返候

他行無印

<sup>147</sup> うなき…鰻（うなぎ）。

和田紋十郎

亥七月八日

桑名捨藏

右村々庄屋衆中

此配荷九日夜卯中刻、仁井田村方受取、直ニ越久  
村<sup>江</sup>遣ス

控

一京都北野天満宮勸化として壺兩人越久村方参り、勸内<sup>148</sup>  
相願相頼候二付、南鐐壺片相記遣申候、尤袋田村和田五  
兵衛殿<sup>江</sup>相遣呉候様被申候間、左ニ相記申候

覺

一人足貳百拾四人 内 人足三拾人

是ハ長沼・勢至堂・江花、合而宿  
並人足一日分引

残人足百八拾四人 是ハ長沼・勢至堂兩所<sup>江</sup>之駕籠、

長持并歩持運送之人足

一馬貳百三拾八疋 内馬三拾疋

是ハ長沼・勢至堂・江花、合而  
宿並之馬壺日分引  
残馬貳百八疋 是ハ長沼・勢至堂兩所<sup>江</sup>之御荷物  
運送馬件之通り

役高貳万五千四百七拾六石<sup>江</sup>割

高千石二付

但 人足七人貳分式り二四

馬八疋壺分六り四五

此割

才料与頭次右衛門行

此分十八日詰二成

一人足五人滑川村 是ハ当月十四日昼八ツ時長沼詰

一馬六疋 同村 是ハ右同断

右<sup>者</sup>此度 溝口伯耆守様御通行被遊候二付、前件之通人馬

<sup>148</sup> 勸内：原文ママ、勸化。



割合申進候間、詰所刻限無間違老村より才判与頭老人ツ、御差添可被遣候

一人足持道具之儀ハ書状銘々致持参候様被御申付可被遣候

一前々方申触候通内々ニ而人馬賃算堅相成不申候間、才判之ものへ克々被御申付可被遣候、尚又人馬惡例相改候間、才判之ものへ御申付可被遣候、此配苻見届候ハ、村下へ庄屋致印形刻付ヲ以、早々順達留村より可被相返候、以上

亥七月

他行無印

和田紋十郎

桑名捨藏

右村々庄屋衆中

此配苻七月十日午上刻仁井田村方受取、越久へ遣ス

扣

一当七月十日夜方大雨ニ相成、田陸共潤ニ罷成先々安心

致、依之村中潤神事申付候事

一六月分鶏卵納之義、当十一日差遣申候

覚

一人足六拾人

是ハ長沼・勢至堂両所へ之御蠟荷

物運送馬添人足

一馬式百四拾四疋

是ハ右同断

御蠟荷物運送之馬

役高式万五千四百七拾六石<sup>江</sup>割

但 高千石ニ付人足式人三分五也

馬九疋五分七也

此わり

才判与頭次右衛門病氣、代駕礪右衛門行

人足式人滑川村

是ハ明十二日昼八ツ時せいし堂

馬七疋

是ハ右同断

右<sup>者</sup>御証文御蠟荷物雨天ニ付、勢至堂宿<sup>江</sup>御逗留ニ相成候間、日後候ニ相成、依而前件之通人馬割合申進候間、詰所

日限無間違、老村より才判与頭老入ツ、御差添被遣候、尤覆錢之義今日詰合之村方受取候様問屋方江申達候間、覆錢之義ハ及持参不申候、此配苻御見届候ハ、村下へ庄屋致印形、早々順達刻付ヲ以留村方可被相返候、以上

他行無印

亥七月十一日

和田紋十郎

桑名捨藏

右村々庄屋衆中

右十八日詰、才判与頭次右衛門行

以書付申進候、然<sup>者</sup>溝口伯耆守様御通行ニ付、人馬割合申進置候所、御延引ニ相成、当月十九日勢至堂宿泊リニ而相成申候、尤先達而申進置候通人馬之義<sup>者</sup>相替候義無之、長沼詰之分ハ当月十八日昼八ツ時詰、せいし堂詰之分ハ同十九日昼八ツ時可被遣候、此配苻見届候ハ、村下へ庄屋衆被成印形、早々順達留村より可被相返候、以上

他行無印

亥七月十一日

和田紋十郎

桑名捨藏

此配苻両冊、同十二日未下刻仁井田村方受取、直ニ越久村へ遣ス

扣

一御蠟荷物御通り之内、居村藤右衛門馬ニ付候荷式固<sup>149</sup>、馬之尻尾又ハ馬のくさニ而打上候哉、少々とろニ成居候由ニ而、諸役人方彼は見届候所、左候得共左程痛ニも相成候訳ニも無之由ニ才判与頭六左衛門申事ニ御座候、しかし外村々之附荷<sup>江</sup>ハ沢山有之荷も数有由申聞候、依之上包等拵置候哉之荷杯も相見<sup>江</sup>申由ニ御座候

一一昨十一日鶏卵六月納分八百七ツ差遣し申候所、御蠟荷物運送ニ付、人足ニ参り候者共惣七・伴作・万五郎・久吉・十次郎参り申候、然ル所右之鶏数ニ而八人足式人掛

149 固…原文ママ、「箇」の意。

り二候へ共、此度ハ三人ニ而可遣由申聞遣申候、然ル所  
普請有り之砌、右之者共相願申候<sup>者</sup>何卒五人分御渡被下  
度由申聞候へ共、以後右程ニ而ハ不相成候間決而不相  
成、しかし久吉割番之義ニ候間、如何可致哉申聞候所、  
何れニも拙者難申聞由申ニ付、此度之義ハ内々ニ而三人  
分之人足ニいたし、残り式人ハ札ニ而差遣し候呉申聞置  
候事、しかし右程之義以後ハ無用ニ候間、左様相心得可  
申由申聞置候事

覚

一馬七疋

滑川村

是ハ参着次第長沼詰

右<sup>者</sup>会津御蔵入御用荷物被通候ニ付、件之通割合申進候間、  
壹村方才判与頭壺人ツ、御差添可被遣候、尤少人馬ニ付惣  
割ニ相成兼、依而拔わり致候条、右様御心得可被遣候、追  
而差引相立申候、此配符見届候ハ、村下へ庄屋中被成印  
形、早々順達留村方刻付ヲ以可被相返候、以上

他行無印

亥七月十三日

和田紋十郎

未下刻

桑名捨藏

此配符十三日夜寅上刻越久村方受取留り

扣

一生国仙台城下之者よしと申女阿母<sup>150</sup>、去ル十四年以前よ  
り当所<sup>江</sup>罷越、所々<sup>江</sup>洗濯等致しくれ罷り有候所、最早  
当年ニ至り而ハ、同人老衰いたし洗濯等も相成兼候位ニ  
付、茶屋医者良貞本家<sup>江</sup>遣し置申候所、前置屋<sup>江</sup>罷り出  
念仏修行致候折、仰ニ付万人之合力ヲ以くらし罷有申  
候、然ル所当月初旬方らひやふ<sup>151</sup>之氣相煩居候哉之所、  
昨十六日病死、右之段村志し之者共召寄、尚又同人セン  
たく等ニ而も致居候者共集取置申候、尤病中良貞妻致看  
病呉候、同人取置候ニハ、清八常ハ存入申候、地取六尺

<sup>150</sup> 阿母（あぼ）…乳母の異称。

<sup>151</sup> らひやふ…癩病（らいびょう）。

之者共<sup>江</sup>ハ久吉・熊五郎・藤吉・万五郎入申候、此者共ハ長沼普請前ニ致し貰、右之段庄屋・与頭在合之上取置申候、少々錢等も有之候ニ付、法光寺<sup>152</sup>へ着小羽織、錢貳百文遣し申候、残り三百文ハ地取六尺辻話致し候者共ニ酒為給申候、其外少々衣類も在之候得共、売払旁々いたし弔致し申候

一右之女死道具不残用意致候半、尚又血縁并ニ戒名等迄心懸置申候、願心妙方信女<sup>与</sup>在之申候事、不残棺<sup>江合一</sup><sup>153</sup>シ申候

一右之死義羽州山寺<sup>154</sup>ニ而同心ニ罷成、随忍ト名ヲ改申候由、委ク相見<sup>江</sup>申候事

一同人往来手形所持致候、扣如此

### 往来寺院證文之事

一拙寺旦中庄司屋三郎兵衛妻当年五拾疋才みよ義、此度信州善光寺参詣志シ罷出候ニ付、御関所并在々所々無御相違御通可被下候、若又明晩ノ宿取兼候ハ、其御所御役人御差図ヲ以旅宿被 仰付被下置度候、仍而一札如此ニ

御座候、以上

奥州仙台宮城郡

寛政十年五月日

浄土宗

圓徳寺<sup>155</sup>

国々御関所御次共

御役人衆中

右之通認所持致し申候、尤病死致候へハ其所御作法ヲ以御取置被下、其節此馬へ付届ニ及不申由無之候得共、歳来相立候義故、北薬菜へ埋申候

文政十年亥七月十六日

覚

<sup>152</sup> 法光寺…滑川村、天台宗寺院。

<sup>153</sup> 合一（ごういつ）…一つに合わせること。

<sup>154</sup> 山寺（やまでら）…天台宗立石寺（りっしやくじ）、現・山形市山寺。

<sup>155</sup> 圓徳寺…現・仙台市宮城野区榴岡。

一人足六人

滑川村

一馬六疋

是ハ今夕宿しよミ詰

右<sup>者</sup>新発田様御先荷物通申来候ニ付、前件之通人馬割合申遣候間、才判与頭耆人差添無間違可被遣候、出人馬ニ付抜割ニ而申遣候、追而差引相立候条左様相心得可被遣候、此配符見届候ハ、村下へ庄屋衆印形いたし刻付ヲ以早々順達シ留村より可被相返候、以上

亥七月十八日

和田紋十郎

桑名捨藏

右村々庄屋中

此配符十八日夜子上刻、仁井田村方受取留り

控

一当七月十八日水戸浪人之由耆人参り、合力相願候由之所、下人善左衛門計り罷り有候故、御役所様御用立留守之由申聞申遣候ニ付、立帰申候事

送り状之事

柴橋御陣屋<sup>156</sup>

池田仙九郎様<sup>157</sup>御支配所

羽州山野辺村<sup>158</sup>

一

百姓六右衛門忤 次助

当亥廿三才

右之者七ヶ年以前国許罷出、馬方渡世仕所々罷有、当五月中当宿金平方<sup>江</sup>罷越馬方渡世致居候所、同六月中旬方病氣付候ニ付、医師相掛薬用介抱致候ニ付、追日快方ニ相成候得共、路用貯等も無之、歩行不自由ニ候間、宿村継ヲ以第二而国許<sup>江</sup>御送り被下度段、別紙之通願出候間、早速宿役人病体見届候所、快方之趣ニ有之候間、領主役所<sup>江</sup>窺之上宿村継ニ而相送り申候、尤彼もの致齟齬、右村之者ニ無之

<sup>156</sup> 柴橋御陣屋…幕府出羽国柴橋代官所、現・山形県寒河江市柴橋。

<sup>157</sup> 池田仙九郎…幕府役人、柴橋・大坂谷町・大和国五条代官などを歴任。

<sup>158</sup> 山野辺村…現・山形県東村山郡山辺町。

候ハ、其所<sup>江</sup>御留置 御公儀様御触面之通御取計可被成候  
様頼入申候、以上

奥州道中

喜連川宿問屋

亥七月十五日

上野太右衛門

年寄

高橋源左衛門

曾根田村<sup>159</sup> 方

山の部村まで

右村役人中様

差上申一札之事

柴橋御陣屋

池田仙九郎支配所

羽州山野辺村百姓

六右衛門 悴 次助

当亥廿三才

私義七年以前国許出立、所々馬士渡世仕、御当所金屋金平  
方<sup>江</sup>当五月中参り候所、同六月中旬方病氣付候二付、種々  
薬用等御介抱ニ罷成忝奉存候、然ル所此節二相成候而ハ  
追々快方ニ罷成候得共、持病之疝氣<sup>160</sup>ニ而歩行不自由仕候  
間、何卒国元<sup>江</sup>罷越度段、金平を以御願申上候処、御役人  
中様御見届之上<sup>与</sup>睨<sup>与</sup>役用いたし出立可仕旨被 仰候得共、  
一刻も早く国許<sup>江</sup>罷越度故、第二而宿村繼ニ被成下候様再  
応御願申上候処、願之通被 仰付難有仕合ニ奉存候、若途  
中ニ而如何様之変々御座候共、金平并御宿へ対し何ニ而も  
申分無御座候、依之差上申候、仍而如件

山野辺村百姓六右衛門 悴

文政十亥年七月十五日

次助

喜連川宿

御役人中様

此病人七月廿日下宿村方受取、笹川江遣ス

繼人足

伴作

<sup>159</sup> 曾根田村…下野国塩谷郡、現・栃木県さくら市。

<sup>160</sup> 疝氣（せんき）…腹の痛む病氣で、おもに下腹痛。

藤吉

此藤吉二子四月十一日引札渡ス

柴橋御陣屋

池田仙九郎様御支配所

羽州山野辺村百姓

六右衛門忒

当亥廿三才 次助

右之者病氣ニ而歩行不相成候ニ付、喜連川宿役人添書ヲ以宿村継送り来候ニ付立合、病体相糺候所申口相違無之候間、宿村々添書共ニ受取申候、万一先宿村々故障之義在之相戻候ハ、貴殿へ相戻し可申候、為念如此ニ候、以上

亥七月廿日

桑名紋右衛門

遠藤雄藏殿

右同断

右之者別番添書ヲ以宿村継来候ニ付立合、病体相尋候

所、申口相違無之候間、継立遣し申候、如例御取計可被成候、以上

桑名紋右衛門

笹川名主

河原吉兵衛殿

問屋

大野七左衛門殿

同

佐々木與惣兵衛殿

扣

一一昨日与頭治右衛門長沼表<sup>江</sup>人足才判として罷越候所、矢部源五右衛門様同人<sup>江</sup>被 仰聞候ハ、御頭義此度時候ニ相当り御腹病御やミ被遊、尚又御同人様御同様病氣ニ付、其村ニあゆ取候ハ、遣し被下度、尤代料何程ニ而も可然存候間、是非何程ニ而も宜敷御座候趣被御申聞候由、次右衛門一昨夜近夕相帰り申聞候ニ付、小走を以甚

蔵方<sup>江</sup>相達シ、直二川<sup>江</sup>差遣し、漸ク中あゆ五疋取候ニ付、今廿日人足竹吉ヲ以差上申候事、尤源五右衛門様<sup>江</sup>式疋、御頭様<sup>江</sup>三疋差上申候、但し進上ニ致候、庄屋方手紙相添遣し申候  
一同廿日津輕出羽守様<sup>161</sup>御下りニ而、当地御通行、矢吹宿泊り、郡山御昼、本宮泊り之由、当地御通首尾克相濟、当年ハ別段賑々敷御座候事

### 覚

才判与頭 六左衛門行  
一人足拾六人

滑川村

是ハ明廿二日御陣屋御門前詰、持道具昏荷繩  
めいたす

右<sup>者</sup>御陣屋表御門板塀御普請ニ付、前件之通人足割合申遣候間、才判組頭耆人宛差添無間違可被遣候、此配符見届候ハ、村下へ庄屋中被成印形刻付ヲ以順達留村より早々可被相返候、以上

亥七月廿一日

両割元

午下刻

右村々庄屋中

此配符廿一日夜亥上刻、仁井田村下ケ札ニ御座候処、丑下刻ニ受取留り

### 扣

一当年御上雪隠并堀大破ニ相成候ニ付、尤人別前ニ候間、普請ニ取懸り申候

亥七月廿二日始り普請之次第、

同廿四日木出し人足万吉・新蔵召遣申候

一上臺手前山ニ而中木三本 但し四寸角ニ成ル

其外長柄木伐申候

根取牛蔵耆日召仕申候、尤扶持共ニ渡ス

一栗木筏式間耆尺 牛蔵方買求

<sup>161</sup> 津輕出羽守様：津輕信順（のぶゆき）、陸奥国弘前藩第一〇代。



此代百文遣ス

右くりの木<sup>162</sup>義ハ、廿二日けつり<sup>163</sup>残り候故、

廿三日朝無事ニけづらせ申候

ベ四寸角五本、此けつり代壹本ニ付四拾文ツ、

但しふち共ニ三百五十文手前ニ而引替相渡申候、

七月廿七日

畠田村

深渡戸村

長沼留り

右村々庄屋

此配苻廿五日夜九ツ時、山寺村ヲ受取、仁井田村<sup>江</sup>

遣ス

御同人様同廿八日昼、山寺ヲ御越被成、首尾克相済、仁井

田村<sup>江</sup>御越被遊候事

送り状之事

一肥後国宇土郡宇土町<sup>164</sup>法教寺<sup>165</sup>三男法名崇山ト申僧、祖

師聖人御旧所廿四輩<sup>166</sup>順拜罷出候所、此僧当月六日当丁

助右衛門<sup>与</sup>申者、同宗ニ御座候故、相尋一宿致居候所、

以書付申遣候、然<sup>者</sup>我等駄付為改、明後廿七日罷越候条、

例年之通相心得、毛付相認置差支無之様取扱、尤孕駄等他

出無之様可申付置候、以上

亥七月廿五日

善方吉右衛門

昼

廿七日泊

志茂村

大窪村

大桑原村

山寺村

昼

廿八日泊

滑川村

仁井田村

袋田村

矢沢村

<sup>162</sup> くりの木…栗の木。

<sup>163</sup> けつり…削り。

<sup>164</sup> 肥後国宇土（うと）郡宇土町…現・熊本県宇土市。

<sup>165</sup> 法教寺…現・宇土市、浄土真宗本願寺派。

<sup>166</sup> 祖師聖人御旧所廿四輩…浄土真宗の開祖・親鸞の関東 時代における二四人の高弟を開基とする寺院。

病氣ニ付薬用致させ候所、余程快相成候得共歩行難相成、安駄ニ而帰国致度由病者願ニ付、当所重役<sup>江</sup>相伺候所、叮嚀取扱相送候様被申付、本国<sup>江</sup>相送遣申候、向々順路御継送り被成候様致度候、以上

盛岡岩手郡

文政十年亥七月九日

雫石町検断

九郎兵衛

肥後国宇土郡宇土町法教寺迄

順路筋所々御役人衆中

外<sup>ニ</sup>往来證文之事

肥後国宇土町法教寺三男法名崇山<sup>与</sup>申者、今度祖師聖人御旧諸<sup>167</sup>二十四輩順拝ニ罷出申候、宗旨之義ハ浄土真宗拙寺旦那ニ紛無御座候

国々所々御関所無相違御通可被下候、若行暮候節ハ止宿之義無差支様為被仰付被下候、万一病氣且病死等仕候節ハ、其所御作法之通御取計可被下候奉頼入候、其節<sup>江</sup>国元<sup>江</sup>御届ニ及不申候、仍而往来證文仍而如件

肥後国宇土郡宇土丁

文政九戌年二月

法教寺

国々御関所

所々在々御役人衆中

此病人亥七月廿八日笹川<sup>江</sup>方受取、下宿<sup>江</sup>遣ス

繼人足

勝蔵

忠三郎

子十月廿一日兩人分、忠三郎へ渡ス

扣

右病人相歎願出候ハ、病足之義も全快ニ相成候間、何卒御村ニ而御慈悲ヲ以人足送り被成下度由、達而相願申候得共、此節御役人様御出之節ニ付、相断其俟下宿へ継送り遣可申候

<sup>167</sup> 旧諸…原文ママ、旧所。

扣

一去秋中下宿村地内白石坂辺ニ於て、旅人を致殺害逃去候者有之候ニ付、右ニ付御役向方之御檢使御出、逸々御糺之所一向手掛相知不申打捨ニ相成居候由、然ル所右之者当春中之頃ニも御座候哉、矢吹宿ニおへて刀を質ニ置度由、質屋方<sup>江</sup>致持参為見申候処、右之刀<sup>江</sup>のり付御座候ニ付相尋候ハ、是ハ如何致候訳ニ在之候哉相尋候処、猶又其場<sup>江</sup>使ニ立寄候者有之、逸々相尋候所申開無之、其内右手掛ニ付、且又所々ニ而盜賊之手掛り彼是由ケ敷者之由ニ而、矢吹宿ニ而召捕致吟味候所、去年中下宿村ニおへて召捕候者ニ相違無之不屈之由申之、其筋ニ而御召捕ニ相成、蒲原表<sup>江</sup>御渡ニ相成、当月中旬迄入獄申付置候所、牢を破り逃去候所天運つき候困果ニ御座候哉、又々被召捕右重罪之科ニ<sup>168</sup>此度濱尾村ニ而おへて、当月廿五日しのゝめ打首ニ相成候由、右ニ付下宿村<sup>江</sup>御支配付役所方御手代・御目付兩人并うろこ目付<sup>169</sup>以上上下廿四、五人御出之由、誠ニ騒々敷次第ニ在之候、右首当村入会地境定杭、往還道東耳切坂下あれ畑<sup>江</sup>廿五日<sup>170</sup>付

七日迄獄門ニ致しさらし置申候、且其畑入会地之義ニ御座候間、右村役人中へ引合可申哉<sup>与</sup>も存候へ共、当村内ニ而ハ草場入会之義、土地<sup>江</sup>相かゝわり候次第も不相見、猶又深キ思慮有之候ニ付、其尽ニ致し打捨罷有申候、右引合候而返而故障之種ニ相成申事ニ御座候ニ付、左致罷有候事

一先ニ殺され候者ハ岩城辺無宿倉藏<sup>与</sup>申者之由、此度獄門ニ相成候者ハ倉吉<sup>与</sup>申者之由、誠ニ因縁之事ニ候、尤此度之獄門人ハ岩城在檜葉郡折木村<sup>170</sup>出生無宿者之由

以書付申遣候、然<sup>者</sup>閏六月分鶏卵納之儀、明後朔日迄ニ無間違可被納候、此書付見届候ハ、村下へ庄屋衆被成印形刻付ヲ以早々順達留村より可被相返候、以上

亥七月廿九日  
両割元

<sup>168</sup> 濱尾村：現・須賀川市浜尾。

<sup>169</sup> うろこ目付：江戸幕府の同心目付。

<sup>170</sup> 檜葉郡折木（おりき）村：現・福島県双葉郡広野町。

未上刻ニ遣ス

巳ノ上刻同村<sup>江</sup>遣ス刻付ニ候

此配苐午下刻仁井田村方受取留ル

扣

八月四日御増言<sup>171</sup>ニ付、三日父駒御改御陣中ニおへて在之候ニ付、父駒主惣七罷出申候、同日帰村、四日ニ庄屋紋右衛門・与頭次右衛門罷出申候、尤増言駒主勘六老正ニ御座候、五日夕帰村致申候事

扣

下宿村ニおへて獄門之砌立札致置候写

檜葉郡折木村

無宿 倉吉

右之者去戌八月中安積郡郡山宿ニおゐて旅人之刀を盜取、其刀ヲ以岩瀬郡下宿村地内ニおゐて地内以上無宿倉

藏<sup>与</sup>申者ヲ殺し、猶追剥等心掛甚以不屈之至ニ候、依之早速召捕入牢申付置候所、吟味中牢を破候科ヲ以斯獄門ニ行者也

亥七月廿五日

右之通相認立置申候、扣如件

扣

一当八月八日本郷村道作り致申候、九日まで相掛り申候一御増言四日庄屋・与頭罷出候所、米見神文之御触、郷宿共<sup>江</sup>相廻り、十五日被 仰付六左衛門罷出申候事、尤御米取立之義ハ八月廿日方御差出被成候思召之处、朔日迄日延申上候得共相叶不申、廿八日まで相叶申候由、六左衛門物語ニ御座候事

<sup>171</sup> 増言：糶（せり）のこと。『長沼町史』第一巻通史編、五四四～五四五ページ参照。

急度申触候

然<sup>者</sup>当亥人別改、当月十二日始両口方相廻候間、諸事差支無之様相心掛可申候

一三月朔日方已来出生・病死等有之候ハ、廻村之節横帳

二相認、前宿<sup>江</sup>可申出候、猶又病氣ニ而人相改之節罷出

兼候者ハ、横紙へ相認一同可差出候

一困窮之上実々奉公<sup>172</sup>他<sup>江</sup>罷出候者引戻候而ハ御百姓

二相成候節、難渋ニも相成可申候間、前広可願出候

一不図罷出候者、出奔同様之者ハ直ニ親類之内迎差出、急

度引戻置可申候

一右同様罷出、江戸御屋敷等ニ御奉公致し罷有候者ハ、此

状着次第役所<sup>江</sup>可申出候

右人別改之義<sup>者</sup>不図罷出不埒成者引返候、相改可申ための

義ニ付、此段克々相心得、村役人取扱可申候、此書付見届

候ハ、村下へ庄屋致印形早々順達留村方役所へ可相返

候、以上

亥八月八日 御郡方

右廻状志茂村口方袋田村行

尚以申遣候、為右改役所方兩人并判取老人召連候間、右様相心得可申候、尤人別請帳急度間ニ合候様可致候、以上

以書付申遣候、然<sup>者</sup>当亥人別改ニ付、判取為御雇隆平方へ被仰付候間、十一日夕此表<sup>173</sup>迄可罷出候、若差合等ニ而も在之罷出兼候ハ、乍太儀紋右衛門可罷出候、此書付其節可相返候、以上

此触書両通八月八日夕亥中刻、山寺村方受取、直ニ仁井田へ遣ス、使忠五郎・儀藏行

扣

右ニ付隆平十一日夕方迄ニ出府仕申候、然ル処両口方御廻村被成候ニ付、拙者共ハ十二日金町<sup>174</sup>始ニ而沖郷<sup>江</sup>罷出申

<sup>172</sup> 掛（かせぎ）…稼ぎ、仕事に励む。

<sup>173</sup> 此表…ここでは長沼陣屋を指す。

<sup>174</sup> 金町…長沼金町。

候、此方<sup>江</sup>ハ矢部八之平様・矢部郡平様へ付添罷出申候、  
山郷<sup>江</sup>ハ矢部源五右衛門様・矢部在平様、判取上江花村庄  
屋良平罷出申候、是ハ内丁始ニ而罷出候、拙者共ハ御上ニ  
而思召在之、志茂村拔、大久保村泊ニ罷越、夫方滑川村  
泊、夫方仁井田泊、夫方袋田村泊ニ而、十六日又志茂村<sup>江</sup>  
相戻り、同村相改申候得ハ、日ハ西山之影ニ相成候所、御  
願申上帰村仕申候、尤山郷之方ハ十二日内丁始下口江花村  
泊、夫方瀧新田泊、夫方畑田村泊之由、夫方矢沢村御改被  
成御帰りニ趣候所、大雨ニ而如何様ニも相成不申、深渡戸  
村<sup>江</sup>御泊被成、十六日帰村被遊候事、尤郷村中大雨小雨ニ  
而大キニ難義仕申候、扣如此

扣

以書付申触候、然<sup>者</sup>御米取立来月朔日迄日延申出候ニ付申  
立候所、朔日迄ハ相濟不申、来ル廿八日方御足輕差出候  
間、右様相心得無差支米拵等致置相納可申候、此段小前<sup>江</sup>  
も申渡上納方延引無之様取扱可申候、此書付見届候ハ、村

下へ庄屋致印形早々順達留村より可相返候、以上

亥八月十六日 御代官方

右村々庄屋

此配符十八日夜亥上刻仁井田より受取、直ニ山寺村<sup>江</sup>  
遣し申候

以書付申遣候、然<sup>者</sup>村々宗門印形取極候条、先例之通前広  
ニ寺院<sup>江</sup>掛合、村役人共同道ニ而、来ル廿五日朝五ツ時迄  
ニ長沼割元宅<sup>江</sup>可罷出候、此書付見届候ハ、村下へ庄屋致  
印形早々順達留村より可相返候、以上

八月廿八日 御郡方役所

志茂村<sup>江</sup>袋田村まで

此配符廿一日夜丑下刻山寺村より受取、廿二日早天仁井  
田村へ遣ス

尚々庄屋共之義不参無之様相心得可申候、以上

扣

右宗判二付、法光寺病氣二付、弟子坊参り申候、御代田村  
高安寺参り申候、隆平・与頭六左衛門兩人参り申候、宗判  
之義入相<sup>175</sup>迄相掛り逢首<sup>176</sup>罷成申候二付、不残泊り廿六日  
帰村致申候、尤内丁ノ和田紋十郎宅ニ御座候、判取隆平・  
江花村良平・大桑原村惣兵衛・成田村宇右衛門・丁守屋村  
藤右衛門・勢至堂助右衛門・畑田村源四郎、<sup>177</sup>七人ニ御座  
候事

一此節矢部八之平様・同源五右衛門様被 仰渡候ハ、此節  
御頭様御病養今以御本腹不被遊、依之大検見之義、来月  
五日方ニも可相成、若其節迄ニ御本快無之ニ付而十日方  
ニも可相成哉、左候得<sup>者</sup>其節ニ至り候而ハ沖・山<sup>177</sup>共ニ  
田方大半稻苧相済可申候間、村役人共此段相心得小前之  
者共<sup>江</sup>申渡、御検見通道添左右田並杓枚切ニ検穂九尺立  
置、右之場苧残置候様間違無之様申渡へく様被 仰付候  
ニ付、右之段与頭六左衛門ヲ以大橋方西手口田共九尺四  
方ニ踏分、田主共<sup>江</sup>小走ヲ以申付置候事

以書付申遣候、然<sup>者</sup> 仙台殿ニおめて信恭院様御逝去ニ付、  
近々御国表<sup>江</sup>御通棺有之旨申来候、依之文化二丑年御通棺  
之節、通御手当在之候間、其節之振合相札可申出、尤道橋  
等之義も是又丑年通聞合可申出候、為見分御足輕差遣候  
間、左様相心得可申候、且御通棺日限等<sup>者</sup>不申参候間、須  
か川・笹川兩所聞合、何時頃ニ在之候哉、此所も可申出  
候、此書付其節可相返候、以上

亥八月廿八日 御郡方

扣

右之書状御持参被成、御足輕安藤勇次様廿八日昼暮時御  
出被成、御口上ニも此度仙台殿御遺棺近々相廻り申候趣  
江戸表る申来候所、何時頃ニ候哉、右等之处不申参<sup>与</sup>

<sup>175</sup> 入相（いりあい）…太陽の沈むころ、日没。

<sup>176</sup> 逢首…原文ママ、「蓬首（ほうしゅ）」、蓬（よもぎ）のように  
髪の毛の乱れた頭。

<sup>177</sup> 沖・山…沖郷と山郷。

致候義相分不申、依而<sup>者</sup>道橋等損候場も在之哉、若左程損候義ニも候へ<sup>者</sup>先規之通御普請被成下候間、右場所為見分<sup>与</sup>罷越趣被 仰聞候間、右海道普請之場所も今ニ而<sup>者</sup>相分り不申候得共、雨中ニも有之候得<sup>者</sup>踏伐申候場も可有之候間、何分御見分之上御申上被下度旨申上、廿九日朝道橋御見分相済、直ニ御帰宅被成候、依笹川<sup>江</sup>与頭六左衛門ヲ以聞合ニ差遣申候

以書付申触候、然<sup>者</sup>当亥田方中下為步菰、矢部八之平儀明晦日<sup>与</sup>長沼内丁始左之村順之通廻村致候間、村々庄屋与頭案内致可申候、尤步菰人足四人、步菰道具心掛、都而例之通相心得差支無之様取計可申候

一賄之義兼々申触置候へ共、尚又相心得所有合之品ニ而相賄、入用不相掛様可取計候

右之趣村々見届候ハ、村下へ庄屋致印形、早々順達留村<sup>与</sup>可相返候、以上

亥八月廿九日 御郡方役所

此配符晦日夜子上刻仁井田村<sup>与</sup>受取、直ニ山寺へ遣し申候、人足今次岩五郎

日付覚

長沼内丁 江花出作 下江花村 勢至堂村

晦日昼 同日泊

上江花村 瀧村 同新田 成田村

九月朔日昼 同日泊

町守屋村 成田七ツ石 深渡戸村 畠田村

二日昼 同日泊

矢沢村 袋田村 仁井田村 仁井田関下

三日昼 同日泊 同日昼



滑川村 滑川十貫内 山寺村 大桑原村

同日泊 五日昼

大窪村 志も村 同出作 右村々庄屋

扣

一当晦日南部大膳大夫様<sup>178</sup>廿九日晚八丁目御泊、晦日晚須  
か川御泊ニ而当地御通行、夜ニ入灯燈ニ而御通被遊候  
所、川橋等首尾克御通相済申候

扣

一矢部八之平様、三日仁井田村より御移被遊、同日首尾克  
相済、山寺村<sup>江</sup>御越被成候、右宵日庄屋・与頭・郷目付、  
仁井田村御止宿迄御窺ニ罷出申候

九月朔日方三日四日迄天吉

扣

一仙台ニおゐて信恭院様<sup>179</sup>御卒去ニ付、此度御通棺在之趣  
ニ而、先日御役所様方御足輕安藤勇次様道橋御見分<sup>与</sup>  
て御遭被成御見分相済、同日御帰宅被成候、然ル処当地  
往還大橋南足本<sup>180</sup>損候ニ付、当月朔日方普請ニ取掛り、  
同日村沖端郷迄不残人足罷出、小走山ニ而材木為伐、同  
日橋本迄出し申候并橋かまち川<sup>江</sup>仮橋ヲ拵、番所東方道  
ヲ作り、河原<sup>江</sup>掛、往来通用為致候、尤右橋へハ式尺廻  
り位之松木ヲ并、其上<sup>江</sup>竹葉柄ヲ并、じやりを盛、仮橋  
出来申候、翌二日大橋南足本方三梁目迄はき取、けた梁  
之くされ候ヲ不残取替申候

<sup>178</sup> 南部大膳大夫様：原文ママ、盛岡藩第一二代・南部信濃守利  
済（としたが）。

<sup>179</sup> 信恭院：仙台藩一〇代藩主伊達斉宗の正室、文政一〇年八月  
八日逝去。

<sup>180</sup> 原文ママ、「足元」か。

右橋拵人足四日相掛ル人足積

一 三日矢部八之平様中下歩苅為御用御移被遊候所、道橋

再御見分のため十貫内御境面迄御出被遊、御見分相済

直二山寺村<sup>江</sup>御越被遊候、其節被仰候ハ、以前丑年<sup>181</sup>

通人馬割何程<sup>与</sup>見積前広可申出候様被 仰付候、猶又

取扱方万事丑年通相心得可申候様被 仰付申候

一当年御米取立計り、家・屋根損候ニ付、村方<sup>与</sup>葺式わ、

縄式拾尋宛取立、葺手居村岩右衛門・手付式人<sup>与</sup>三人、

三日朝<sup>与</sup>四日迄相掛り申候、尤其節手伝人足ハ村方<sup>与</sup>差

出申候、猶前日屋根はき人足五人差出はかせ申候、葺手

共扶持手前ニ而致候、尤葺不足ニ付、丑三郎方<sup>与</sup>小麦原

壺太式束相求申候、尤壺太ニ付百五十人遣し申候筈

<sup>与</sup>式百文ニ相成可申候 小たば壺わ、十わツ、を壺

わニ致し、代廿五文ツ、

五日雨降、夜大雨

小川筋大水

大橋普請之義漸ク四日迄ニ大半相仕舞、しやり<sup>182</sup>

盛計リニ相成候ニ付、仮橋ヲ為取申候、依而五日  
昼前ニ橋<sup>江</sup>砂盛相済、右大雨ニ付仮橋材木人足差  
出、五日夜つなかせ申候、

以書付申遣候、然<sup>者</sup>七月分納鶏卵之儀、来ル八日迄ニ無間  
違可被納候、此書付見届候ハ、村下へ庄屋中被成致印  
形、刻付同様ニ而早々順達留村より可被相返候

亥九月五日 両割元

此配符六日夜四ッ半時、仁井田村<sup>与</sup>受取、山寺村  
へ遣ス

乍恐以書付奉願上候事

一台上往還間数式拾間

此砂付馬三拾疋

<sup>181</sup> 丑年…文化一四年（一八一七）。

<sup>182</sup> しやり…砂利のことか。

但壹疋ニ付六太<sup>183</sup>付之積

一村下ノ端方崩橋迄之内、式拾間程

此砂付馬式拾五疋

但壹疋ニ付八太付之積

一大下間数拾五間

此砂付馬式拾疋

但壹疋ニ付七駄付之積り

一沢めき間数式拾間

此砂付馬六拾疋

但壹疋ニ付四太付之積り

一同所川向拾五間程

此砂付馬式拾五疋

但壹疋ニ付四太付之積り

ノ百六拾疋

右<sup>者</sup>此度於 仙台様 信恭院様御卒去被為遊御遺骸御通行  
ニ付、当村地内往還道繕被 仰付奉畏候、然ル所村方人足  
之儀<sup>者</sup>、大橋損候ニ付掛替普請<sup>ニ</sup>取掛り、御通行日限近々  
之様風聴御座候、尚又当地往還筋へな地ニ而少々之雨中

二而も道切レ通行不宜候、依之奉願上候<sup>者</sup>、前件奉書上候  
地<sup>者</sup>克々常敷道切レニ罷成候場ニ御座候、依之奉願上候、  
何卒 御仁恵ヲ以前奉書上候場御普請被成下置候ハ、難有  
仕合ニ奉存候、以上

滑川村与頭

文政十年亥九月

六左衛門

同

次衛門

庄屋

御郡御役所様

紋右衛門

右之通相認九月七日、隆平御役所様<sup>江</sup>差上申候

同日風吹寒し

扣

右願書隆平持参致候、御下矢部様<sup>江</sup>差上申候、序ニ去夏  
中当村新堰大破ニ相成候節、関下田川欠ニ相成候分、猶

183 六太：原文ママ、六駄。

又生田<sup>184</sup>取替申候分、去秋方此度村方ニ而年貢未進<sup>ニ</sup>相成居申候間、当年御願申上、川欠之地所ハ永引ニ御願申上、生田之分ハ御引願上候所、矢沢八之平様被仰候<sup>者</sup>、右取替帳持参致候哉ニ被仰聞候ニ付、下書差上申候所、其節川欠ニ相成体無之分ハ永引ニ致可申候得共、生田之分ハ成丈是方植仕付可申候様被仰聞候、左候共当年<sup>者</sup>無據候間相延置候様、猶又相談之上可申遣由被仰聞、此下帳貸置候様被仰聞候間、差上罷歸り申候、并東口水抜ニ堀割候、甚蔵田方は又御引願上申候所、見分之上ニ無之候而ハ相成不申候間、右同様相延置候様被仰付候事

八日・九日・十日 天吉

一当九日鎮守御靈宮<sup>185</sup>祭礼ニ付、若者共相願、神樂踊達ス願出候<sup>ニ</sup>付、任其意子共ニ為踊申候、賑々敷祭礼ニ御座候

一十日御代方御用ニ付、与頭次右衛門持参罷出申候、尤金

九両也、御米入用式両也

一仙台様御遺骸<sup>186</sup>宿割先触相通申候哉、十日早朝与頭六左衛門須か川問屋・検断方へ差遣申候所、宿割御役人中昨晚当宿泊ニ而罷り通申候由ニ而、別紙写之通差遣候ニ付、次右衛門上納序持参致候、入御覽申候事

与頭六左衛門須か川方持参致候通達左之通是八道中積日数十四日也

覚

一九月七日夜御出棺

同月十五日須賀川御泊

同月十六日本宮御泊

右<sup>者</sup>仙台 信恭院様御遺骸御通棺ニ付御通達申候、以上

須か川宿検断当時間屋取計

<sup>184</sup> 生田（いくた）…田植が可能な田地のこと。

<sup>185</sup> 鎮守御靈宮…滑川村「御靈大明神」のことで、明治二年（一八六九）に滑川神社となって現在にいたる。

<sup>186</sup> 前掲、信恭院。

亥九月十日

安藤茂九兵衛

滑川村

御役人衆中

尚、為御供方

紀州様<sup>187</sup>より御付添衆御越可被成候

右之通達与頭次右衛門ヲ以、御役所様へ入御覽申候

覚

一配符継

志茂村

一馬拾疋

深渡戸村

是ハ明十一日明六ツ時、滑川村村下詰

但耆疋二付八駄附

一馬拾五疋

畑田村

是ハ右同断

一馬貳拾五疋

矢沢村

是ハ明後十二日明六ツ時、滑川村川向詰

但耆疋二付四駄附

一馬拾疋

袋田村

是ハ明後十二日明六ツ時、滑川村沢めき詰

但耆疋二付四駄付

一馬四拾疋

仁井田村

是ハ右同断

一馬拾五疋

滑川村

わけ

拾疋ハ 是ハ明十一日六ツ時、臺之上詰

五疋ハ 是ハ大下詰

〆

右<sup>者</sup>此度仙台 信恭院様御遺骸御通行ニ付、滑川村海道御

普請ニ付、前件之通割合申遣候間、耆村方才判与頭耆人

ツ、差添無間違可被遣候、此配符見届候ハ、村下へ庄屋

衆被成印形、刻付ヲ以早々順達留村より可被相返候、以上

亥九月十日

両割元

此配符十日夜八ツ時、仁井田村方受取留り

<sup>187</sup> 紀州様…紀州徳川家、信恭院は同家第一〇藩主・徳川治宝（は

るとみ）の娘。

外二

割扣覚

一馬貳拾疋

大窪村

一馬拾疋

滑川村

〆三拾疋

是ハ明十一日臺之上詰

但し六太<sup>188</sup>付

一馬拾疋

深渡戸村

一馬拾五疋

畑田村

〆廿五疋

是ハ明十一日村下詰、但八太付

一馬拾五疋

大桑原村

一馬五疋

滑川村

〆廿疋

是ハ明十一日村下詰、但七太付

一馬拾疋

山寺村

一馬拾疋

袋田村

一馬四拾疋

仁井田村

〆六拾疋

是ハ明十二日<sup>189</sup>沢めき詰、但七疋二付四太付

一馬貳拾五疋

矢沢村

是ハ明後十二日川向詰、但四太付

〆

右<sup>者</sup>此度仙台 信恭院様御通行二付、滑川村海道御普請二

付、前件之通兩日分割扣如此二候、以上

亥九月十日

右之通致先触同様、滑川村庄屋当<sup>190</sup>二致候、一同仁井

田村方受取申候

右道普請九月十一日、同十二日兩日二相仕済、御立合中山

七郎様十二日御帰陣二候、此節御奉行様大久保御泊、御機

嫌御伺ニ隆平・六左衛門罷出候、紋右衛門義<sup>者</sup>右寄人足ニ

付罷出不申、此段申上候

<sup>188</sup> 六太…原文ママ、「六駄」。

<sup>189</sup> 明十二日…原文ママ、「明後十二日」。

<sup>190</sup> 原文ママ、「庄屋宛」。

覺

一 駕籠耆挺

一 馬三疋

但耆疋<sup>者</sup> 矢部源五衛門御馬成ル

耆疋<sup>者</sup> 矢部在平御馬成ル

一人足耆人

是ハ挾箱持ニ相成候間、髮月代を為致、脇差ヲ為

差、差出可申候

右<sup>者</sup> 当亥田方大檢見為御用、当月十二日御領志茂村口方

御巡村被成候間、庄屋組頭村境<sup>江</sup> 罷出御案内可致候

一 矢部源五衛門上毛歩苅為御用相廻候間、組頭耆人宛罷出

案内可致候、尤歩苅道具人足四人宛差出可申候

一 矢部在平跡乗為御用相廻候条、左様相心得可申候

一 御領御宿之儀<sup>者</sup> 庄屋宅ニ可仕候

一 矢部源五衛門・矢部在平宿之儀<sup>者</sup> 庄屋近所<sup>江</sup> 申付、同宿

ニ可仕候

一 御賄之義ハ前々之通相心得可申候

一 勢至堂・町守屋支配追訳、滑川端郷十貫内・岩渕<sup>江者</sup> 御

廻不被成候

一道橋不及掃除、通路不自由之場所計り為繕可申候

右<sup>者</sup> 大檢見御用之郷村第一重キ御用ニ在之候条、村役人足

申合諸事差支無之様取計可申候、此先触見届候ハ、村下へ

庄屋致印形早々順達留村方役所<sup>江</sup> 可相返候、以上

小瀬八右衛門支配

矢部在平

亥九月十日

同人支配

矢部源五衛門

御郡方肝煎

御用 矢部八之平

長沼金町

志茂出作

志茂村

吉原新田

九月十二日泊

同十三日昼

同日泊

大窪村

大桑原村

山寺村

滑川村

同十四日昼

十貫内

関下

仁井田村

袋田村

同十一日・十二日天吉

同夜吹掛雨降

同日泊

同十五日昼

矢沢村

畑田村

深渡戸村

七ツ石

十三日寒し

同日泊

同十六日昼

町守屋村

成田村

新田

瀧村

一当月鶏卵納八百五拾こ遣し申候  
一御奉行様十三日御泊御通行首尾克相済申候

同日泊

上江花村

勢至堂村

下江花村

同出作

十四日寒し

十五日天吉

長沼内町

右村々庄屋

此配符先触九月十一日昼未中刻、山寺村方受取、仁井田村へ遣ス、此御先触廻上紙之方方油付有之候、尤何れ之村方付来候哉、先村方如此二付、仁井田村へ申遣候

一下宿村両村境杭、先日打かへり候二付、村役人罷越見届之上、堀込呉二而築立置申候所、古く罷成候二付、小走山二而牛蔵方ニ為伐けつらせ置申候而、大検見御廻村之砌、矢部源五右衛門様右之段申上候所、建替候様被仰付候二付、人足二而郷蔵<sup>江</sup>為持、御同人様御書被遊候、依之十五日人足ヲ以為建申候



但し長サ老丈式尺二伐、八寸角

一奥羽両国稲荷大明神之由ニ而何れ之村方差出申候哉、十三日下宿村方村中ニ而継送り来り候二付、段々様子聞合候所、少サナ御神位<sup>与</sup>相見<sup>江</sup>宮之様成箱<sup>江</sup>入、油紙ニ包来り申候、尤右箱ハ白川郡八槻村<sup>191</sup>ニ而寄進之由書付有之候俟、金壹分老朱卜錢四貫貳百廿六文在之、其外居村方も少々奉納致候、右ニ准し村々方献し候事<sup>与</sup>相見、尚又たまこ・肴之類夥敷人足貳人持程有之、其外簗之類数十本、べにしぼり之類、さらさ之類、又御幣<sup>与</sup>して大キなる幣四五本有之、其幣ニ相模国方出スも有之候、風聞<sup>者</sup>ニ右稲荷宮京都<sup>江</sup>御老入り<sup>192</sup>ニ而御位取ニ相登り申候所、何れ方之仰ニ有哉、神主罷り登り不申<sup>者</sup>不相成候由ニ而、其後神主罷登候处、右神主何れニ而おゐて病死致候哉相果申候由ニ而、右之御神位計継来候由ニ御座候、依之笹川村へ継送り申候、誠ニ不思議<sup>193</sup>成事ニ御座候

覚

一 駕籠老挺 此人足三人

一 高張箱 二ツ 此人足壹人

一 同竿 三本 此人足壹人

一 馬式疋

右<sup>者</sup>桑名源内殿・矢部郡平、滑川村<sup>江</sup>明十五日罷越候間、件之人馬村々役置差出可申候、此先触早々順達滑川村迄可相送候、以上

亥九月十四日 御郡方

以書付申遣候、然<sup>者</sup>明十五日仙台殿通棺二付、桑名源内殿・矢部郡平出役致候間、郡平宿之義ハ別宅ニ可心掛候、以上

九月十四日 滑川村庄屋当<sup>194</sup>

<sup>191</sup> 白川郡八槻（やつき）村：棚倉藩領、村内には陸奥国一宮・都々古別（つつこわけ）神社がある。現・福島県東白川郡棚倉町。

<sup>192</sup> 老入り：原文ママ、「老人」。

<sup>193</sup> 不思議（ふしぎ）：原文ママ、「不思議」。

此配符先触十四日夜子上刻仁井田村方受取泊り<sup>195</sup>

一矢部郡平様御宿之義ハ牛蔵宅ニ仕候事

扣

十四日天吉寒し

十五日天吉

一御死棺御通行ニ付、崩橋方沢めき迄之内、小橋三ツ損候

ニ付、此度石工勝蔵ニ申付、新規名橋ニ致候事

一同日与頭次右衛門ヲ以笹川宿<sup>江</sup>申遣候ハ、仙台信恭院様

御遺骸弥々明十六日当地御通行ニ相成可申哉、猶又延引

ニ而も相成候哉聞合ニ遣候所、弥今晚須か川御泊ニ而明

日御通棺在之由申来候事

一右ニ付御役所様方吟味役桑名源内様・御付添鍵・若党・

挟箱・ぞふり<sup>196</sup>取以上五人、御郡方矢部郡平様・御足輕

中山七郎様・同収平様<sup>ハ</sup>上下八人、十五日明六ツ時長沼

御発駕、同九ツ時当村着被遊候、夫方源内様・郡平様小

休場、猶又出役場御見分<sup>与</sup>して茶屋<sup>江</sup>御出被成候事

一廿三年以前丑年勸心院様<sup>197</sup>御遺骸御通行通取扱可申、先

槨四太こわり為致、柴木四わヲ分、橋南足本<sup>江</sup>式太・柴

式わ積置、猶又沢めき橋南足本<sup>江</sup>式太・柴式わ積置共可

申候、是ハ夜中又ハ夜ニ入候時ハかゝり火を焼申候<sup>与</sup>申

訳ニ有之候

一今晚須か川本陣御泊ニ付、明御出立何時方ニ相成候哉、

御内々源内様方須か川検断當時問屋取計安藤茂久兵衛

方<sup>江</sup>聞合ニ、使熊五郎ニ而書状ヲ以御申越被遊候ニ付被

申遣候ハ、爰許御出立明六ツ時ニ相成可申哉、其御地御

通行ハ六ツ半五ツ時ニ相成可申由申聞、書状持参相返り

申候、夫方遠見竹吉・勝次郎兩人差遣申候所、二番島方

<sup>194</sup> 庄屋当…原文ママ、「庄屋宛」。

<sup>195</sup> 泊り…原文ママ、「留まり」。

<sup>196</sup> ぞふり…草履。

<sup>197</sup> 勸心院様…原文ママ、観心院、仙台藩七代伊達重村の正室、文化二年（一八〇五）九月十六日逝去。

御目さめ之遠見勝次郎立帰申候、手前二而も老番取二目  
さめ、小サクむすびを拵へ、御茶の子にて、しのゝめ之  
時<sup>198</sup>灯燈<sup>199</sup>ニ而小休場安右衛門隠宅迄御詰有之候、右隠  
居前軒雨落<sup>江</sup>杭ヲ打、八角御紋付高張式張左右<sup>江</sup>相建并  
矢部郡平様小休場油屋半八宅ニ致候、是ハ橋足本<sup>江</sup>出役  
致候ニ付、安兵衛普請致候ニ土ヲ取候場<sup>江</sup>輪違印之高張  
老張立置申候事、尤往還<sup>江</sup>三尺程去り候て立置申候

十六日天吉

一十六日御通行之次第、当地御通棺之節ハ桑名源内様安  
右衛門隠居前へ御出被成、御札相済座敷<sup>江</sup>御上り被遊  
候、良過候而跡乗飯<sup>与</sup>三郎右衛門申仁、陣笠馬ニ而  
御出被成候所、馬<sup>江</sup>御下り被遊源内様<sup>江</sup>御対面御札挨  
拶相済相通り申候

一矢部郡平様橋場為才判橋南足本<sup>江</sup>御出役被遊、庄屋紋右  
衛門袴羽織ニ而付添罷出申候

一先キ掛り役人相尋候節、滑川村庄屋たれ<sup>与</sup>書手札差上可

申、猶御尋無之時ハ差出不申共不苦候様被 仰付候事  
一沢めき橋南足本<sup>江</sup>郷目付代七病氣ニ付、御雇村年寄半四  
郎罷出申候、尤与頭六左衛門羽織・股引ニ而罷出候、尤  
手札<sup>江</sup>ハ滑川村郷目付半四郎<sup>与</sup>書申候

右手札之義ハ御尋無之差出不申候

一御先松中山七郎様・同収平様下宿境方笹川境迄、尤御馳  
走として与頭次右衛門御足輕衆<sup>江</sup>拾間程先<sup>江</sup>立ほふき持  
両人罷出候、是ハ与頭<sup>江</sup>拾間程先<sup>江</sup>左右<sup>江</sup>立申候

一此度御通棺紀州様<sup>江</sup>御付添重役方様御太勢御供有之候  
事

一御姫様御乗物之結構言語申尽かたく候、黒染有之駕籠へ  
葵の御紋之金紋、其外ちらし不殘金めつき<sup>200</sup>

一打物・御先箱・御茶瓶之類不殘しやふく<sup>江</sup>丸葵筋を黒く  
致し、中を白くし、誠ニ暉麗ニ御座候

一御先乗ハ丸ニ葵之金紋・陣笠ニ而かき色皮之陣羽おり、

<sup>198</sup> しののめ（東雲）之時：夜が明けて、明るくなる時間帯。

<sup>199</sup> 灯燈：原文ママ、「提灯」。

<sup>200</sup> 金めつき：金メッキ。

栗毛之駒<sup>ニ</sup>御座候事

一御死棺黒羽二重をかけ、六尺三拾人程<sup>ニ</sup>而かつき申候、

替り三拾人程都合六拾人程<sup>ニ</sup>御座候

一御通行之節、見物人未明方夥敷河原へ有之候事

右何れも御通行御首尾克御通相済

尤五ツ時ニ御座候、同日御役人様方御帰陣被成候事

十七日天吉

十八日天吉

十九日天吉

以書付申遣候、然<sup>者</sup>当亥御物成米津出之義取立済次第、白  
川御問屋<sup>江</sup>津出致候様先達而申触置候所、当年米相場奥  
釣<sup>201</sup>之様子相聞、奥向方追々御払米直乞願等<sup>茂</sup>有之候付、  
御払二相成候義<sup>与</sup>被存候、右二付是迄津出相済候分<sup>者</sup>無抛

候得共、明日方之津出差扣、郷藏<sup>江</sup>備置候様可致候、追而

津出申付候迄ハ差出申間敷候、尚又式番割よりも右様相心

得津出差扣可申候、此書付見届候ハ、村下へ庄屋致印形

早々順達留村方役所<sup>江</sup>可相返候、以上

亥九月十九日 御代官方

巳中刻出

此配符十九日夜丑下刻仁井田村方受取泊り<sup>202</sup>

廿日天氣よし

同夕大雨

扣

覚

一金匁分匁朱 四貫貳百廿六文

右之通下宿村方継取申候

<sup>201</sup> 奥釣：原文ママ、「奥筋」か。

<sup>202</sup> 泊り：原文ママ、「留まり」。

一七拾四文 当村初尾<sup>203</sup>

金壹分壹朱 四貫三百文

右之通笹川村へ遣し申候

右<sup>者</sup>先当月十三日下宿宿<sup>204</sup>方受取申候

奥羽両国稲荷宮・二本松領郡山宿迄、同十八日参り候所、

右宿役人何れ方送り出候

尚又何れ継送り可然哉当テも無御座候間、受継兼候由ニ而、同廿日笹川宿方継送り戻り候間、下宿村へ相戻し申候

郡山方之添書

覚

御宿方御継送り被成候得共、何れへ送り候間可然哉当テも無御座候、御宿<sup>江</sup>送り申候、以上

亥九月十八日

郡山宿役人

小原田<sup>205</sup>

御役人衆中

右之通ニ而相戻り申候、仍而小原田方添書

覚

御宿方御継送り被成候ニ付、郡山宿<sup>江</sup>継送り候所、何れへ送り候而可然哉宛無御座候旨ニ而継戻り申候間、御役共受取可被成候

郡山迄之内初尾右之通ニ相成申候

一金壹分壹朱 錢五貫四百三拾文 宿村

添書共継戻し申候、先々<sup>江</sup>御断可被成候、以上

亥九月十九日

小原田駅

日出山宿<sup>206</sup>

御役人衆中

右之通ニ而今廿日笹川方継戻り来候ニ付、受取左ニ認申候

<sup>203</sup> 初尾：原文ママ、「初穂」。

<sup>204</sup> 下宿宿：原文ママ、「下宿村」。

<sup>205</sup> 小原田（こはらだ）：安積郡小原田村、奥州街道の宿場、現・福島県郡山市小原田。

<sup>206</sup> 日出山（ひでのやま）宿：安積郡日出山村、奥州街道の宿場、現・福島県郡山市安積町日出山。

覚

一金壹分壹朱 錢五貫四百三十文

右<sup>者</sup>奥羽両国稻荷宮、当九月十三日高田領<sup>207</sup>下宿村<sup>方</sup>

継送り来候二付、貴村へ継送り遣し申候所、同十八日

郡山宿まで宿々御継送り被成候所、右宿ニおゐて何れ

へ送り候而可然哉、宛テも無御座候間、送り戻し候由

二而、今廿日貴村<sup>方</sup>継送り被遣候二付、先宿村へ継送

り戻し申候、若相返り候節ハ又々貴村へ相送り可申

候、為念如此二候、以上

滑川村庄屋

亥九月廿日

桑名紋右衛門

笹川駅

御役人衆中

右之通相認笹川宿<sup>江</sup>遣し申候

同廿一日寒し

同日右稻荷下宿村へ継送り戻し申候

留扣

同日笹川駅<sup>方</sup>人足使ニ而持参致候覚

滑川村

一金貳百疋

松平播磨守様御家来

本<sup>ノ</sup>役 桑名源内

一同百疋

同郡方役 矢部郡平

寄合

一同百疋

同御先払 足輕貳人

笹川駅

寄合

一金百疋

丹羽左京大夫様

御町足輕人馬支配

国分新左衛門

吉田庄左衛門

207 高田領…越後国高田藩領。

郡山駅

一金貳百疋

丹羽左京大夫様御家来

人馬支配頭

崎田伊大夫

四人寄合

一金貳百疋

同問屋場詰人馬

差配役

安西佐藤衛門

西山甚十郎

北畑文三郎

永戸傳兵衛

寄合

一金百疋

同御先払

金子甚三郎

畠山三左衛門

本宮駅

一金貳百疋

丹羽左京大夫様御家来

人馬支配頭

勝岡藤左衛門

一貳朱耄枚

同御町足輕小頭

問屋場詰

塩田小十郎

四人寄合

一金貳百疋

御先払足輕

堀越喜平次

高橋喜八

糠沢伸左衛門

立花仙八

右<sup>者</sup>着之晩、立之朝共二被立出候二付

右之通駅々御伝達預り度候、以上

九月十六日

飯淵三郎衛門（印筆写）

(印筆写)

鳴原大之丞殿

覚

一金三両貳分貳朱

内壹両貳朱ハ本宮<sup>江</sup>被下金受取

残而貳両貳分 郡山宿<sup>江</sup>継送り申候

右<sup>者</sup> 故松平陸奥守様御奥様御遺骸御通棺ニ付、宿々<sup>江</sup>

御出役様<sup>江</sup>別紙之通御目録被下候ニ付請取、残り継送

り申候間、御宿分引残候分、滑川宿へ継送り被下度奉

頼<sup>208</sup>上候、右得御意度如此ニ御座候、以上

九月十七日

本宮本陣

鳴原与惣左衛門

郡山御本陣

今泉久右衛門様

覚

一金貳両貳分也

内壹両貳分ハ郡山宿并笹川分引

残<sup>而</sup>壹両也

右<sup>者</sup> 仙台様御遺骸御下りニ付、宿々<sup>江</sup>被下候旨、本宮宿

方送り来候間、則当所笹川<sup>江</sup>被下候分、引残而壹両也、継

送り遣し申候、宜敷御取計可被下候、尤先方<sup>江</sup>御渡しニ相

成候、此面附ヲ御地御配方相濟候ハ、本宮宿御本陣鳴原

与惣左衛門殿<sup>江</sup>御廊宿便りを以御戻し被下度奉存候、右之

趣拙者方申進くれ候様与惣左衛門殿方申参候間申進候、其

段御承引御取計被下度奉存候、以上

亥九月廿日

郡山御本陣

今泉久右衛門

長沼御陣屋方御出張之御役人并御先払之御方<sup>江</sup>被下候旨ニ

而、本宮宿より送引来候<sup>ニ</sup>付、御送り被遣候由無相違相達、

208 頼…原文ママ、「願」か。



則其筋<sup>江</sup>相達申候、且御先方々之覚書本宮宿鳴原与惣左衛門殿<sup>江</sup>可致返却旨致承出候、右御答として如此二御座候、以上

九月

滑川村庄屋

桑名紋右衛門

郡山御本陣

今泉久右衛門様

此老封宿村御用向申遣候間、本宮宿迄御届可被下候、以上

九月廿四日

滑川村庄屋

桑名紋右衛門

笹川宿方

本宮宿迄

右宿々御問屋中様

廿三日 天吉

廿四日 天氣吉

廿五日

以手紙得御意候、然<sup>者</sup>仙台 信恭院様御遺骸御通棺二付、宿々<sup>江</sup>被下候御目録覚書、当村方御手前様迄御戻し候様、先宿方通達御座候二付、則御戻し申候間御落手可被下候、右之趣可得御意如此二御座候、恐惶謹言

九月廿四日

滑川村庄屋

桑名紋右衛門

鳴原與惣左衛門様

右之通御役所様方御下書被下候二付、封印致し差遣し申候、尤為目付斯之通り宿々御達し之誤合二致し遣候事はハ封目へ張付印形致し遣し申候

同日朝四ツ時、下宿村方罷越候由二而古峯原前鬼隼人社<sup>209</sup>  
<sup>209</sup> 古峯原（こぶがはら）前鬼隼人社：現栃木県鹿沼市、古峯（ふるみね）神社。

人兩人参り、尤庄屋留主之砌右様申聞候得ハ、兩人申聞候ハ如何之勸化ニ御座候哉相分り不申候得ハ、此度前鬼隼人名前をうり、右体之勸化相廻り申候由承り申候、右古峯原方ハ一切勸化之類差出不申候間、右体御心得之上御取計被下候様申聞候、尚又別紙差上置可申候間、左様御心得被下度、尚々印判等此義御見知置被下候様申聞、笹川宿へ参り申候、尤人足ハかし不申候事

口上

一当山之義列々と違へ諸国在町<sup>江</sup>諸勸化、其外配札等差出候義無御座候所、近来前鬼名目ニ而国々相廻り候由粗承候、已来何様之義申相廻り候も全ク偽り者ニ御座候、当山方手代末々之者迄も決而差出不申候、為念御断申上候、已上

古峯原

前鬼隼人判

(印筆写)

諸国在町

御役人衆中

廿六日 天氣吉

廿七日 天吉

以書付申触候、然<sup>者</sup>当亥御物成米御払之儀、米相場奥筋直段宜敷相聞候ニ付而<sup>者</sup>、右之方<sup>江</sup>御払米ニ相成候事ニ付、式番割取立米方津出差扣、郷藏<sup>江</sup>預り置可申候、追而役所方申達次第其節津出可致候、若壱番割米も麦蒔時ニ而津出延引ニ相成居候ハ、幸之事ニ付、是又津出相扣可申候、此書付見届候ハ、村下へ庄屋致印形早々順達留村方役所へ可相返候、以上

亥九月廿七日

御代官方

追啓、先日矢沢村・仁井田村・滑川村へ壱番わり津出差扣候様申遣候所、其以前二少ニも津出相済候哉、否取不申、調来月十日ニ可申出候、以上

此配符廿七日夜八ツ半時山寺村方受取、廿八日仁井田村へ遣ス

廿八日 天氣吉

以書付申遣候、然<sup>者</sup>神主相統願之通承り濟候間、右様相達為披露近々役所<sup>江</sup>可差出候、其節此書付可相返候、以上

亥九月廿八日 御郡方

此配符廿八日夜丑下刻、仁井田村方受取留り

廿九日 天吉

扣

右ニ付神主・与頭<sup>者</sup>人罷出申候处、御札廻り首尾克相濟、同夕罷り歸候、御役人様方へ御札之次第

以書付申触候、然<sup>者</sup>稻種撰立心得方書付相配候間、村々庄屋・組頭・長百姓得<sup>与</sup>相心得、小前御百姓<sup>江</sup>教行届候様可取計候、委細之儀<sup>者</sup>板行ニ有之候得共、壹ヶ年種丈ハ撰立行届申間敷候間、先ツ壹式升も撰立、種取ニいたし候得ハ翌年ハ存分種出来、年々撰種式升宛も取候得ハ存分行届候間、右之通ニ仕可申候、則右書付配符<sup>江</sup>相添遣し候間、村役人始小前頭立候者共<sup>江</sup>壹枚ツ、遣し可申候、此触書見届候ハ、順達留村方可相返候

亥九月廿六日 御郡方役所

追而申触候、然<sup>者</sup>左之通從 公儀御触御座候处、先例役所ニ而早速相分不申、寄進高員数相分り兼候間、村々先例相糺シ相分り次第早々役所<sup>江</sup>可申出候、以上

大目付<sup>江</sup>

摂州

多田院

大和 河内 和泉 摂津 近江

美濃 飛弾 信濃 甲斐 播磨

備中 伊予 筑後 豊後 豊前

肥後 加賀 越後 ○陸奥 ○羽羽

右本社仏閣等大破ニ付修覆為助成、右式ヶ国并京・大坂・

御府内万石以上、以下家中迄且町中共、当亥年方来ル寅年

迄中三ヶ年之間、勸化御免被成下、信仰之輩ハ物之多少ニ

よらず可致寄進候、御料<sub>者</sub>御代官、奉行有之所ハ其奉行支

配有之面々其支配、私領<sub>者</sub>向寄御代官・領主・地頭<sub>江</sub>勸物

取集向々方来ル寅之六月迄太田摂津守方<sub>江</sub>可差出者也

亥八月

右之通相触可申候、以上

此配符両通九月廿九日夜亥中刻、仁井田村方受取、

一日朝山寺村へ遣ス、使左吉

十月朔日 天気吉

扣

別紙写置候通稻穂撰立次第、御役所様方当村本郷<sub>江</sub>五枚、端郷<sub>江</sub>三枚被下置候ニ付、夫々村方<sub>江</sub>相配申候、依之手扣之ため尚又別紙ニ差置候而ハ以後分使之義も有之候間、此書ニ写置候者也

雌雄稻穂之辨

夫天地之間陰陽有故に鳥獸草木に至迄必ス雌雄有、扱雌の稻<sub>者</sub>早咲して取実多し、雄之稻<sub>者</sub>取実少し、是陰陽之道理也、農家之損益莫大なる事知る人ありといへ共、秘して世ニ伝へずと児嶋如水翁の書る文にも見へたり、即農家に教ひて種撰して試るに翁の教に違す、雌苗<sub>者</sub>豊にして粃皮薄く取実多く、上根少ク縦根多し、草生より刈上までに遅速なく能揃バなり、故に水旱大風にも痛薄し、雄苗ハ藁太くして粃皮厚ク取実も少し、上根多く縦根少し、依て水旱大風にも痛強く虫生ずる事あり、且雌の稻穂といふハ穂先二筋揃へてあり、穂先三、四分程種にすべし、両三年ハ雌穂勝なり、穂先にて種を取べし、三、四ヶ年にして撰種して

吉、雄の稲穂ハ先老筋之村長の人之能試て小前末々までに  
教ならハ、農家の一助ともならん事を跡かへて拙き筆にあ  
らましを記しぬ、尚諸種撰方を書いて傳へん事を思ふ而已

雌 早 同 雄 同

稻 中 根 稻 根

穂 晚 穂

文政九ひのえいぬ八月 東奥梁川

中木氏 施板<sup>210</sup>

覚

一人足千三百廿八人

内人足三百人

是ハ御通御当日并前後十日分

長沼・勢至堂・江花合而宿并人足引

残人足千弍拾八人

是ハ御通御当日并前後十日長沼・せいし  
堂両所<sup>江</sup>之駕籠・長持并歩持運送人足前件  
之通候

一馬九百人疋

内馬三百疋

是ハ御通御当日并前後十日分

長沼・勢至堂・江花合而宿並馬引

残馬六百八疋

是ハ御通御当日并前後十日、長沼・勢至堂両所<sup>江</sup>

之御荷物運送馬、前件之通候

役高弍万五千四百七拾六石<sup>江</sup>割

此割

才判与頭次右衛門行

一人足弍拾八人 滑川村

拾人 当月五日昼八ツ時 長沼詰

分 拾人 右同日同断 勢至堂詰

<sup>210</sup> 施板（せいた）…版本にして施した（公衆に示した）もの。

八人 当月三日夕

勢至堂詰

才判与頭六左衛門行

一馬拾六疋

同村

式疋

当月五日八ツ時

長沼詰

分

式疋

右同日同断

せいし堂詰

拾式疋

当月三日夕

勢至堂詰

右<sup>者</sup>此度

会津様当月六日当駄御昼休ニ而御通行被遊候ニ

付、長沼・勢至堂<sup>江</sup>

之寄人馬割合申進候間、詰所日限無間

違老村<sup>江</sup>才判与頭老<sup>江</sup>人宛御差添可被遣候

一前々方申触候通内々ニ而人馬賃算堅相成不申旨申進置候

得共、村々方少々賃算致候者も中<sup>者</sup>有之哉相聞候所、

畢竟才判之もの不行届義も有之候間、此段才判之もの<sup>江</sup>

克々被御申付可被遣候、尤是迄之通人馬着倒<sup>211</sup>、銘々相

改候様役所方申付候間、其節面付帳御認才判之もの方詰

所問屋方<sup>江</sup>差出候様致度御座候

一人馬着倒相改之間ニ合兼候村も中<sup>者</sup>有之趣、問屋方<sup>江</sup>

申出候間、詰期限延引無之様被御申付可被遣候

一為荷迎人馬共ニ罷出候儀相成不申候間、此段も前振<sup>212</sup>之  
通才判之ものへ被御申付可被遣候

一大人馬之儀出兼候而致不足候ハ、勢至堂方牧之内<sup>213</sup>迄  
通候様被御申付可被遣候

弥々通し候ハ、両宿<sup>江</sup>相達し、人馬共ニ遲滞無之様被御申

付可被遣、此書付御見届候ハ、村下へ庄屋衆被成印形、刻

付ヲ以早々順達留村方可被相返候、以上

亥十月朔日

和田紋十郎

桑名捨藏

瀧村<sup>江</sup>矢沢留り

同二日 寒し

覚

211 着倒：原文ママ、「着到」。

212 前振：原文ママ、「前触」。

213 牧之内：岩瀬郡牧之内村、現・福島県岩瀬郡天栄村牧之内。

一人足拾六人

滑川村

是ハ明二日昼八ツ時長沼詰

一馬拾疋

同村

是ハ右同断

右<sup>者</sup>水原御代官大貫治右衛門様御登二而明二日夕勢至堂宿御泊御通行被成候二付、前件之通人馬割合申進候間、老村方才判与頭老入ツ、御差添無間違可被遣候、尤急触二付抜割二申進候義二御座候、追而差引相立候条左様御心得可被遣候

一明二日夕勢至堂宿<sup>江</sup> 御朱印御証文御役人様一同御泊二相成候間、詰刻限無延引被御申付可被遣候、此配符御見届村下へ庄屋衆被成印形、刻付ヲ以順達留村方可被相返候、以上

亥十月一日

和田紋十郎

亥中刻出ス

桑名捨藏

此配符二日昼午上刻、仁井田村方受取留ル

同三日 天氣吉

同日笹川宿方湯殿山<sup>214</sup>表口、先達大日坊参り候二付、例年之通青駒拾疋差出申候

以書付申遣候、然<sup>者</sup>八月分鶏卵納之儀、来ル四日迄二村々無間違可被納候、此配符見届候ハ、村下へ庄屋衆被成印形早々順達留村方可被相返候、以上

亥十月朔日

両割元

此配符十月三日昼四ツ時、仁井田村方受取、山寺村へ遣ス

四日くもる 小雨

五日

<sup>214</sup> 湯殿山・大日坊：湯殿山神社のことか、現・福島県郡山市熱海町。

以書付申遣候、然<sup>者</sup>其村御米御払之義ニ付申合候御用有之候間、此書付参着次第早々可罷出候、其節此書付可相返候、以上

亥十月四日

御代官方

庄屋紋右衛門当<sup>215</sup>

此配符四日夕亥上刻、仁井田方受取

以書付申進候、然<sup>者</sup>

会津様御通行ニ付、明五日昼八ツ時詰人馬割合申進置候所、時分柄短日ニも在之、御出起も御差急御通行被遊候間、右之心得二人馬移置候様、尚又御迎有之旨申出候間、詰刻限方先日申進候通延引無之様被御申付可被遣候、御先荷物も差急勢至堂駅夜明不申内通候義ニ付、此段為念申進候条、詰刻無間違可被遣候、此書付見届候ハ、村下へ庄屋衆被成印形、刻付ヲ以早々順達留村方可被相返候、以上

亥十月四日

和田紋十郎

申上刻

桑名捨藏

此配符四日夜卯下刻越久方受取留り

六日 天氣吉

七日 天氣上吉

同日須か川修驗德善院<sup>216</sup>、越久村方参り申聞候ハ、白川甘露寺<sup>217</sup>本堂及大破申候ニ付、自身勸化仕多力ヲ以本堂普請仕度罷越申候、宜敷様御取計被下度旨ニ而両かけ<sup>218</sup>老ツ、詰人足老人、小僧老人、都合三人ニ而参り申候ニ付、当村難渋之旨申聞候間、百文引替差出可申由申聞候所、惣而相願申候ニ付無抛軒別為致申候、尤帳面へハ南鐐老片、滑川村中青銅拾疋、桑名紋右衛門<sup>与</sup>計記申候得共出し不申候

<sup>215</sup> 当：原文ママ、「宛」。

<sup>216</sup> 德善院：須賀川町本町にあつた寺院、明治初年に廢寺。

<sup>217</sup> 甘露寺：白川にあつた寺院。

<sup>218</sup> 両かけ：両掛、荷物を紐で結んで前後に振り分け、肩に担ぐこと。



同八日天氣吉

九日天吉

覺

一人足貳拾人

滑川村

是ハ当月十一日明六ツ時御陣屋詰

持道具山刀・かま・小さい

右<sup>者</sup>御陣屋御周垣結ニ召遣申候間、前件之通人足割合申遣候間、老村より才判組頭老人宛差添無間違可被遣候、尤雨天ニも在之候ハ、順々日送りニ操合<sup>219</sup>、一同ニ落合不申様取計可被遣候、此書付見届申候ハ、村下へ庄屋中被成印形早々順達留村方可被相返候、以上

亥十月八日

両割元

此配符九日四ツ時仁井田方受取留ル

覺

十

十月廿三日夕方十四日朝迄

一 鑓七拾文

中山七郎

是ハ当村無尽之節立合為御用罷越候節受取申候

同廿七日夕方同廿八日朝迄

一 鑓七拾文

桑名源内

是ハ御繰合御用之儀ニ付罷越候節受取申候

右同断

一 鑓七拾文

矢部源五衛門

是ハ右同断

右同断

一 調鑓百四拾文

右兩人

219 操合：原文ママ、「繰合」。

是ハ右同断ニ付、小者耄人つゝ召連候ニ付、為受  
取申候

十二月十六日昼分

一 鐔三拾五文

中山重藏

是ハ村々為見廻罷越候節受取申候

亥二月十三日夕方十五日朝

一 丁鐔百七拾五文

中山七郎

是ハ無尽興行之節罷越受取申候

同二月廿日昼方廿四日昼迄

一 丁鐔四百五拾五文

中山藤四郎

是ハ香具芝居興行ニ付為見廻り罷越候節受取申  
候

亥二月廿四日昼方同廿六日朝迄分

一 調鐔貳百拾文

中山重藏

是ハ右同断

二月廿四日昼方廿八日朝迄分

一 調鐔四百貳拾文

安藤勇次

是ハ右同断

三月四日夕方同八日朝迄

一 調鐔三百八拾五文

右同人

是ハ右同断

四月五日夕方六日朝迄分

一 鐔七拾文

矢部八之平

是ハ堰池御普請場為見分罷越候節受取申候

同十三日夕方十四日昼之分

一 調鐔百五文

善方吉衛門

是ハ駄付為御用罷越候節受取申候

五月八日夕方十一日朝迄分

是ハ為駄付罷越候節受取申候

一調鏹貳百八拾文

矢部八之平

是ハ堰普請立合為御用罷越候節受取申候

同し

一鏹三拾五文

右同人

同九日昼方同十一日朝迄

是ハ右同断二付、馬口勞<sup>221</sup>喜右衛門召連候節受取

一丁鏹貳百拾文

中山七郎

是ハ右同断くれ<sup>220</sup>場為立合罷越候節受取申候

申候

八月十三日夕方十四日朝迄

閏六月十五日夕方同十六日昼迄之分

一鏹七拾文

矢部八之平

一丁鏹百五文

中山藤四郎

是ハ無尽立合為御用罷越候節受取申候

是ハ人別改為御用罷越候節受取申候

右同断

亥閏六月廿六日昼方廿七日朝迄上下式人分

一鏹七拾文

矢部郡平

一丁鏹貳百拾文

相原宇平

是ハ心学道話為教道罷越候節受取申候

是ハ右同断

同廿八日昼之分

<sup>220</sup> くれ：塊、土止め用の草付の土。

一鏹三拾五文

善方吉衛門

<sup>221</sup> 馬口勞（ばくろう）：馬喰、博勞、牛馬の売買や仲介をする商人。

右同断

一 鐙七拾文

右同人

是ハ右同断ニ付、当村庄屋隆平為判取召連候節受  
取申候

亥八月廿八日夕方廿九日朝迄

一 鐙七拾文

安藤勇次

是ハ仙台殿通棺ニ付、道橋為見分罷越候節受取申  
候

亥九月三日昼之分

一 鐙三拾五文

矢部八之平

是ハ当亥田方中下為歩苅為御用罷越候節受取申候

九月十一日昼方同十二日昼迄

一 調鐙百四拾文

中山七郎

是ハ通棺ニ付、道普請為立合罷越候節受取申候

同十三日夕方十四日朝迄之分

一 調鐙三百五拾文

小瀬八衛門

是ハ当亥田方大検見為御用巡村致候節、上下五人  
分受取申候

右同断

一 鐙七拾文

矢部源五衛門

是ハ右同断、上下歩苅為御用罷越候節受取申候

右同断

一 鐙七拾文

矢部在平

是ハ右同断ニ付、跡乗為御用相廻候節受取申候

九月十五日昼方十六日朝迄

一 丁鐙貳百廿五文

上下五人分

桑名源内

是ハ信恭院様御通棺ニ付、出役候節受取申候

右同断

八両也、外二金貳両壹分入用也相納申候

一丁鑢百五文

矢部郡平

是ハ右同断

十一日雨天

右同日夕方十六日朝迄分

十二日雨天

一鑢七拾文

御足輕兼帶

中山七郎

十三日天氣よし

是ハ右同断二付、御先払為御用罷越候節受取申候

同日当村無尽会日

右同断

十四日

一鑢七拾文

御足輕

中山収平

十五日天氣

是ハ右同断

ノ四貫三百拾六文

十日天氣吉

態々致啓上候、寒冷之節弥御壮栄ニ可被成御凌珍重之御儀  
ニ奉存候、然<sup>者</sup>当村御境杭根本弱り候ニ付、此度申立建替  
申候間、左様御承知被下、今日御下役中成共、御差出御立  
合可被下候、右之段得御意度如此ニ御座候、以上

右御賄帳御代方納之節、庄屋紋右衛門持參致候金拾

十月十五日

河原吉兵衛

桑名紋右衛門様

十六 十七雨天

覚

一米四百式拾俵余

内米六拾八俵也

白川津出相添候分

米百俵也

桑名紋右衛門方へ御払二相

成候間、可相渡候

米百俵也

安内喜惣次方<sup>江</sup>右同断

米百五拾俵余

是ハ山寺米之組合、紋右衛門・弥三郎兩人

へ相払二相成候間、兩人申合之上可受取候

右<sup>者</sup>当亥御物成米、大凶御払取極候二付、津出之分取調、

前書之通申付候間、無間違取計可申候、若前書之内々ニ出

し違等致過不足候ハ、致書付早々可申出候、来ル廿五日

までに申出無之候ハ、間違無之事ニ相察、役所之調通りニ

取極申候間、右様相心得可申候、此調帳見届候ハ、村下へ

庄屋致印形早々順達留村方可相返候、以上

亥十月十九日

御代官方

右村々庄屋

十八 十九 廿日天吉

覚

一下り

清吉

一同

四郎平

出<sup>ハ</sup>人弐人

惣<sup>ハ</sup>出人五十五人

内 居村廿三人

下り三十人

欠人弐人

右<sup>者</sup>当亥暮登老季御中間居付下り、前件之通江戸表方申来

候二付申触候、村々見届居付下り、村願等有之候ハ、別

紙横紙<sup>江</sup>御中間名前書記、尚又新規御中間<sup>者</sup>名前之脇<sup>江</sup>年齢  
相記し、来月十日迄二無間違役所<sup>江</sup>可差出候、尤例年之通  
新規之者同月十五日役所<sup>江</sup>為目見組頭同道二而可差出候、  
江戸表<sup>江</sup>差出候日限之義<sup>者</sup>同廿三日差立候間、無間違可申  
付候、此配符見届候ハ、村下へ庄屋致印形、早々順達留村  
方可相返候、以上

亥十月十九日

御代官方

右村々庄屋

此配符両冊廿日夜子下刻山寺村方受取、廿一日朝仁井  
田へ遣ス

(挿入一紙)

覚

一鶏卵九百六拾五

右<sup>者</sup>八月分納鶏卵、書面之通相違之儀無御座候、以上

文政十年

滑川村庄屋

亥十月

紋右衛門

与頭 次右衛門  
同 六左衛門

廿一日天氣吉

廿二日天氣吉

廿三日 四日<sup>222</sup>天氣吉

廿五日天吉

此日下宿村方上州高崎方<sup>223</sup>参り候由<sup>者</sup>、座頭官位致度旨  
相對也、

同日長沼桑名弥市方二而、御領内庄屋御用談無尽有之候  
二付、隆平罷出申候

<sup>222</sup> 四日：原文ママ、「廿四日」。

<sup>223</sup> 方（より）：原文ママ、「迄」か。

廿六日罷り帰り申候

紋蔵

廿六日天吉

三人分十二月九日紋蔵へ渡ス

廿七日天氣吉

廿八日天吉

○是ハ大下普請前故引札不渡筈

△申候間、笹川村へ牛蔵ヲ以繼送り

・申候、尤帳面へハ先余り候て、宜雨無之候間、拾足

ニ付呉候様相願候ニ付、左之他遣申候△

勸化相願候ニ付廿文差出

十一月朔日方五日迄天氣吉 此日冬至入六日雪降ル

滑川村

居村并十貫内渡し

一米三百五拾五俵分

此駄賃三拾壹貫九百五拾文

同日病人武州埼玉郡南大桑村<sup>224</sup>武史<sup>与</sup>申者、羽州方段々  
送り来り候由ニ而、同日笹川宿方繼送り来候ニ付、一  
宿致し候、廿八日下宿村へ繼送り遣し申候

繼人足 源四郎

<sup>224</sup> 武州埼玉郡南大桑村：現・埼玉県加須市南大桑。



此金四兩三分貳朱、七百五拾文

但シ壹馬ニ付百八拾文ツ、

金壹分ニ壹貫六百文替

内金三兩貳分也、来ル十五日納

殘金壹兩貳分貳朱 七百五拾文

是ハ十二月三日納

右<sup>者</sup>当亥御物成米之内、前書之通切々御払米ニ相成候所、引返し駄賃錢御米代金之内<sup>江</sup>御收納ニ相成、来ル十七日三度使ヲ以為御登金ニ罷成候間、大図三ヶ式程、来ル十五日無滞相納可申候、殘駄賃金ハ来月三日皆納可致候、前書見届候ハ、村下へ庄屋致印形早々順達シ留村より可相返候、以上

亥十一月四日

御代官方

右村々庄屋

此配符六日昼巳中刻山寺方受取、直ニ仁井田村へ遣ス

以書付申遣候、然<sup>者</sup>九月分鶏卵納之義、明後十日迄ニ取立

可被納候、若延引致候而ハ為御差登ニ差支候間、右様相心得可被納候、此配符見届候ハ、村下へ庄屋致印形、刻付ヲ以早々順達シ留村方可被相返候、以上

亥十一月七日

両割元

此配符七日<sup>225</sup>夜戌上刻山寺方受取留ル

七日天氣吉

八日天氣吉

九日天氣吉

以書付申遣候、然<sup>者</sup>当亥御年貢割付来ル十日相渡候間、庄屋・与頭朝四ツ時役所<sup>江</sup>可罷出候、此配符見届候ハ、村下へ庄屋致印形、早々順達留村方可相返候、以上

<sup>225</sup> 七日：原文右側に「八」と記す。

亥十一月八日

御代官方

右村々庄屋

此配符八日夜丑中刻山寺村方受取、直ニ仁井田村へ遣ス

右ニ付隆平・六左衛門罷越、頂戴仕罷り返り<sup>226</sup>申候、去年方ハ壹分折、四ツ五分、端郷ハ同断三ツ四分也

滑川村

一米百七拾八石四合

此俵四百貳拾三俵三斗四升四合

此払

米六拾八俵也 白川津出相済候分

米百俵也 桑名紋右衛門方へ御払米ニ付可相渡候

米百俵也 十貫内喜忠次方へ右同断

米百五拾五俵也

是ハ山寺村御米之組合紋右衛門・弥三郎両

人<sup>江</sup>御払ニ相成候間、両人申合之上可受取候

残米三斗四升四合

是ハ来子春御米御門番所納

代方

一金四拾五両貳分調

此本鏹百六拾貳文

夫金

一金六両三分調

此本鏹七百八文

定浮役

一金三両貳分調、此本鏹五百七拾六文

ベ金五拾五両三分調

此本鏹壹貫四百四拾六文

内金四拾両貳分也 三度納

<sup>226</sup> 罷り返り…原文ママ、「罷り帰り」。

金貳両也

一季御中間身代金

殘金拾三兩壹分調

十二日寒し

十五日追天氣吉

右<sup>者</sup>当亥御物成米金、前書之通来月十五日急度無間違皆  
済可致候、且役所勘定・村勘定相違も在之候ハ、早々可  
申出候

一御米津出候義、前書之趣見届、若相違も在之候ハ、早々  
可申出候

一皆済鏢直之義、追而相触可申候、右様相心得可申候

一皆済鏢克々吟味之上、漏・不足等無之様、尤貫差二不致  
相納可申候、前書見届候ハ、村下へ庄屋致印形、早々順  
達留村可相返候、以上

亥十一月十日

御代官方

風聞扣

同日御代官方善方五四郎様御領内御物成米、悪米・悪俵  
差出候村々、中二<sup>者</sup>在之由粗相聞候趣ニ付、右御改として  
十四日暮時山寺村<sup>方</sup>御移被遊候所、居村御泊被成、十五日  
朝関下村へ御越被遊候、尤居村米二<sup>者</sup>御改在之候得共、悪  
米等無之候ニ付、当村之義<sup>者</sup>別段取扱方宜候様御誉ニ預り  
申候事

同十日天氣吉

一此度於仙台様陸奥守様<sup>227</sup>御卒去被為在候趣ニ付、海道筋  
早駕籠・早馬等騒々敷、誠ニ慥成由ニ御座候、依之一  
昨十四日伊達藤五郎様<sup>228</sup>賑々敷御同勢ニ而御登被遊候、

十一日同し

<sup>227</sup> 陸奥守様：仙台藩第一一代藩主・伊達齊義、文政一〇年一一  
月二七日に江戸で病没、享年三〇。

十六日ニ此度陸奥守様御成被遊候、御仁伊達式部様<sup>229</sup>方御全門ニ而御登り被遊候、十七日朝当村灯燈ニ而片倉小十郎様<sup>230</sup>一日送レ<sup>231</sup>ニ御登被遊候、是ハ若君様<sup>232</sup>二千住方御供被遊候心掛ニ而在之被遊候由  
一当年御遺骸御下り之趣風聞御座候、慥成義ニも御座候哉

十九日追天吉

廿日雨降

十一日天吉

以書付申遣候、然<sup>者</sup>当亥御払米代金、当十一月納約速<sup>233</sup>ニ而御払ニ相成候ニ付、御払受人共銘々相心得居候事ニ候間、来ル廿四日ニ相調可申候、右之趣御払受人方<sup>江</sup>庄屋方ニ而申付為相納可申候、此書付見届候ハ、村下へ庄屋致印形、早々順達し留村方可被相返候、以上

亥十一月廿日

御代官方

滑川村

桑名紋右衛門

喜忠次

良助

弥三郎

此配符廿一日夜五ツ時、仁井田村方受取留り

<sup>228</sup> 伊達藤五郎様…伊達宗恒（むねつね）、仙台藩一門・亙理伊達家第一二代、『亙理町史』参照。宗恒は藩主斉義を見舞う目的で一月に江戸へ出発した。

<sup>229</sup> 伊達式部様…伊達宗充、仙台藩一門・登米（とよま）伊達家第一一代。文政一〇年一月、宗充の長男が藩主斉義の嫡養子となった（仙台藩第一二代藩主伊達斉邦）。

<sup>230</sup> 片倉小十郎様…片倉宗景、仙台藩一家・片倉家第一一代、白石城主。

<sup>231</sup> 送レ…原文ママ、「遅れ」。

<sup>232</sup> 若君様…伊達斉義の二男・穰三郎（のち第一三代藩主・伊達慶邦）のことか。

<sup>233</sup> 約速…原文ママ、「約束」。

廿四日天吉

廿五日天吉

以書付申遣候、然<sup>者</sup>相原宇兵衛様江御札、鶏卵壺軒ニ付壺  
ッ宛来ル廿七日無間違可被遣候、此書付見届候ハ、村下へ  
庄屋中致印形、早々順達留村方可相返候、以上

亥

十一月廿四日

両割元

滑川村

一鶏卵五千九百七拾也

是<sup>者</sup>三月方追々納申候

内貳百拾也

是<sup>者</sup>右納高之内、月々充申候くされ不足分

残五千七百六拾也

一 六千七百五拾 是<sup>者</sup>三月方十月迄五拾軒

差引九百九拾

惣納高  
納不足

右<sup>者</sup>当亥納鶏卵惣差引いたし、前件之通相廻し申候間、納  
不足之分来ル廿七日迄ニ無間違可被納候、若間違等有之候  
ハ、可被申聞候、此書付見届候ハ、村下<sup>234</sup>庄屋中致印形、  
刻付ヲ以順達留村方可被相返候、以上

亥

十一月廿四日

両割元

尚々廿七日間違候而ハ、江戸表<sup>江</sup>御差登差支ニ相成候間、  
左様相心得無間違可被納候

此配符領用同廿五日昼八ツ半仁井田村方受取、山  
寺<sup>江</sup>遣候

覚

234 方(より)…原文ママ、「く」。

一調鑓五貫三百四拾貳文

但是ハ宗門御改之節諸入用<sup>レ</sup>高如此

一人足<sup>レ</sup>高五千四百九拾七人

但人足<sup>レ</sup>壹人ニ付鑓九分七り、壹毛八金哉

此割

人足四百七人

一調鑓三百九拾六文

滑川村

右<sup>者</sup>当亥八月中宗門御改之節、諸入用前件之通割合致候、此度相触候間、来月十五日迄無間違可被調候、此書付略之

亥十一月廿六日

両割元

覚

一金貳分也

郷小走給

此本鑓貳貫文

役高壹万三千百五拾六石<sup>江</sup>割

但高千石二付

本鑓百五拾貳文、春三月

一百五文

滑川村

右<sup>者</sup>当亥郷小走給、前件之通相触候間、来月十五日御皆濟之節相納可申候、尤鑓直段之義ハ御皆濟鑓同様可被納候、此書付

亥十一月廿六日

両割元

此配符両冊廿七日、山寺方受取、直ニイ田へ遣ス

廿四日 廿五日 廿六日 七日 八日天氣吉

廿九日天氣吉

晦日天氣吉

十二月朔日天氣吉

二日寒し

長沼御陣屋

守山御陣屋

小瀬八右衛門様

三浦平八郎

此状箱村々無滞可被相届候、以上

十二月二日

小栗三九郎

此状箱白木之箱二入、二日夜戌上刻御代田村方  
受取、直ニ仁井田へ遣ス

三日雪降

乍恐以書付奉願上候事

一当村御百姓清八儀、連年困窮相募難決罷有候所、養亡父  
座頭<sup>235</sup>繁之都夫婦重病相煩、弥ヶ上極貧罷成恐入奉存候、  
然ル所去ル十一年以前寅年方午年迄<sup>236</sup>七ヶ年之内御仁恵御  
救被成下難有仕合ニ奉存候、然ルニ清八居家柱くされ、往  
還之方<sup>江</sup>曲りかふばり<sup>237</sup>等致候、漸々棲居罷り有候ニ付、  
三ヶ年以前方心掛、材木等相集置候得共、家作可仕手段無

御座歎敷奉存候、依之御時節柄ヲも不顧奉恐入候得共、右  
清八家之義<sup>者</sup>往還<sup>江</sup>曲り差掛り、日々諸御往来繁キ内、若  
危歎之義も難計、依而手入仕候様申付候所、迎も手入普請  
ニ出来兼候、依而建替候方外無御座候、木柱之義ハ心掛候  
得共、当御上納仕候得<sup>者</sup>、農夫喰無御座難決至極奉存候、  
何卒夫食金として金壺両式分無利年賦御拝借奉願上候、何  
卒 御仁恵之御了簡ヲ以右奉願上候通被 仰付被下置候  
ハ、家作普請も出来、御百姓ニ取統難有仕合ニ奉存候、以  
上

滑川村百姓願人

文政十年亥十一月

清八

与頭

次右衛門

<sup>235</sup> 座頭（ざとう）…盲人で、琵琶や三味線などを弾く、あるいは按摩・鍼などを生業とした者。

<sup>236</sup> 寅年方午年迄…文政元年（一八一八）から同五年（一八二二）。  
<sup>237</sup> かふばり（こうばり）…勾張り・甲張り、建物が傾く、あるいは倒れることを防止する材木、つかい棒。

同

六左衛門

庄屋

紋右衛門

御郡御役所様

右之通相認差上申候所、御仁恵拝借之義ハ相成不申  
由被仰聞候得共願書差置可申候様被仰聞候ニ付差上  
申候、追而御了簡可有之由ニ御座候事

(挿入一紙)

桑名朝之助畢請納、鶏卵奉納

百足朝之助

(挿入一紙)

右清八義連年困窮相募難洪罷在候所、養父座頭繁之都長病  
相煩、弥上極貧罷成恐入存候、然ル処去ル十一年以前寅年

方午年迄七ヶ年之内御仁恵御救被成下置、御百姓ニ取続  
重々難有仕合ニ奉存候、然ルニ清八居家柱くされ、往還之  
方へまかりかうはり等致、漸々棲居罷在候ニ付、三ヶ年以  
前方心懸、材木等相集置候得共、家作可仕手段無御座歎敷  
奉存候、依之御時節柄をも不顧奉恐入候得共、右清八家之  
義<sup>者</sup>往還<sup>江</sup>まかり差懸、日々諸御往来繁内、若危難之義も  
難計、仍而手入仕候様申付候所、逆も手入普請ニ出来兼  
候、依而建替候方外無御座候、木柱之義<sup>者</sup>心懸候得共、当  
御上納仕候得<sup>者</sup>、夫食無御座難洪至極奉存候、何卒夫食金  
として金壹両貳分無利年賦御拝借奉願上候、何卒御仁恵之  
御了簡を以右奉願上候通り被仰付被下置候ハ、家作普請も  
出来、御百姓ニ取続難有仕合奉存候、以上

覚

一金壹分ニ調鏝壹貫六百廿文替

右<sup>者</sup>当亥御物成皆済、鏝置申触候間、右様相心得、来ル  
十五日無間違急度皆済可致候、尤上納鏝踊<sup>238</sup>不足無之様入



念可相納候、此配符見届候ハ、村下へ庄屋致印形、早々順達留村方可相返候、以上

亥十二月朔日

御代官方

村々庄屋

此配符三日夜戌上刻仁井田村方受取、直二山寺村へ遣ス

覚

一調貳貫八百三拾九文

右<sup>者</sup>当亥年番給諸入用割合仕候間、来ル十五日桑名屋ニ而取立申候間、無間違御持参可被下候、若勘定違も御座候ハ、重而可被仰聞候、此諸懸り帳早々順之上留村方返却可被致候、以上

和田庄兵衛

柏木新八

柏木森之助

渡部宇右衛門

石井周作

右村々

御同役中様

覚

金三両也

一調拾九貫貳百文

高壺万三千百三拾六石壺斗八升壺合

但高百石<sup>ニ</sup>付

丁百四拾六文壺分

此割

一調壺貫十貳文

滑川村

右<sup>者</sup>先達而御内談仕候中山七郎殿無尽之儀、御領中ニ而金三両合力、来春宿貫圖之節遣し候様兼而御取合致置候所相成義ニ有之候ハ、年内受納致度趣有哉も及承候ニ付、依而来春<sup>与</sup>申候而ハ当村割ニ入申間敷<sup>与</sup>奉存候間、割合致御

238 鑑踊…原文ママ、「鑑調」。

覽二入候得共、落手之義<sup>者</sup>皆濟之砌御内談可申上候、左様御承知可被下候、以上

亥

和田庄兵衛

十二月

柏木新八

柏木森之助

渡辺宇右衛門

石井秀作

右村々御同役中様

此配苻廻文四日昼八ツ時山寺<sup>方</sup>受取、仁井田へ遣ス

以書付申遣候、然<sup>者</sup>岩城城下<sup>239</sup><sup>方</sup>壺里半程北平久保村与作<sup>与</sup>申者方<sup>江</sup>長沼素生栄蔵と申者之由二而木伐致し罷在候由之所、去ル二日木伐ニ参り大枝打返り怪我致し命分無覺束相見為知飛脚、兩人唯々罷越候旨申出候二付、長沼両丁相糺候所、右様之もの侘出無之旨申出相訳り不申候処、御領分村々之内罷出居候ものも在之候哉、心当り之者も在之候ハ、早々可申出候、右人相左之通二相聞申候、此段為心得

相触候間、若似寄候者在之候ハ、早速可申出候

一年廿八歳 顔長キ方

一いろ赤キ方 但、小麦色之由而在之候

一鼻高キ方 中せい

右之通二御座候、此触書見届候ハ、村下へ庄屋印形刻付ヲ以順達留村<sup>方</sup>可相返候、以上

十二月五日 戌上刻出ス 御郡方役所

此触書六日昼巳中刻、仁井田村へ遣ス、山寺村<sup>方</sup>受取候而<sup>240</sup>

四日 五日嵐し寒し

六日天気吉

扣

右之通御触有之候二付、村中相糺申候所、村内二無<sup>者</sup>之候

<sup>239</sup> 岩城城下：磐城平藩、現・福島県いわき市。

<sup>240</sup> 候而：原文ママ。

覺

才判次右衛門行

一人足式拾人

滑川村

是ハ今夕勢至堂詰

右<sup>者</sup>会津御家中被通候所、雪中ニ而馬足相立不申候ニ付、前件之通人足割合申遣候間、老村<sup>方</sup>才判与頭老<sup>人</sup>宛差添無間違可被遣候、此配符見届候ハ、村下へ庄屋衆被成印形、刻付ヲ以順達留村<sup>方</sup>可被相返候、以上

十二月六日

両割元

已下刻出ス

此配符六日夜亥下刻、仁井田村<sup>方</sup>受取留り

同七日天氣吉

同八日天氣吉上々

同九日雨降

十三日迄小雪寒し

以書付申遣候、然<sup>者</sup>利忠次方追々上納殘并駄賃納、殘昨十一日迄ニ相納候様申付置候所如何致候哉、此書付参着候ハ、早々可相納候

一滑川村喜忠次・良助・弥三郎追々上納、殘并駄賃納、殘りは又昨日迄ニ可相納候所如何致候哉、此書付参着候ハ、罷出可相納候、其節此書付可相返候、以上

十二月十二日

御代官方

滑川村 庄屋

仁井田村

此配符十三日朝四ツ時仁井田<sup>方</sup>受取留ル

右ニ付三人共方<sup>江</sup>小走ヲ以相達申候事

十四日 同十五日よし、昼よりゆき

十六日

以書付申遣候、然<sup>者</sup>松平陸奥守殿<sup>241</sup>御遺骸当月十日江戸

御發棺候旨、今日江戸表方申来候所、其村御通棺之節、前振之通役所方耆人、御足輕兩人罷越候間、都而当秋中御通棺之節通手当致置可申候、尤此度<sup>者</sup>役所二限り候間、其心得二致置可申候、十日江戸御發棺<sup>与</sup>ハ申来候ヘ共、其村御通棺日限不相分候間、前後宿方為知申来候ハ、此旨早々可申上申候、此書付其節可相返候、以上

亥十二月十三日

御郡方役所

尚々申遣候、九月付見習代七方<sup>江</sup>御用之義在之候間、当月十五日庄屋紋右衛門一同可罷出候、以上  
右代七御召之使方出奔致候二付、御所筋被 仰付候事  
此配符十四日仁井田村方受取留ル

十六日雨降

覺

才判次右衛門行

一 人足式拾人

滑川村

是ハ明十六日夕勢至堂詰

右<sup>者</sup>諸御家中被通候所、雪中二而馬足相立不申候二付、前件之通人足割合申遣候間、耆村方才判与頭耆人ツ、差添無間違可被遣候、此配符見届候ハ、村下ヘ庄屋衆被成印形刻付ヲ以順達留村方可被相返候、以上

亥十二月十五日

両割元

此配符十六日朝卯下刻仁井田村方受取留ル

扣

一仙台様御遺骸御通行之趣二付、須か川宿<sup>江</sup>岩吉ヲ以聞合二遣し申候所、左之通遣し申候

一十六日御寓

鍋掛宿

一十七日御寓

白坂宿

一十八日御寓

須加川

241 松平陸奥守殿…原文ママ、「松平陸奥守様」。

一十九日御寓

本宮宿

一廿日 御寓

福嶋宿

右之通ニ相認遣し申候、留扣如斯

以書付申遣候、然<sup>者</sup>我等義滑川村へ御用ニ付罷越候所、時  
分柄ニ付歩行ニ而罷越候条、此荷物并高張箱村へ相々<sup>242</sup>可  
相送候、以上

十二月十八日

矢部郡平

志も村、深渡戸村、矢沢村、

滑川村廻

十八日天氣吉

十九日天氣吉寒し

控

右<sup>者</sup>松平陸奥守様御遺骸当地御通行ニ付、御役所様方諸事  
取扱<sup>レ</sup>方橋場才判為御用、御郡方矢部郡平様先<sup>与</sup>払して中  
山藤四郎様・安藤勇次様諸事手当振、当秋信恭院様御通棺  
通行通り、しかし先年文化九申年仙台政千代様<sup>243</sup>御遺骸御  
通行之節留扣ニ<sup>者</sup>橋南足本へ榎等積重候次第不相見、猶又  
御役所様御旧記ニも不相見趣ニ申上共、此度之義ハ当秋通  
り御手配り致し候、依<sup>而</sup>先ツ十八日壺番鳥ニ遠見として藤  
吉・藤右衛門兩人差遣し申候、尤御出立之義ハ夜明ケ離レ  
と風聞在之候得共、万一之義在之候時之ため差遣し申候、  
郡平様小休場半四郎宅御通行之節ハ、先例之通橋南足本へ  
罷出候、此度庄屋見習隆平罷出申候、然ル所先方取次役御  
死棺方先<sup>江</sup>掛ぬけ参り、御郡方手札相渡済候而、拙者方<sup>江</sup>  
参り候ニ付、手札相渡候、尤滑川村庄屋桑名紋右衛門<sup>与</sup>相  
認相渡申候、然ル所取次役拙者札披露相残候ニ付、先キ迄

<sup>242</sup> 相々：原文ママ、「早々」。

<sup>243</sup> 仙台政千代様：仙台藩九代藩主・伊達周宗の幼名、周宗は文  
化九年（一八一二）に逝去（幕府への届け出）。

参り呉候様申候二付、駈拔ケ崩橋南早稲田出口向畠際迄参り候而、取次役滑川村庄屋桑名紋右衛門<sup>与</sup>読上候而相帰り申候、以来右之通相認差出候而不苦候間差出候様可被成候、尤御境面<sup>江</sup>御足輕兩人猶又為地走当秋之通長百姓甚々使差出、ほふき持兩人差出申候、沢めき橋南足本へ郷目付見習代七罷出候、尤くミ頭六左衛門差添差出申候手札、滑川村郷目付真部代七<sup>与</sup>書申候、何れも御通行首尾克相済申候、当地御通行ハ朝初五ツ時ニ御座候、弓廿丁・鉄炮廿丁・長柄廿丁ツ、右間へ物頭壺人ツ、騎馬ニ而在之候、右御通御死棺当秋御死棺通りニ而御同勢に重々敷事ニ候、御役人様方十九日四ツ半時御帰陣被成候事

一 困人として人足十人程物頭ニ置候事

一 拙者橋場才判として罷出候由申上候事

右御通棺首尾克相済、御役人様方直ニ御帰陣ニ相成申候事

#### 送り始末之吏

一 生国<sup>244</sup>下野栃木町川岸

親久右衛門、兄久助四男

五郎左衛門

年四十五

#### 持道具

小布団式ツ

小風呂敷壺ツ

嶋衣<sup>245</sup>段壺ツ

錢六百三十壺文

右之者病氣ニ而当駄<sup>江</sup>来候ニ付相改申候所、髮結渡世ニ而諸国相廻り、当秋之頃病氣ニ而手足不自由ニ相成、所々ニ而薬用仕候得共、全快不致在所へ罷り登申度、当所迄宿安駄ニ而人足ヲ雇来候へ共、最早路錢も尽果、其上弥増病症差重り候ニ付三日留置、菊昌院薬用為致候得共、元来瘡毒之症ニ而早俄々敷、快氣も不相成旨申出、尤此者願<sup>ニ者</sup>慈悲を以生国へ御継送り被下度旨願ニ付、其筋へ申上、任願安駄取板送り出し申候、向々御継送り被下度奉願候、以

<sup>244</sup> 下野栃木町川岸…現・栃木県さくら市卯の里。

<sup>245</sup> 嶋衣（しまぎぬ）…嶋（縞模様）の衣服か、段は「反」。

上

亥十二月七日

検断

森岡領花巻川口村<sup>246</sup>

箱崎喜兵衛

問屋

市兵衛

右栃木町迄之

宿村

御類役衆中

若宮丁

松岡丁

亀谷丁

竹田丁

根崎丁<sup>247</sup>

此病人

文言同断

右之者病氣ニ而歩行不相成候ニ付、森岡御領花巻川口  
丁役人添書以宿村継来候ニ付、今廿六日貴村方継送り  
被遣候間、立合病体相糺候所、申口添書<sup>与</sup>相違無之候  
間、受継申候、万一先々故障在之相戻し申候節ハ貴村

へ相戻し可申候、為念如此ニ候、以上

亥十二月廿二日

滑川村庄屋

桑名紋右衛門

笹川

三役人当<sup>248</sup>

文言右同断

右之者病氣ニ而歩行不相成候ニ付、森岡御領花巻川口  
丁役人添書ヲ以宿村継送<sup>リ</sup>来候間、立合病体相糺候  
所、申口添書ニ相違無之候間継送り遣し申候如例御取  
計可被成候、以上

同日

桑名紋右衛門

遠藤雄藏殿

此病人十二月廿六日笹川駅方継来候ニ付、下宿へ遣ス

<sup>246</sup> 森岡領花巻川口村：原文ママ、「盛岡領」、陸奥国稗貫郡里川

口村、現・岩手県花巻市。

<sup>247</sup> 若宮丁・松岡丁・亀谷丁・竹田丁・根崎丁…二本松城下町の  
地名、現・福島県二本松市。

<sup>248</sup> 当（あて）…原文ママ、「宛」。

繼人足 紋藏

傳行

紋藏へ子九月十四日渡ス

一  
覺

滑川村庄屋

紋右衛門

庄屋見習

隆平

右之者共申渡候御用在之候間、明後廿八日朝五ツ時  
与頭耄人召連役所へ可罷出候、其節此書付可相返  
候、以上

亥十二月廿六日

御郡方

一  
覺

滑川村太刀御免

良助

文言右同断ニ付略す

亥十二月廿六日御代官方

右両様配符廿八日朝五ツ時仁井田村方受取申候ニ付、直ニ  
良助方へ小走ヲ以下宿へ申遣候所、須か川ニ罷在候ニ付、  
良助ヲ以早々為持差遣し、直ニ長沼<sup>江</sup>罷出候様申遣候ニ付  
罷出申候、紋右衛門・隆平・与頭六左衛門罷出候処、御郡  
御役所様ニ而御申渡被遊候ハ、庄屋紋右衛門へ申渡、当年  
人別面付相改候所、先年相改候方ハ格別人数多ク罷成、猶  
又家数等も相過候、旁々以御百姓方取扱宜出情致候ニ付、  
為御称美張紙式束被下置候間、御手付ヲ以御申渡有りかた  
く頂戴仕相廻り申候

一 隆平方へ申渡、当年人別改之節為判取相起、旁々以大  
義之至りニ付、張紙耄束御称美<sup>与</sup>して被下置候趣被仰  
仰渡<sup>249</sup>難有頂戴罷り帰り申候

此れハ御台所へ御申置計り

一 右良助方御代官方御申渡、当年御米御払米取扱方甚宜

249 被仰仰渡：原文ママ、衍字。



敷大義之至二付、為御称美南鐐沓片被下置候間、難有  
頂戴仕り罷り歸り申候、以上

桑名紋右衛門

(花押)

大尾目出度申し候、以上

君よに我々も

しもへ君よの

心にわ浅目出度

申し候

此御用留堰普請之次第、并二仙台様両度之御遺骸御通行之  
次第、猶又買兼居之次第委敷在之候間、此帳御覽可被成  
候、以上

## あとがき

武田 作一

コロナ禍にあつて一人古文書に向かつて孤独を感じることはない。古文書はじっくり時間をかけ取り組む。否、時間を掛けざるを得ないのです。無い頭で試行錯誤していると時間はあつという間に過ぎてしまう。この桑家文書御用留はボリュームがあり、私の能力を遥かに超えた資料でした。荒武賢一朗先生からは数多くのご指摘を受けながらの解読作業でした。文中の人物からは「分かつてねえなあ、読み込み不足・未熟」との叱咤をヒシヒシ感じながらの解読作業でした。荒武先生には感謝の言葉しかありません。

以下、本文を読み関心を持った事について記してみます。

### 一 鶏卵のこと【十一月七日ほか】

御用留には「鶏卵」という文字が頻りに出てくる。『長沼町史』（二〇〇五年刊）によれば、文化十四年（一八一七）十二月に長沼・勢至堂の両駅と助郷村々が熟談のうえ藩に願ひ出た。

当時多くの農民が鶏を飼育していたので、文政元年（一八一八）より同七年（一八二四）までの七年間、一戸あたり月一七個、三月より十月まで役所に納める。役所はこれを江戸で売り捌くこととした。しかし、販売仕法に慣れず思うようにはいかなかった。そこで、文政八年から同十二年までの五年間延長し、月一戸十五個にしてこの仕法を延長した。その後の展開については資料がなく不詳であるが、幕末まで存続していた、と『長沼町史』の記述にある。

「一 六千七百五十拾 是者三月方（より）十月迄五拾軒」として六千七百五十拾個の目標に、五拾軒、三月から十月までの九か月間（閏六月を含む）には、一軒当たり毎月十五個の上納が必要である。本御用留の内容は文政十年であ

り、先述の『長沼町史』と個数が一致する。

## 二 鏡沼村常松氏のこと【五月十一日】

滑川村堰普請立合（立ち会い）のため、矢部八之平、和田紋十郎、中山七郎が出向き、五月十日普請済、十一日に帰陣するのであるが、矢部は「是方鏡沼村常松氏二而野蜚伺置候」として鏡沼村の常松の所に野蜚見物に出掛けた。文政十年からすると約四十年前の寛政元年（一七八九）常松次郎右衛門は、越後の女性を引き取りたいと白川藩に願出、藩はこれを許した。同年三月常松手代二名が越後に出發し、希望者を募り十五人の女性を連れ帰った。常松は自宅に引き取り大切に預かり、希望する男性に嫁がせた。間引きによる人口減少対策に取り組んだ。十二月下旬に桑名紋右衛門、隆平、与頭六左衛門は長沼陣屋へ出向き、「格別人数多ク罷成、猶又家数等も相過候」と、百姓への取り組み宜しいとして張紙二束をご褒美として頂戴している。常松の取り組みが影響しているのかとも思った。関連する古文書を仲間内で読み合わせることが想起される。

## 三 御師および無尽のこと【二月十日ほか】

江戸中期、全国四百五十万人、全人口の約七割が旅行をしたといわれる。その陰の立役者は御師と呼ばれる人々であった。御師は毎年全国津々浦々を巡り、伊勢参宮を目的とした伊勢講を結成させ、この講親を掌握した。御用留の筆者・桑名紋右衛門は、この地域の講親の一人かと思われる。なお、伊勢講実施の有無については、御用留からは知ることができない。

御用留の無尽については、二月十日隆平は長沼陣屋に出向き、「当月十三日、定日之通、無尽興行仕候」と事前に報告し、「当十三日当村堰入用無尽興行致候」として実施している。更に、閏六月「同十五日堰入用無尽興行仕候」の記述があり、同廿四日（二十四日）には隆平が再び役所に赴き御礼している。興行は夕方に取り始まり翌朝に終了すること、開催には陣屋役人の立合が必要なこと、彼らには立合銭が後日支給されること等々、一連の動きを知ることができた。無尽（講）開始から終了まで一連の流れはどのようなものなのか知りたい。

さて、「例年之通御祓持参相配申候」の御祓の中身は御札と伊勢暦であつたのだろうか。この頃、御師は商売もおこなっていて、扇・帯・茶・白粉などの品物を取り扱っていた。想像すると、紋右衛門の奥様にも喜ばれたかもしれない。なお、三日市（みつかいち）大夫【三月廿七日】は、竜大夫、福島みさき大夫と共に、規模の大きい御師の一人である。

#### 四 御遺骸御通行のこと【九月十六日】

信恭院様御卒去に伴い、滑川村地区内御通棺は九月十六日六ツ半から五ツ時になる予定であつた。御通行の節、「見物人未明方夥敷河原へ有之候」とあるので、周囲から駆け付けた人々は相当数あつた様子が確認できる。私のなかで思い出されるのは会津藩主保科正之の逝去である。「家世実紀」によれば、保科正之は寛文十二年（一六七二）十二月十八日御逝去、同廿二日夜四時（江戸）三田屋敷を出発、同晦日会津着。下向に際し「今度御供之面々、御柩を一大事ニ存謹み声をも不出、静り御供可仕候」と声は荒

くせず、謹み静りお供する旨を申し付けた。

この事から見物人も出来るだけ避けたいため、関東圏では午前二時、零時など真夜中の宿出立であつた。白川駅からは雪中のこともあり、日中の行動であつた。

藩主逝去に伴う国元への下向はどのようなものなのか。時代により異なるのか、各藩の事情によるものなのか、多くの事例を知りたい。

#### 五 伊達藤五郎のこと：九十八ページ

荒武先生から教えていただいたことなのですが、私が参加している「白石古文書サークル」の講座文書の中に「文政拾壹年三月八日 伊達藤五郎様 江戸御下り被遊、當所御泊り」と御用留と同一の名があるのを知りました。調べてみますと、御用留文書から「依之一昨十四日伊達藤五郎様賑々敷御同勢ニ而御登被遊候」と文政十年十一月十四日藤五郎は藩主斉義の病氣見舞いのため滑川村を通った。同月廿七日斉義病没する。同年十二月斉邦家督相続する。翌年文政十一年正月廿八日斉邦は將軍初の御目見をする。そ

の際藤五郎も拝謁を賜る。

斉義死亡による後継者問題のとりまとめ役の一人が藤五郎であったと思われる。藩内のとりまとめ、幕閣との協議・調整、諸藩諸侯への挨拶・周知などに二月末頃まで要したのではないか。その後に藤五郎は江戸を離れ、三月八日白石泊りとなったのではないか。

御用留は福島県須賀川市滑川地域の事柄、白石古文書サークルの文書は宮城県白石市地域の事柄、全く関係のない文書が伊達藤五郎を紹介されたように思えた。また、伊達藤五郎の先祖が伊達成実であることも知った。うむ三浦友和だ。NHK大河ドラマ「伊達政宗」の中で「武の伊達成実」を三浦友和、「智の片倉景綱」を西郷輝彦が演じ、引き締まったドラマ仕立てになっていたことが忘れられない。

関心のあることはその他ある反面、全く分からない記述も多くありました。単に翻刻するのみで情けない有様です。ただ、古文書を始めて十年、ほんの少しですが、落ち

着いて古文書に向き合えるときもあるこの時宜に、桑名家文書御用留に出会えたことに感謝いたします。今後も好きな古文書をじっくり時間をかけて取り組めれば、「難有仕合ニ奉存候」と思っている。

(編著者)

荒武賢一郎 東北大学東北アジア研究センター  
上廣歴史資料学研究部門教授  
武田 作一 白石古文書サークル会員

---

東北大学東北アジア研究センター叢書 第74号

文政10年東北農村の御用留  
—須賀川市桑名家文書から—

---

2023年12月22日発行

編著者	荒武賢一郎 武田作一
発行者	東北大学東北アジア研究センター 〒980-8576 仙台市青葉区川内41
印刷	有限会社 明倫社 〒989-3124 仙台市青葉区上愛子平治1-36

---

ISBN 978-4-908203-33-6